

北辰會雜誌

明治二十九年三月二十日發行

(非賣品)

第九號

第四高等學校北辰會



北辰會雜誌第九號目次

論說

馬來群島歴史 岡村金太郎
 史料に就て 浦井鏗一郎
 東西文化の調和 得能文
 生物の進化 丸山環

史傳

成島柳北翁(完結) 金風樓人

文苑

雪夜讀書 蓬生庵
 歌二十餘首
 袖時雨 花曙散史

俳句十數句

人品論

安曇巡遊記

詩十數首

月岡生

垂東散史

雜錄

蠍の話

漫遊漫筆(其一)

故郷

地質學的太古の人

K. O. 生

文科大學 太瑯樓主人

九華生

天外生

雜報

演說討論部大會記事外十數件
 附錄 武藝大會記事

論說

馬來群島の歴史

馬來群島の歴史

教授 岡村金太郎

馬來群島の歴史とは之を政治的に論ずるにあらず又地質上の話にもあらず専ら生物の分布に依り群島現成の由來を述べ以て生物學の關聯する範圍の弘遠なるを知らしめんとするにあり

凡そ生物は一に温度と緯度とに因りて分布するか如く考ふるは一般世人の常なれども決して之のみにて能く複雑なる分布の状態を説明するに足らず勿論温度と緯度とに依るとは誤れるにはあらねども之れ一を知て未だ其二を知らざるものなり今温度と緯度とに依りて同生物の分布あるものとせば南アメリカとアフリカとは概ね同一なるべきに其然らざるは諸君の既に知る處ならんマダガスカルはアフリカの東岸を離れて程遠からぬ島なれど其産物はアフリカとは全く異なれり茲に話さんとする馬來群島中ベリとロンボックとの二小島は其距離僅に十五哩にして漁船なれば僅に二時間も懸るべき處なれば元より緯度も寒暖も異なるべきの理はあらずされば生物は大抵同じかるべきに其實決して左にあらで動物も植物も全く別天地の如き状ありと

されば生物分布上最も大なる關係を有するものは何ぞやと問はれ隔離(Isolation)と稱する事實こそ至大の力を有するなり隔離とは土地と土地との連絡の斷絶にして動物は之が爲に交通を遮斷

さる此隔離は或は險ゆべからざる高山を以てするとあり或は渉るべからざる海洋にて遮らるゝとあり山なれば越すに越されぬともなけれど峯の白雪深くして何時消ゆべくもあらざれば能く之を險ゆ能はず又之をしも險へたりとて地方の氣候寒暖の變化に依りて食物となるべきものゝ存否も知れず或は襲敵のあるれば能く一地方より他地方に分有するは勿々に易からじ海洋は殊に隔離の大なるものにして地上を歩する哺乳類は三百哩以上に在る島々には移ると能はず左れば一地方の動物は一旦或原因に依りて隔離せられ其本國の動物と往き來の便り絶へぬれば其他に於ける外界の種々情態の異なるより數十百代を経るに從ひ其本國の原種とは大に異なる種となるべし當北陸の人々は今こそ他國の人々と多少交通の便あれど程遠からぬ昔には零ぼ隔離の状態にありたるゆへ自然と他所と氣も變り一種異様の性質は自ら發達したるなれ

諸馬來群島は赤道以南十度の間にありて馬來半島より濠洲迄鎖の如く連なれる島々なれば位置より見るも全島は動植物の分布上著しき差なかるべきに其實全く之に反するは實に隔離に因る所以にして之を説明せられたるは彼の進化論の大家として吾人の常に尊崇する Wallace 氏其人なり先づ第一にセレンベス島に就て論ぜんに其形異形にて W と云へる字の如く東にマラッカ、ニューギニア、西にはボルネオ、ジャバ、スマトラ南は濠洲其北はフェリッピン群島に隣りして東南北の三面は港灣多く海も亦百尋以上千尋の深さを以て取り圍まれ所々二千尋餘に達する處あり唯西岸のみ突出少なく海底も亦稍淺し然れども猶ほ百尋以上千尋に達し殆ど四面環らすに深海を以てせられたり哺乳類は十六種にして其内四種は濠洲及びマラッカに存するものにして十二種は概して言へ

ば他の馬來群島又は亞細亞大陸の産に類するものなれども其中或種は甚だ奇異なるものもあり更に此十二種の動物を見るに其中鹿の一種とシベット獸との二種は多分人類に依りて移殖せられたるべしと思はるゝものなれば論ずるに足らず殘餘十種中五種の栗鼠類は此島に特有にして東方には絶へてなく一種の豚と *Tarsius* とは他の類と大に異れり特に此島の怪物とも稱すべきは三種にして其は無尾にして狒狀の猿と羚羊狀の水牛と *Babirusa* と稱するもの之なり他の動物は此島に特産なりと雖も其代表者は他所に見るべけれど此三者は全世界中唯此一小島にのみ知らるゝは奇と云ふべし

次に此島の陸島を見るに百六十四種あり其中

九十四種

本島特産

二十九種

ボルネオ及他の馬來群島に産するもの

十六種

マラッカ群島及濠洲産

二十五種

付近の群島に普通なるもの

左れば本島特産の鳥類は比較上甚だ多し尙此九十四種の鳥類は六十六屬に屬するものにして其中

二十三屬

付近の島々に普通のもの(即ち種は異なるも屬の代表者あるもの)

十二屬

本島特産

二十一屬

馬來群島に其代表者あれどもマラッカ若くは濠洲になきもの

十 屬

マラッカ若くは濠洲に類縁者あれども馬來群島になきもの

左れば本島の動物は四隣之島と異なりて餘程異形のもの多く且つ哺乳類は甚だ少くして鳥類と同じく西隣諸島即ちボルネオ及び他の馬來群島乃至亞細亞大陸産のもの之が東隣諸島即ちマラッカ群島若くは濠洲産のものより多れば自然本島は其昔西隣諸島と一般に亞細亞大陸と連りて後ジャワスマトラヤボルネオより以前に離れたるものなるべしと考へざるを得ざるなり然れども哺乳類の甚だ僅少なる事實は斯く考ふるを許さず何となれば臺灣は本島よりは尙ほ小なる島なれど殆ど二倍の種を存すればなり故に若し其以前大陸と連絡し其後離れたりとせば勢ひ尙ほ多數の動物を存すべきの理なり依而茲に二個の假説を立て、之を證明せん本島は其大陸と離れたる以來漸伏作用の爲に過半は海中に沈没し之が爲に陸棲の動物も大半死滅したるのか或は始より一獨立の陸にして現成の有様より遙に東方に擴まりて唯暫時亞細亞大陸と連絡し或は寧ろ全く連絡せざりしも餘程大陸に近よりて哺乳類の或者は途中に島を打越て茲に移るを得たりし様の有様にありしにはあらざるか此二説を考ふるに乙説或は正しきものならん歟何となれば前記三種の怪物は島より島と超へ行かば狹き海峡は随分渉るに難しとせざる類なればなり尙ほ之を地質學に訴へて論ぜんに若し本島が其以前亞細亞大陸の一部をなし其地の獸類も存せしが其後離れて島となり夫より陸地は陥落にて漸く減少せしものなれば此中一二の遺骸にして地中に存せざるともなかるべきに其否らざる所を見れば始めより大陸とは連接せざりしや知るべきなり

然らばセレベスは濠洲に陸續せしやと原ぬれば之亦然らずと答へんのみ元來濠洲には哺乳類とては最下等の有袋類 *Marsupialia* と稱する類のみにて吾人の通常見馴れたる犬猫牛馬の如きすらな

く之等は皆近世人爲の移殖に係る處なり左れば若しセレベスが濠洲と連絡したりしものとせば此類の動物も多分に此島にあるべきに此類の動物は僅に *Cynus* 屬の二種のみにして他は全く見るを得ず却而前にも示せる如く西隣地方の動物と類似のもの多し此二種の動物の此地にあるは曩にも云へる如く其昔現今の有様より遙に東方に擴がりて直接にこそ續かざりしも間々打越て移り易かりし有様にありしに依るならん

此判断は全く臆説なれどあながちに理なしとして打消すとも又非なり何となれば水陸の變動は今も昔も變りなく昨日の淵は今日の瀨と變るは浮世のみならず又地球の常なればなり且つ此邊一帯の地勢を見るに大島小島打混り宛然基石の散る如く海底は深淺錯雜し深き處は二千八百尋に達する處ありセレベス島の四圍深海を以て繞れるも其島の古きを證するに足るべし且つ此邊は有名な火山脈の所にしてスマトラ、ジャバ、バリ、フロリスを経て北に彎曲しヒリツピン群島に連れり先年(明治十三四年頃なりしか)大破裂の爲に十數日朝太陽は反對貿易風の齎せる灰の蔽ふ所となり常の光を失ひて恰も赤き玉の如く見へたりシクラカトアの噴火山も實に此脈中に在り故に此邊には激烈なる地質上の變化ありしと推して知るべきなり

斯くセレベスの動物界の有様は非常に複雑にして濠洲何れに數ふべきか殆ど判定に苦しむ如き狀あれどもウォーレス氏は此島を以て寧ろ濠洲に屬すべきものとせり其理由は本島の鳥類は西隣地方のものに類するもの多しと雖も亞細亞及び其他到る處として見らるべき普通の鳥類は一もなく亞細亞地方には只代表者として見るべきものあれどもセレベスには夫等非常に異なりて存する

を以てなり且つセンベスの西南バリ島の動物はジャワ島等のものに近くロンボックのものは濠洲のものに似るもの多きが故に氏はバリとロンボックとの間を以て動物分布區域上東洋界 *Oriental region* と濠太良利亞界との境とせり學者此境界を *Wallace line* と云ふ此線は即ちロンボック、センベスの西岸に沿ひてヒリッピン群島の南端に走れるものなり又濠洲人種と馬來人種との境界線も此處にあつてマラッカ、ポールー、フロックスの西岸に沿ひて走りセレベス、スンバワとを境ひするものなり人類は野蠻なりとて幾分か他の動物より移住の力多ければ亞細亞洲の人類が他の動物より先進して濠洲に侵入したるは自然の勢なれど概して云へば人類の境界線も他の動物の境界線と大同小異なるは面白しと云べし故に人類の分布も亦他の動物と同じく同一の原因に依ると是非もなき次第なり

次にボルネオを中心とし之が周圍のジャワ、スマトラ、馬來、ヒリッピン諸島の動物界を通觀するに甚だ奇異なる事情あり先づボルネオとジャワ、スマトラ及び馬來半島とは元と大陸の一部を成せしと一目にして知るべく其間の海も五十餘尋に止まり皆百尋線の範圍にあり其海底の淺きは以て離れたる年代の古からざるを證するに足る獨りヒリッピン群島は亞細亞大陸との間に二千百尋に達する深處の廣大なるものあり然れども諸島の動物は大抵亞細亞大陸のものど全く同一若くは酷似のもの多し例せばスマトラ、ボルネオの象及び猿 (*Tar*) と云ひスマトラ、ジャワの犀と云ひ其他の獸類鳥類も大抵同一のもの多し其内ヒリッピン群島は稍異なる種に富めり今ジャワ島と他の馬來群島との動物を比較するに

哺乳類十三屬

ボルネオ、スマトラ及び馬來半島にあれどもジャワに存せず其中象類及び馬來熊の如きものを含有す

鳥類二十五屬

ボルネオ、スマトラ及び馬來半島にあれどもジャワに存せず

且つ殊に奇とするはジャハはスマトラ、ボルネオに類似するよりは遙に遠き亞細亞大陸に類似の動物を有すると之なり而してヒリッピン群島は之等諸島よりは稍異なりて其島に固有する特産の動物はジャワに特産の動物の數に優れり如何にして此事實を説明すべきかは唯隔離の一點にありて一地方隔離の後其地方の生物は土地の情態によりて固有の性質を發し固有の發達を爲し以て固有の種となるとは實に年月の長短に従ふものなればヒリッピン群島がジャワより多くの特有の種を有するは其亞細亞大陸より隔離したる年代の他の諸島より遙に昔にあるに由る所以なり

凡そ隔離の爲に動物の著しき發達を遂げたるは濠洲の右に出るものなかるべし濠洲の哺乳類は前にも云へる如く唯マリスピアリア類のみにて成り之を以て他邦の哺乳類を代表し他邦に於ける種々様々の哺乳類は悉く此類の動物中に現はれたり蓋し此類の動物は現今濠洲を措ては唯亞米利加の一地方に僅に其餘命を全ふし漸く其種類を保存するが如き有様なれども化石としては地球上處として現はれざるはなしと云ふも過言にはあらざるべし抑も此類の動物は造構發生の點より見るも鳥類、爬蟲類の如き者に近く哺乳類中最下等のものにして此地球上に始めて現出せる哺乳類なり故に此類が地球上に現はれたる頃には今日見る如き獸類は之なくして此類の物のみ世界一般に播布し居たるなり其頃や濠洲は餘程今日よりは其境域廣大にして他の大陸と連續せしか或は直

接に連続せざりしとするも兎に角動物が他の大陸より移住し得べき地形なりしと見へて世界の他の部分と同じく此地にも廣がりたるとなるべし其後幾くもなく濠洲は他の諸大陸と全く離隔して以來再び接近したる事なきを以て哺乳類は唯有袋類のみ存せるなり然るに大陸に於ては間もなく諸種の高等哺乳類發育し強暴殘忍なる獸類輩出しければ生存競争の理として優勝劣敗は免かれ難く有袋類の如き弱輩は他の獸類の亡ぼす所となり種屬絶滅して影を止めず唯化石となりて地中に昔の榮化を夢るのみ今日其餘黨の亞米利加に只僅に數種を止るが如きは宛も平家の落武者が此處の山間彼處の溪壑に餘命を全うしアイヌが北海の邊陲に蟄居すると一般なり然るに濠洲には幸にして此等強敵の發生せざる前大陸と離れたれば不思議に死滅の憂を見るとなく世移り星換ると共に其中に生存競争を生じ世は有袋類全盛の有様にて種々の種類を生ぜるなり

諸ツヤア島の動物が如何にしてスマトラ、ボルネオに似もやらで却て遠き大陸に似るもの多きかを説明するやと云はゞ先づ左の如く説かんのみツヤアが未だボルネオ、スマトラと共に大陸の一部をなせし時に即ち地質學上第三紀と稱する時代にして其末葉に至り氣候は漸く寒冷となり今の赤道地方なども太く温度を減じ歐洲一面氷を以て蔽はれしと稱せらるゝ程の時ありし之を *Glacial or Period* とは稱するなり左れば北方の動物も時を得顔に南進し南方温暖の地のものは時を失ひて窮迫し或は死滅したる者もあるなるべし正に此頃ツヤア島は大陸より移住せる數多の動物を載せたるまゝ大陸より分離せり其後氣候再び和らぎて漸次今日の如く寒温熱の三帯を示す様なりたればボルネオ、スマトラ等に徘徊せる北方の動物は季候漸く己れの生活に適せざる様なるに先ち

遠く古郷に逃歸り唯其邊に氣候に適せし動物のみ此部分に存せしが後ボルネオ、スマトラと離れたるなり左ればヒリッピンの特有種に富める理由も分かり濠洲の有袋類のみなるとも明かにツヤアの大陸に似て間の島々に似ざる所以も知るべきなり

史料に就きて (北陸史談會所演全會々報轉載) 教授 浦井 鍾一郎

抑本會の目的や實に史料を蒐集するにありされは本日は史料に就て其大概を演述せんとす時日俄に逼迫整理に違あらず順序錯雜の嫌は乞ふ之を諒せよ

凡そ如何なる學問にても材料を要せざるものは有らざるべしされど或種類の學問に在りては或程度まで材料を蒐集せば其他は之を蒐集せし人士の手腕器量に委せば則其事業をなすに於て足れりとなす然るに獨り歴史に於ては然らず暫くも材料なかる可らず豈其間に程度なるもの有るを許さんや夫然り史學の重んずる所は材料を蒐集するにあり隨ふて之か眞偽善惡を精撰せざる可からず此を以て材料を撰ふと正確なれば論する所の根基確然として便ち立つ若夫材料の選擇に心を用ひずんばたとひ引證正確にして記事に巧みなるも自ら正鵠を失ふて社會の現狀を眞寫すると能はず所謂勞して功なきものなり否啻に功なきのみならず笑を後世に貽し或は大に天下萬世を謬るの恐れあり此を以て史家は常に意を此處に注き之か研究に多くの歲月を費すなり之を料理に例へんか厨人能く庖刀の妙ありと雖とも用ふる所の材料悪しからんには亦食ふに堪えざるべし厨人や實に勞して功なき者と云はざる可からず材料の歴史に樞要なる概此の如し然るに惜哉古來我國の史家

なるもの史料に注心留意するもの頗少なきをや乞ふ見よ世人か愛讀する所の太平記日本外史を實に後世の非難を免れざるに非ずや唯大日本史のみは頼に少しく譏を免るべきかされど皮肉に之を云へば充分に史料を研究せず手あたり次第に之を蒐めて書き下せるものならんされは眞に所謂歴史には非る也蓋録々たる大家の手になりながら尙ほ此の如きの弊を免れざるは畢竟史料の精撰を怠りしものと云はざるをえず又彼の外史の如きこれか引用書目を觀醜て又内部の記録を見るに其古代は尙少しく恕すべきもの有りや雖も中世以後史料の充分ならざる時代に到りては大に誤謬を免れず蓋當時坊間に流布せるものに就て史料を求めしに職由せずんば非る也乃ち山陽が源平を畫くの時に當りてや引て以て材料となせし者は則ち源平盛衰記平家物語義經記南北朝室町時代には則ち太平記織田豊臣に至りては則ち信長記太閤記甲陽軍鑑徳川氏に至りては則ち武徳大成記落穂集岩淵夜話を取るに過ぎず而して以上述ぶる所の書籍たる實に一片の價値だに無きもの也蓋此等の書たる實に當時の事實を考覈研究して然後に之を編せしには非ず僅に傳説及び坊間の訛言を集め専ら讀者を喜はしめんとするにあるのみ此を以て文章を巧みにし句調を婉麗にし従ふて往々事實を曲げて附會するを免れずされば史料に資すべき者殆皆無と云ふも余は其不當の言に非るを信す然らば則ち落穂集岩淵夜話甲陽軍鑑の如きは文章さらに巧妙婉麗ならず文を屬するの拙なる讀者をして轉厭倦に堪えざらしむるものは抑も人目を喜ばす爲めなるかあらず文章の婉麗以て人目を喜はしめんと欲するに非ずと雖も實に己れ一個人の判斷を以て褒貶を擅にし自説を事實に附會して以て後世人士に傳へんとするにあり然らば則ち其弊たる亦太平記以下諸書と擇ぶ所あらざる

也此を以て之を觀る外史の如きは眞の所謂歴史なる者には非る也

近者史類の材料に資すべき者を編纂せしもの近藤瓶城氏の史籍集覽ありと雖も收むる所亦僅に坊間に流布せるなり史料と稱するに至りては則ち未し就中源平盛衰記は水戸家の訂正にかゝりしものと云へども其どるに足らざるは便ち一耳最近に至りて近藤氏又續史籍集覽を出版せんとす收むる所大に取るに足るべきものとは稱し難きも材料の豊富なる實に前者に優るを覺ゆ

以上説く所の如く古來日本の史家は多くは史料の精撰に盡さず然りと雖も俄に之を以て史家を責むるが如きに至りては時勢に迂なる僻論といふべし況んや山陽先生の外史の如きに至りては其目的とする所は實に此に非ずして彼にありしに於てをや雖然史家か一般に史料の精撰を闕きしは事實にして亦疑ふべくもあらず然らば則ち其精撰を闕きしもの抑も何の故ぞや他なし當時社會の事情は之か蒐集に不便ならしめしを以ての故而已されば山陽先生をして心を材料の蒐集精撰に用ゐしむるも亦何等の效果もあざりしならん蓋當時にありて無上の史料とも稱すべき歴代帝王の宸翰武將公卿の手になりし文書及當時自ら目撃せし者の手に成れる日記等は多くは縉紳貴顯神社佛閣の寶物となり所謂學者なる者か未だ大に尊敬せられざりし當時にありては此等奇珍の文書を手にする豈容易の業ならんや山陽先生の撰ぶ所多くは市上に行はるゝ誤謬多きものにとりし所以のもの亦宜なりと云ふべし余嘗て帝國大學に在るや親く之を星野博士に聞く博士嘗て史料蒐集の目的を以て奈良に在るや一日大乘院に至る該寺藏むる所の文書中世記以上のもの一々長持に入れ其數凡そ九十函若夫中世以下に至りては豈枚擧に遑あらんや水戸黃門嘗て大日本史を撰ひたまふ

や特に人を派して文書を披見せしむ寺吏其煩を厭ひ僅に示すに五六冊子を以てす使者之を見て大に喜び無上の史料として持歸れりと是寺僧の親しく博士に語るところなりとかや當時有力の大藩の使命を奉ずる者に於てすら尙且然り况んや山陽先生の如き箇人に於てをや其史料を集むるの難思ふべきのみされは史料の粗撰を以て史家を責めんより寧ろ史料を求め難き時に當りて能く歴史の編纂に従事せし勇氣に感ぜざる可らざる也然るに今やこれに反し求むるとして得ざるはなし豈聖代の餘澤にあらざとせんや余亦これを某先生に聞く今なほ司法省には徳川幕府より引渡されし書類頗多く文庫に充盈せり然るに史料の多きに過ぐるを以て今や蠹魚の蹂躪に委するあるのみと蓋是等の史料を調査精撰するは一二少数人士の一朝一夕にして能くする所に非ず頗大事業に屬するの故を以て未だ着手の違わらざる也勿論先是同省に於ては徳川氏に關する文書を出版せしとあり名けて徳川禁令考と云ふ前集十五冊後集八冊博聞社之を上木す實に大木喬任伯の司法卿たりし時なりとす雖然これ亦直接此文庫の中に就て編纂せし者には非ず多くは從來の文書に據るものにして誤謬一ならず少くとも三四の僞文あるは確實なりとす極近來に至りて豫約を以て再版せり恐くは前の所謂僞文なるものも削除せられしならん今後は便宜を以て益此等の文書を公にするに至らんとを余は切望に堪ざる也

近來日本には完全なる歴史なしとの批難往々にして耳にする所甚しきに至りては我邦の耻辱なりと云ふものあるに至るさはいへ外國と云へども亦必ずしも完全の歴史あるにあらず英國にありては「アトキンソン」「マクドナルド」の憲法史の如きは皆有名なる歴史なりと雖ども多くは政黨に偏し

或は民權黨 (Whig) 或は王權黨 (Tory) 各其黨する所を是として其反對する所のものを誹議す蓋「マクドナルド」の如きは民權黨に黨するを以て進歩は民權黨に求むべくして活潑は王權黨に望むべからずと絶叫せり然るに其實トリー内閣に於て數活潑なる運動を見るを得る也有名なる史家「マクドナルド」すら後世を誤る既に此の如し况んや其他をや只夫れ「フリーマン」の「スタットン」二氏に至りては史料の研究に重きを置きしを以て稍信するに足れりとすされど今日にても英國史としては實に完備せるものあらざるや論なし獨逸のランケ英國史を著せしに英國オクスフォード大學にてこれを英譯せしにても知らる蓋英國の完全なる歴史を有せざるは實に所謂歴史研究法 (Histori-schen Methodik or Methodologie) は獨逸國に起りて英國にては未だ著しき發達をなさざれば也聞く「オクスフォード」「ケンブリッジ」兩大學にありては目下獨逸の研究法を以て頗る英國史を考究しつゝありと其大成はなほ數年の後にあらん

且又西洋諸國に於ては歴史専門の書類雜誌の陸續發刊さるゝ者ありと雖どもこれ皆最近の事にして英國には英國史學雜誌 (British Historical Review) 獨りには歴史月報 (Historischen Zeitschrift) 而して余の寡聞なる米國には未だ此種の雜誌なきものゝ如し此を以て之を觀る歐洲各國と雖も研究法の具備せざる瞭然として明か也何ぞ我研究法具備せざるの故を以て國恥となす者あらんや夫れ此の如く晚近に至りて史學雜誌發刊の氣運を促かせしは實に史料の世の中に現出せしに由るもの也蓋十六世紀以前に在りては歐洲と雖ども亦日本の如く史料を顯はさず當時政府には記録局 (Archiv) なるものを設け其國に關する材料文書を保存すされど此古文書局に藏むる文書は非常の

手續を経ざるにあらすんは容易に披見すると能はず此を以て當時歐洲の歴史家が取りて以て史料となせし所のものは實に坊間に流布する文書にして誤謬はた頗る多かりき我大學には如何にして得たりけん十六十七世紀間英國々會の速記録あり僅に之を披見するもなほ英國史の誤謬の如何に多きかを察するに足らん元來英王「リチャード」二世は暴君として英國史上に知られたる王なるか此議會速記録を誦讀するに全然しからず實は豪邁不屈の英主なりし也然らば則ち何か故にかくも甚しき誤謬を傳へたるか云へば抑も亦深因なくば非る也「リチャード」二世に次て王位に立ちしは「ランカスター」家にして實に前王の位を奪ひて篡立せしものは是を以て己が非を被はんかため先王を誣ゆるに暴君を以てし竊に史家と結托して遂に天下萬世を誤るに至りし也

古代に在りては歐洲に於ても亦史料をうるに難く從ふて史上に誤謬を免れざりしと如此と雖も近代に至りては有益なる史料は憚からず之を有識の人士に示すを喜び一千八百十五年以前の記録は勿論以後のものも雖も歴史家には喜ひて之か披見を許すに至れりこれ輒近に至りて史學専門雜誌の彬々として輩出する所以にして從ふて歴史研究法の盛昌となりし所以也

我國にも大學に修史局あり材料頗る多く積て山をなし斷簡零墨頗參考に資すべきもの多々ありと雖も惜哉衆庶をして之を見せしめずこれ余輩か頗遺憾とする所西洋諸國の如く之を公開し尙一步を進めて之を公にせば更に大に裨益する所あらん唯之を出版するに當りて編輯の整理注宜しきを得は材料の多きも亦煩ふに足らざる也現に獨乙に於ては政府と議會と協力して古來の史料を編纂し大部の冊子を出版せるあり

歐洲に於ける記録局中尤も名あるは羅馬の Vatican 宮殿の圖書館なりとす此文庫は法皇「ニコラス」第五世(一四四七—一四五五)によりて創設せられたるものにて彼の「世界に於ける日本人」は實に史料を此に取るものにして往時渡邊洪基氏の羅馬駐紮の公使たるや人をして其文庫に就て二三を謄寫せしめしもの即是也抑も此文庫は實に歴史上に關係あるのみならず亦政治上にも大影響を蒙らしめぬ蓋一千八百八十五年獨乙と葡萄牙の交渉事件是也本「カロライン」「ペルー」の二島は古葡萄牙全盛を極めし時代より以來の領地となりしを葡國漸く衰ふるに至りて手を二島より引て葡人の隻影だも見るとを得ざるの有様なりき當時獨乙は鐵血宰相「ヒスマルク」の下にあり此間に乘して軍艦を派し直に上陸して獨乙國旗を樹てたりき葡國大に驚き古來該二島は葡領にして吏を派して統治せしめしとは事實なりと云ひて大に獨乙の處置を批難せしも獨乙可かず現に其證據なきを如何せん獨乙の占領は正當なりと云ひて互に論難往復し將に干戈に訴へんとするの危機に迫まれり此に於て「ヒスマルク」自ら出て、談判の任に當りぬされどこれ本政治上の問題にはあらずして事實上の問題なれば流石の「ヒスマルク」も持て餘しされば愈葡領との證據文書あらば出せ見んと意氣まきたり蓋「ヒスマルク」は證據文書のなきを知れば也而して實に葡國は文書を有せざりし也是を以て葡國大に苦み仲裁を羅馬法王に請ひしに法王は其請を納れ更に該文庫に就て古文書を探らしめしに案外にも當時該二島の葡領なることを證するに足るの文書を發見し直にこれを葡國政府に送りしに其喜び云はん方なく直に「ヒスマルク」の面前に差出せしに「ヒスマルク」終に辭なく茲に談判の結了を告げたり史料の大切なるを概ね此の如し

以上述べ來りし如く歴史の材料となるべきものを人呼んで史料と稱す蓋史料とは頗宏大なる意味にして地中より採掘せし古錢の如き石鏃の如き雷斧の如き刀劍の如きはた古文書より神社佛閣に藏むる寶物等其他實地を見聞せしもの、日記老人の後裔へ傳へし遺説等數ふるに違わらざる也されば史家は己れ調査せんと欲するには先如何なる史料のあるやを知らざる可からず此等の事に關して西洋に在りては Heintze と稱す「ホイリスチック」と云ふ語は希臘語の見出すといふ語より來りたるものにて史料に付て研究するを云ひ自ら一科の専門に屬する者なりこは他日に譲り今はたゞ單簡に史料の種類を述べんとす

史料の夥多なると前述の如くなるがこれを學術的に分類せば大約三種となす

第一遺物 (Relic)

これは過去の事實にして今日に残り結果を見て事實を察するものにして此中に入るべき者は頗多きが要するに古人の故意に残さんと欲せざりしもの、今日に残りし者也例之傳燈寺穴居の迹古代の遺物あるを見て古代人類の此處に蕃生せしとを知るか如き即是にして穴居の迹必ずしも古人が故意に残さんと欲せしには非る也或は粟ヶ崎附近に於て石器の發掘せらるゝを見て古代住民の狀態を察し九州地方に於て多く朝鮮人の遺物を發見しては當年朝鮮との交通頗活潑なるものありしならんと察する等皆これ「リ、ック」に非るはなし其他寺院殿堂道路等も亦此種に屬し特に道路は西洋に於ては羅馬の Roman Road の如き我邦にありては大津より比叡山に至る道路の如き頗る關係あり彼比叡の大道の壯大なるを見るものは當時叡山の僧

徒か如何に跋扈せしかを推察するを得べけん其他水道城跡は以て都會ありしを知り從ふて文明の程度を察するを得文學美術習慣等皆是等より知るを得言語によりて國民の關係(例之日本と朝鮮馬來半島に於ける關係と云ふが如し)を知り證文覺書の如き皆後世に残さんと欲せずしてこれを今日に傳ふる者皆此種に屬す

第二紀念物 (Monument)

こは全く之を後世に残さんとにもあらず又全く之を後世に傳へんにもあらず半は實用の考あり半は後世に傳へんとするの考あるものにして換言せば現在の利用と并に後世の紀念となさんとするにある也肖像は其人を忘れさらんか爲めにして之を後世に傳へんと欲するには非ず墓銘碑文は墓下の人を顯はして後世に傳ふるを主とし其他鐘の銘人の行狀、書、燈籠銘、古地圖、刀劍、家々の常紋特更に作りし紀念碑は以て其人物の性行を顯はし其他人の姓(例之浦井とは本越前柴田の臣下にして浦井庄を領すよりて浦井と稱するに至るか如き)を察し加賀能登の地名を見て「アイノ」人種の名つけし所なるを知る等皆この中に屬す

第三記録 (Source)

こは當時の必要に應ずるよりも天下後世に貽すを主とす故に家傳の年代記、日記、覺書、奇談等皆この中に屬するものとす

以上述べたる所は西洋の「メソドロッチ」によりて分類せしものにして單に學術的に史料の性質を以て分類せしものにて我雜誌を編纂するに當りて直に之を應用せむとには非ず如此者は皆史料に屬

するを示せしに止る且又我邦は我邦の性質あるを以て其特性に従ひて分類せざる可からず例せば同じく朝廷より發せらるゝ命令にても我邦にては繪旨といひ勅書といひ宣旨といひ院宣といひ女房奉書あり令上あり官符あり宣達あり武家より發するには教書といひ内書といひ下知といひ執達といひ又朱印黒印など西洋にはとても無き者など多しされど一般に此分類に従ふも夫れ或は大差なからんか我史談會窮竟の目的は實に此史料を蒐集するにあり諸君乞ふ奮ふて斯事に従へよ余短才不學なりといへども諸君の驥尾に附して應分の力を盡すを辭せざるべし

東西文化の調和

講師 得能 文

今人往々にして謂ふ、東西の文化は今まや我邦に於て衝突せりと。然り、寔に二者の衝突は我邦に於て初めて之を見るを得べきなり。然りと雖も衝突は畢竟衝突のみ、未だ此等の間に調和融合あるに非ざるなり。蓋し所謂東西とは地理上の區分にして、人種の區別に非ず。故に印度はひとしくアリアン民族の國なりと雖も、地理自ら東方に屬す。而して其文化も亦た東方の趣味を有するを見る。西歐の文化は希臘に始まり、希臘文化の或部分(少くとも其大部分)は東方より得來たりしものなりと雖も、幾千年の間には東西自ら別種の發達を爲し來りしは、一目瞭然たる次第なりとす。即ち西歐自ら西歐の發達あり、東亞亦た自ら東西の發達なくんばあらず。

支那三千年の文化おのづから獨得の意義と發達とを有す。中古唐宋の間に於て印度思想の傳播してより、其間に一種の融合あり。宋の中世より明に至りては全く支那固有の思想と印度の思想と

は渾然として一體を爲し、其影響は遠く我邦に波及し、徳川時代三百年間の文化を助長したるは毫も疑を容れざる所なりとす。孔子の儒教と印度の佛教とは、其根本思想に於て大に逕庭なきに非ざるも、儒教は次第に觀念的の方面に傾き、佛教亦た實行の方面に傾き、漸次に互に接近し來り、相共に東西文化に大原動力を與へたりき。况んや、支那の思想は儒教の實行の教義のみならず、老莊荀列の如き幽玄高尚なる哲理的分子に乏しからずして、此等のものは最も佛教——殊に大乘佛教と相類似するの點頗る多しと爲すに於ておや。印度の思想と支那の思想と互に調和すべきは論を俟たざるなり。而して是等の思想は我邦に於て盛んに其勢力を逞くし、儒佛兩道相並行して帝國人民の思想を養成し來れり。端なくも今や西歐の思想は混々として注入し來り、此に東西兩思想の衝突來るを見る。亦た盛ならずや。

然りと雖も、吾人は單に衝突のみを以て満足すべきに非ずして、二者を渾然融合するを務むべきなり。彼の長を取り短を補ふと云ふは、其名實に美なるが如きも、實はエクレクチックの思考に過ぎずして、一面より見れば却て思想の羸弱を示すに外ならず。吾人の當さに務むべきは二者の融合にあり。採長補短の如き姑息の計に安んずべきに非ず、今ま化學的用語を借りて云は、二者の混合に非ずして化合を務むべきのみ。蓋し西歐に在ても東洋思想の研究は決して忽諸に附し去られたるに非ずと雖も、言語習俗の異なるよりして實に容易ならざる妨害の存するを見る。而して我邦に在ては此等の妨害は最も其僅少なるを見るなり。嗚呼帝國は實に世界第一の幸運に際したるなり。吾人學に志すもの、豈に袖手偷安の計を爲すべけんや。吾人は決起して飛んで楡枋

を槍くの蝸鳩たる可らずして、須らく水撃三千里、青天を負ふて天闕するなきの大鵬たるべきなり。然り而して翻て現時の思想界に觀よ。果して能く吾人の希望に副ふに足るか。科學に、宗教に、美術に、果して能く東西の思想を融合して粲然たる光輝を放つに足るか。果して一小局部に齟齬して小争鬪を事とし、以て得々たるの觀なきを得るか。而かも是れ進歩の一階級として止むを得ざるの數なり。窃かに按ずるに、現時の狀勢は其れ猶ほ西歐のルネッサンス時代に像似する所ある歟。種々雜多の學問藝術は紛然として起るも、未だ其間に充分の調和を見る可らずして、神秘說あれば實驗派あり、形而上說あれば常識派あり、保守あれば進歩あり、頑冥あれば急進あり、固より此等のものは驟然たる文化の要素なりと雖も、要するに「スモール、スケール」のみ。西洋思想の受賣に非ざれば、支那思想の祖述に過ぎず。獨得獨立の思想は未だ充分に顯はれざるなり。是れ實に嘆すべきが如くなるも、彼のルネッサンスが近世文化の母胎たるを觀れば、今日の狀勢は誠に前途多望なりと云ふべきなり。而して能く此の好時機を利用して、獨立健全の思想を發揮するは豈に吾人青年の任務に非ざや。嗚呼 *Anglonga, via brevis!*

生物の進化

第一 ラマーク氏の進化説の概畧

九 山 環

昔來生物の歴史に關しては種々の異說ありと雖も始めて生物の種(スピーシス)變遷の説を主唱せ

しは「ジエンラマーク」氏なり氏は一千七百四十四年佛蘭西ピカルティに生る當時宇宙を説明するに二法あり一は有機物一は無機物なり而して後者は自然の定律の能く支配し得るものなりと雖も前者は敢て其支配の下にあらずとせり爰に於て氏は熱心以て生物進化の説を主張して云く今日地球上に棲息せる有機物の種類は許多にして枚擧する能はずと雖も其基源を尋ねるに元と單一なりしものが種々の事情の爲めに分化せるものにして彼生物の種の如きも太古は極めて單純なりしものなるも月を重ね歳を経るに従ひ變遷進化して遂に現今の如き複雑なる形狀を呈するに至れるものなり而して其生物の變化は云何にして生せしやと云ふに若し其生活の狀況變することあれば從て其造構及び大躰の形狀に變化を及ぼし假令同様の生活をなすものと雖も身軀を使役するの多少に依りて變化を來すものなりとす 今氏が唱ふる生物發達の四則は左の如し

第一則 凡そ生物は其固有の力に依りて徐々に其躰量を増加するものなり併て或

一定點に達すれば各部分の成長を止むるものなり

第二則 動植物躰は周圍の事情に依り必要を感じるときは之に適合する新機關を生ずるものなり

第三則 生物の諸機關及び躰力の發達は常に之を使用する度と比例するものなり

第四則 動物一生中に於て其造構上の變化より得たる性或は新に得たる性は必ず其子孫に遺傳するものなり

以上列擧する處其數四ありと雖も要するに氏の唱ふる處は用不用と遺傳との二に外ならず氏は此

二に依りて生物の變遷を説明せり而して彼生物は總て其形質を子孫に遺傳し子孫は亦能く其父祖に類似するものにして生物の諸機關は之を使用すれば益發達し之を使用せざれば愈退化するものなり

夫れ生物の變化に二種あり一は直接の變化にして直ちに生物の造構上に來す變化なり一は間接の變化にして其造構上に變化なきも生殖器に變化を來すを云ふ今氏か唱ふる用不用の說たる全く此直接の變化を説明せんか爲にして諸機關の用不用云何に依て生物の造構上に進歩及び退化あることは許多の事實に徴して明かなり例せば擊劍家の腕力に富むか如き車夫の足の強壯なるか如きは皆是れ常に之を使用するの結果にして日に月に其發達を來せし所以なり之に反して平素放逸を事とし毫も身軀の運動に注意せざるものは自ら羸弱の傾を生ずるに至る是れ則ち諸機關を使用せざるか故に益退化を招けるものなり 次に彼遺傳に付ては古來諸大家の大に議論ある處にして或は父祖の性は其子孫に傳はることなしとする說なきに非れども遺傳の行はるゝことは確實にして覆ふ可らざる事實なり併し乍ら其遺傳すべき性は必ずしも幼年或は老年に於て顯はる可きものに非ず幼年に得たる性は大抵其子孫の幼時に顯はれ老年に及んで得たる性は概ね其子孫の晩年に及びて現はるゝを常とす歸する處生物の進化に關し氏か主唱する處は用不用と遺傳との二にして麒麟の頸の長きも啄木鳥の舌の長きも一は遺傳の致す處にして一は該機關を使用する度多きを以て次第に其發達進歩を來せし所以なり

第二 ダルウキン氏の進化論の概要

チャールスロバートダルウキン氏は一千八百〇九年英吉利サリスピンレイに生れ有名なる進化論者にして自然淘汰の說に依りて生物の進化を説明せり回顧せば當時佛國の大家キユビエー氏の地球變動説は英人ライエル氏の駁する處となれり此好時機に際して「ダルウキン」氏出て種之起源（オリゾン、オプ、スपीシス）と稱する書を著せり書中記する處論據確實古來其比を見ず故に世人皆キユビエー氏の説を棄て、全く氏の進化説を贊するに至れり此書中に記載せる事實中主要なるものは次の二なり

第一 生物は非常の速力を以て繁殖するものにして其方法は、大抵幾何級數に依れるものなり

第二 子孫は大概其父祖に類似するも其間に多少相違の點あるを免れざるなり

先づ第一生物繁殖の結果は食物の不足及び住所の缺乏なり此二ある以上は自ら生物間に生存上の競争行はれざるを得ず既に生存競争あるときは優勝劣敗にして強者は殘存して益其子孫を繁茂し弱者は多く命を失ひ從て其血脉の絶亡を來すなり是れ實に氏の唱ふる自然淘汰説なり併し乍ら此競争の勝利者たるや其時機に應じて異なるものにして飛揚疾走角力等の場合に從ふて異なるか故に或は弱者にして勝利を得るものなきに非ざるなり 次に第二親子間多少の差異ある例證を擧れば彼犬の産生せる數多の子を一見せば大體互に相類似せるも精密に之を檢すれば身軀の大小毛色の濃厚の如き幾分の相違あるを認むるなり此類似せる點を遺傳と名く是れ全く其父祖の性の子孫に傳はりしものなり而して親子差異ある點を變化と稱す約言せば氏の說たる生物の種は古來

變遷進化せるものにして其進化の方法は全く自然淘汰に依れりと云ふにあり而して其種の變遷せることは分類學化石學發育學地理的生物的の分布及び現今種の變化より推測するに明々瞭々たる事實なるか如し

抑自然淘汰の生物間に行はるゝに付て尤も必要にして缺く可らざるものは生存競争と生物の變化なり二者各其用なきに非されとも二者相俟ちて後生物間に自然淘汰の行はるゝものなれば以下此二を略述せんと欲す

生存競争 氏の用ふる生存競争なる語は全く譬喩的の意義にして一生物の他物に倚賴することを總合して生存競争と名く或は生物各己の生活に關して他物に依るか如き或は生物の子孫繁殖の爲めに他物を倚賴とするか如き皆これ生存競争に外ならざるなり 之に加ふるに競争なる語は各生物には非常の危難あることを暗示せるものにして吾人若し自然の情態にある生物を一見せば其位置極めて安全にして定めて快樂多き生活を營むならんと想像し得るも其實大に然らず現に植物の如きは植物間の競争と動物加害の危難と氣候の寒暖及び地味の乾濕に對する防禦なかる可らず動物界に於けるも亦之と異ならず古來博物學者の研究に依れば蘭及び「うまごやし」の繁殖は猫の多少に關係ありと云ふか如き或はダルウ^ネ氏か二十有七の歳月を費し千辛萬苦して研究せし蚯蚓の多少と土地の荒廢との關係の如き吾人其豫想外の物の間に連絡を有するに驚くなり之に於て考ふれば生物間の競争は吾人の疎且つ遠にして毫も其間に關係なく連絡なしと認むる物の間に於てすら常に行はれつゝある一現象と謂つ可し

生物の變化 生物の變化に二種あり一は馴養せられつゝある生物の變化一は自然の情態にある生物の變化なり而して此等の變化に直接間接の二ありて直接の變化とは直ちに生物の造構上に生ずる變化にして子孫に遺傳するものなり間接の變化とは生物の生殖器に生ずる變化なり全胚生殖器は感受し易き性質なれば假令生物大胚の造構上に影響を受くることなきも生殖器は容易に其影響を受け變化を生ずるものなり而して此變化は直接に其生物の上^に現はれずして其子孫に至りて現はるゝものなるか故に名けて間接の變化と稱す 今吾人試みに野生の動物を馴養するに之を發達成長せしむることの大に困難なるを覺ゆべし或は吾人亂りに植物を培養するに其莖幹は益成長するも種實を結ぶこと甚た少し此の如きは皆其生殖器に變化あるか故にして吾人直ちに生物の上^に間接の變化を生ずるを見る能はざるも兄弟生れ乍らにして相異ると云ふか如きは全く間接の變化が生殖器に影響を及ぼして後生したる差異と謂つ可し

此直接及び間接の兩變化を生ずるに二原因あり外界の事情は其第一原因にして生物内部の機關の力は其第二原因なり此の二原因相俟て初めて直接間接の兩變化を生ずるものなりと雖も強て其輕重を論ずるときは内部の原因主要なるか如し其故云何となれば假令吾人は同様なる外界の事情なりと認むる時に於て生物に變化を生ずることあり或は異りたる外界の事情と考ふる時に於て生物に影響を及ぼさざることあればなり故に第二原因を以て重且つ要なりと云ふも敢て過言に非ざるなり而して此直接及間接の兩影響に依りて生物の上^に生ずる變化の方法に二種あり

第一 生物の慣習 是れ則ちラマ^イク氏の所謂用不用の結果にして雞の如きは

常に其手を使用する慣習あるに依り自ら之に變化を生ずるものなり

第二 隨伴の變化

若し生物の身體の一部分に變化を生ずるときは他の部分に之に隨伴して變化を來すを云ふ是全く定りたる變化なりと雖も兩部分の間に些少の關係あることども發見する能はざるなり白兔及白鼠の眸子は必ず赤きか如きは此例なり

前來陳述せる如く生物に變化あるときには其變化は必ず子孫に遺傳するものなり此遺傳なることは充分確信す可き事實にして親の有せし性は其子に傳はらんとする傾強きを以て父祖の特別なる變化は大抵其子孫に遺傳するものなり人或は云はん親子の互に同性を有するは遺傳にあらず外界の事情同じきより生ぜし結果なりと此言一應理あるに似たれども大に然らざるなり今此處に數多の動物ありて其中の一動物他のものに相違せる點ありとせんか是れ全く當時の外界の事情の變化より來せし影響たるべしと雖も若し其動物の親子相似たる性あるときには其所以を説明するに稀有なる外界の事情が偶然親子兩代に起りしものなりとなすよりも寧ろ親の性か子に遺傳せるものなりとせば之を説明し得ること容易にして且つ穩當なるが如し何となれば外界の事情の同様なることは殆んど望む可らざることにして假令之ありとするも甚だ稀にして實に月夜の螢曉天の星に當ならざればなり

(未完)

史 傳

成島柳北翁 (續)

金 風 樓 人

熟ら翁の一生を按んずるに。其初めや文墨の間に成長し。中頃武を以て大に顯貴を致し。古劍三尺兵を野毛山に調するもの三年。千騎萬騎彼か操縦に任かせ。西風吹き起るとき一鞭高く函嶺を超えしは。實に翁か最も得意の時にてありき。然るに一旦蹉跌意行はれざるや。去りて遂に再び身を文墨の間に投じ了んぬ。嗟翁が半生の經歷や實に多端の境遇にてありし。多面の境遇にてありし。或は務め或は諍ひ。或は怒り或は幽囚せられ。或は得意となり或は慷慨し。未だ嘗て余か所謂柳北の真髓を顯はすの暇あらざりき。然るに一たび歐米に巡遊して新に歸朝し。筆を朝野新聞に執るや。翁の境遇は俄然として一變し。時勢は彼を驅りて晩年に到るまで徹底一色。遂に所謂柳北プロバを以て一生の壽命を終らしめぬ。嗟プロバ。金風樓人何ぞプロバを説くことの頻々にして嗚々たるや。蓋し故あり乞ふ是より説かむ。試に問ふ汝の所謂柳北プロバなるものは何ぞや曰。磊磊落落爛熳乎たる天真即ち是也。彼れ歐米の行を了りて新に歸朝するや。是より先き既に居を墨水の上り秋葉湖畔に卜し。一身を韜晦して心を風月に托しぬ。當時墨堤の花未だ甚だ人の稱するところとならず。花神落ち盡くして空しく野翁の耒鋤に委せられ。只訪ふ者は二三の遊人墨客のみ。轉

行盡春風一路斜。傍堤多是老農家。耕田也覺此間樂。香雨滿簑鋤落花。松塘
の嘆なくんはあらざりき。翁此の間にありて閑雅優々。俗塵を超脱して獨り此樂を擅にし。間あ
れば則ち同人を集めて宴を後庭に張り。須臾の間も酒麴を離さず。花の旦にも酒を被ふり。月の
夕にも亦酒を被ふり。客なれば即ち朝夕を撰はず。病に臥して糜粥を嚙れども尙且酒を絶たず。
既に酒あれは亦紅裙なかるべからず。而してその紅裙や亦尤物ならざるべからず。自ら謂ふ是れ
今古達士の通論也。一擲千金家計を顧みず。高吟詠歌怡然として寝輾るぶ。嗟天真の爛熳乎たる
夫れ此の如し。山水の清秀幽邃の境。必らず名媛麗姝を伴ひ芳醕佳穀を携ふ。或は東山の峰巒紫
を擬し翠を抹し。影を倒にして杯盤の中に落つるの處。欄に倚り蘇小を邀へて山影水聲清絶の處
に吟咏し或は柳橋樓々水に望み湘簾風に翻へるの處。紅燈萬枝橋を夾むて煌々晝の如きの時。
便ち杜康雛妓を挑むて酒杯をとばす。或は舟遊兩國に酌み。或は月を高輪に稱し。或は梅花を小
向村に探くり。或は嵐峽に或は伊香保に。而して行必らず得意の文あり。文筆縱横頗る活達以て
雜報欄内を充填す。朝野新聞の聲價爲めに大に振ふ。而して新聞事業の多忙なる終日閑を得ざる
とあり。頭岑々として眼眩するの時。翁便ち忙を避け病と稱して新聞社を逃げ出て。優々社中の
忙務を他人に委して客と青樓に酌む。社員固より翁の虛病を知る。然かも翁の洒々落々一點の邪
氣なく。出つれば必らず記あるを知りて即ち默許するのみ。その私記するところを見るに亦一笑
を博するに足る。

親友の横濱にあるもの。急に書を送りて漁史に告げて曰。我今夕二洲ニラマに遊び。東岸の水心樓

に宴を開き。貴紳數名を招き烟火を見んとす。君幸に來りて一夕の觀を共にせよ。漁史恭
しく接するに。水心樓は亭榭廣し。必らずしも雜沓の憂なからん。往くへき一也。樓上の宴
とあれは舟賃の高きを恐るゝに及ばず。往くへき二也。貴縉の來臨とあらば豫め名妓の酒を
備むるものを約せしならむ。往くへき三也。乃ち臨時社務を人に托するに決し。答辭を筆
して曰。謹んで今より御馳走の忝きを拜す。但し病來日本酒の口に入らざるもの三句。希く
は僕のために葡萄酒を澤山備へたまへ。已にして時辰器鏘然として三時を報す。時に日就
社の子安君來り告げて曰。兄も今夕水心樓に赴くか。弟も亦招に應せむとす。今にして早く
去らすんば。例の如く社務湧くか如くに生し。一を了すれば復一を顯し。到底出づるの期な
からむ。速かに逃避して半日の閑を樂しむに若かす。新聞社の社長も亦時として油を賣らさ
るを得むや。涼風多きところに兄と一杯の輸贏を争はん請ふ來れど。漁史其の計を妙とし。
直に編輯局に告ぐるに頭痛の甚しきを以てし。會計局に告ぐるに腹痛の甚しきを以てして退
き。共に車を馳せて二洲に赴き。先づ一樓について子安君と棋す。君は漁史の好敵手なり。
以下略。

嗟一は頭痛といひ他は腹痛と歎く。前後矛盾何ぞ甚しきや。蓋し翁や只社を逃ぐるを以て策とな
す。亦頭痛と腹痛とを問はざる也。萬犬嘘に吠へ一犬實を告ぐ。社員を欺て出社せざるとそれ此
の如く頻繁なるを以て。遂に病に臥すや。社員敢て信せず屢翁の出社を促かす。翁此に於て洒落
一番閉口歌を作りて曰。

船頭過多却覆船。社員夥時我宜眠。休息何思月給錢。我爲記者已五年。禁獄罰金屢仰天。

無間念佛天魔禪。妄語吐來何百遍。朝呼濕漁夕柳仙。虛名自愧四方傳。社員若見思惘然。爲我一開愉快筵。

放縱不羈常人。以律律すべからざる者概ね此の如し。余か所謂天真爛漫なるもの尋々落落なるもの。實に此にありて存す。然りと雖も翁や徒らに放縱不羈を装ひ。流連妓を抱いて喃喃細語を戦はし。花鳥風月を評騭して自ら足れりとするものには非る也。否磊々落落天真爛漫の間。稜々たる風骨自ら動かすべからざるものあり。機に觸れては則ち不平の音となり。感慨に咽むては則ち世状を罵詈するの言となる。歌ふところ固より花鳥山水の外に出てすと雖も。隱約の間に髀肉を生ずるを嘆す。翁自ら言ふ我は多情にして多恨、多感にして多涙なりと。然り彼は多情なり。而して彼は多情なるだけそれだけ多恨なりしなり。多感なりしなり。多涙なりしなり。見すや彼れ年已に四十を踰え。少壯氣鋭春情を促かすの候は。已に業に過ぎ去りしにも關らず。尙ほ嬰鏢として多情の嚙語をなすを。嘗て鴨涯三枚堂裡に歌ふて曰く。

老來猶愛小裙釵。又買芳樽向鴨涯。柳眼花唇春若錦。嬌歌呼起舊風懷。又嵐峽小裙に戯むれて曰。况此難凌土用天。五體出汗日出澗。小樓高枕對墨水。酒易菓子色易賢。竊忍罪業超以前。懺悔々々拜佛前。賣出忽覺幾人眠。辟易之賦遊山船。事業不成一人前。生計細於烟管煙。

看花誰道滿開宜。未十分時趣却奇。羞澁對人猶掩笑。深閨三五可憐姿。何ぞ知らん此の多情の心根は。時に或は方向を轉して多恨多感の文字とならんとは。翁か文を見翁か詩を誦するもの。誰れか不平の音を聞かざるものそ。誰か罵倒の聲を聞かざるものそ。是れ實に翁の境遇の然らしむるところ。翁の經歷の然からしむるところ。亦怪しむに足らざる也。乞ふ見よ翁か可愛叟歌を。

可愛叟歌 有校書玉鸞者。每來侑酒。喚余可愛叟。余以爲別號。社友皆詰其說。乃作歌以解之。可愛叟々々々。問汝何緣獲此名。汝貌非有宋朝美。汝才亦能比長卿。饒舌罵人聞者熱。橫行悖世觀者瞠。可愛之實果安在。可愛之名真可怪。叟笑曰唯々否々。公等那識此名成。天公一朝與奇疾。有脚三年不得行。滿城花柳長江月。傷心春雨又秋晴。小齋寂寞向誰語。濁醪三盃獨自傾。有人嫣然入我夢。喚我可愛豈無情。可愛叟々々々。長將此名送此生。嗟三年不鳴不飛。大才遂に用ゆるに所なし。滿城の風物空しく歲月を渡り。春雨秋宵徒らに心を傷ます。既往を顧れば夢憎々。豈に轉軻嘆惜の至りに堪えんや。

往事思繹茫如雲。金鞍玉勒幾訪君。認君紅粧似紅拂。記否當年季將軍。蒲田梅園對花話舊。

六合河邊來飲馬。千騎萬騎紛滿野。調兵罷時日黃昏。笑見美人立林下。
 滄桑雖變人猶同。相逢亦要醉顏紅。我且放歌君須舞。天地依舊自春風。

訪蒲田梅園感舊

肥馬年々向橫灣。每折梅花插金鞍。乾坤一變身事故。驛停踏雪脚蹠跚。
 當爐女存舊顏色。視我一驚又一嘆。孤櫂引我坐茅店。坐看梅花映竹欄。
 舉酒屬花花莫笑。先生一褐吟骨寒。

江湖臺閣一昇一沈。昔は將軍今は貧生。無限の情涙無限の憾。誰れか能く翁の心事を知るものぞ。試みに花に問ふ花答へす。謂て遊蕩氣樂の才子となすもの豈に謂ふに足らんや。

丙子歲晚感懷

隙駒驅我疾於梭。四十星霜容易過。文苑偏憐才子句。教坊徒聽美人歌。
 青雲黃壤舊知少。綠酒紅燈新感多。好是寒梅花上月。稜々風骨奈君何。

畫描く可からず書言ふ能はず。隱約の間言外腴肉の嘆をなす。哀れむべきかな。更に翁か文に就て論せむか。乞ふ翁か瘤鬼之言を見よ。行文脩きに過くと雖も。亦世躰に宏益なくんはあらず。茲に割愛してその大概を掲ぐ。

上略 瘤の鬼夢に見えて曰く。公其瘤を惡む乎。溼上子曰然り。鬼踴躍して曰。公何ぞ痴なるや。公の瘤は肉血の塊に非ず。彼の関后の項。侯景の足と類を同うするものに非ず。多年誦讀

の久しき積んで以て團々たるものをなす。之を名けて毒瘤と云ふ。在昔浮梁に李生なる者あり。背に一瘤を生ず。其痒忍ふ可からず。神醫秦德立診して曰。是れ虱瘤也。之に藥すれば瘡破れて虱を出す一斗餘也。今公の瘤亦其の毒を藏する殆んど數斗なり。是亦公が自ら招くの病たるのみ。何ぞ遽かに之を割くに忍ひんや。且つ公獨り肉上の瘤を惡むも。公の身は即ち世の瘤たるを知らずや。耕して食ふ能はず織て衣る能はず。政府の爲めに事を執らす。唯日に痛飲放食空言大論して以て自ら喜ぶ。其の一大贅物たる瘤と同じからずして何ぞや。溼上子微笑して曰。鬼來り前すめ。我れ將に一語の汝に問ふ有らんとす。夫れ天下の瘤たり疣たり贅物たる者何ぞ獨り我のみならんや。華族の祿ある士族の俸ある。皆是政府の疣にして人民の瘤なり。官吏にして其職を奉するの才なく。教職にして其教導を行ふの學無き者。亦是疣たり瘤たるに非ずや。宋に朱齡石なる者あり。其鼻の頭に大瘤有るを惡み。其寐るを覗ひて之を割き。竟に鼻をして死せしめたりと。今や天下のために一朝其の幾千萬の大瘤を割き去らんと欲する者有りや。恐らくは亦誤りて其鼻を殺すの憂ならんか。それ此の如き無數の大瘤にして既に去る能はず。何ぞ我か眇々たる一男兒を目して。世の瘤となすを得んや。鬼忽ち頭を低れて曰く。吁。瞽康曾て言有り。君子以名位爲贅瘤。資財爲塵垢也。公も亦其れ然る乎。下略

綺語必らずしも綺語ならず。規諷自ら言外にあり。嗟今の時に當りて天下の瘤たり疣たるもの何ぞ限らむ。政事上の瘤は我得て之を知らずと雖も身致職にあり徒らに飽食す。是れ亦天下の瘤

にあらざる乎。身子弟の分として放蕩放逸親を欺き兄を魅し。學業を怠りて優々己れか天職を盡くさるもの。是れ亦天下の瘤には非らざる乎。翁の心を用ゆる蓋し這般の所に在り。豈に洒々たる小才子ならんや。又是を京猫一斑に見る。中に記するところなり。

歴觀して女工場製する所の物に至る。一妓一香囊を指して曰。此は是れ賤妾竹を吹き絲を彈するの暇拮据して製せし所。今其價表を見るに五錢と曰ふ。是れ人力車夫一馳騁の價のみ。妾辛苦數日肩頭血を凝らす者にして僅かに五錢。但諺に所謂百日の說法一放屁と又何を異ならん。妾今より後復女工を學ぶを欲せざる也。媼襟を正うして曰。否々天下不平の鳴をなすへきもの。奚を獨り此の一香囊にして止まんや。今夫れ操觚之士少小より學に就き。夏螢冬雪刻苦すると十年。萬卷の書を看破し古今の治亂興亡得失利害の迹を閱覽す。業精しからすと云ふ可からず。志立たすと謂ふ可からず。其國鈞を取りて民庶を牧するに於てや緯々として餘裕あり。然り而して君相識らす府縣擧げす。或は以て迂拙となし、或は以て奇僻となし。轆轤沈滯一生局促し。轅下の狗となりて制を螻蟻に受くるもの。世其の人に乏しからず。昔人の所謂文章半文錢に値せざる者。豈に亦哀しからずや。然らば則ち卿の香囊沈麝の香有り、と雖も。而かも人_文以て屁となし人_文以て尿となすも。亦安んぞ怨尤する所有るを得んや。一妓側より卒然舌を吐て曰。媼の言何を酷だ何有仙史(翁の別號)の口氣に似たるやと。衆駭然轟笑して去る。原漢

嗟不平の音をなすものは誰れぞ。轆轤沈滯一生を局促するものは誰れぞ。迂拙と云はれ奇僻と罵

らるゝ者は誰れぞ。翁固より當世に意なしと雖も。豈に甘んじて池中の者となるを肯んや。妓を藉り媼を借り來りて不平の鳴り口を衝て出づ。豈に哀れむに堪ゆべけんや。又是を京猫一斑に見る。東京の聲妓を愛する者固より夥し。然れども府吏の妓流に於ける。動すれば之を人視せずなどなし馬となす。曰く其羈を解け。曰く其繩を緊せよ。曰く汝の業や賤し。曰く汝の行や汙なりと。勤めて之を排擠するのみ。廳政嚴肅の致すところと雖も。而かも人情に近からざるの感あるを免れず。獨り西京は則ち然らず。府吏妓を待つ頗る優渥。大祭盛儀ある毎に必らず戸長に命し。衆妓をして靚粧列を按んし以て都人の觀に供し。而して繁花の氣象を粉飾せしむ。何そ其の愛の沉くして情の多きや。余の西京にあるや四條の鐵橋功峻る。四月一日(明治七年)官令を下して開橋の儀を行ふ。吏卒祝皆禮裝して橋に上る。云々且祇園の聲妓歌妓に命し隊をなして進み盛典を助く。是日閩都の士女麤奔蟬集し橋を夾んで見る。余も亦鴨東の樓に上り其景狀を目す。其の優遊閑雅以て一種の風趣をなす者。蓋し東京無き所也。乃戯れに四條橋落儀を見る引を作る。曰く。

上略 萬人忽叫大幟到。揭出三字女工場。教坊娥眉多意氣。赴儀亦學鸚鵡行。

當頭舞妓垂帶厲。衣裳染花雙袖長。春風吹送萬蝴蝶。嬌姿照水水有光。

舞妓隊去亦歌妓。前紫後玄異其裝。楊之肥又趙之瘦。金蓮步步紅裙颺。

此態從頭何所似。庾嶺梅花蜀海棠。姑蘇千秋女軍在。香圍粉陣亦堂堂。

過橋盤旋又東向。八坂祠前趨袞裳。爭抽花簪賽神去。玉纖齊擲萬枝芳。

又曰く。瑤臺歛影忽不見。滿街人散有夕陽。歸來橋頭掬春水。鴨河猶浮綺羅香。」

官博覽會を大内に開くの際。鴨妓必らず歌舞場を祇園坊南看花新聲二巷の間に張る。號して都踊と云ふ。蓋し壬申の歳に昉まる。甲戌年四月十六日例に照して場を開く。連夕技を演し西より子に及ぶ。妓團其隊を分ちて六となす。一隊一夕に當り順次場に上る。兵隊の代りて牙營に直するの法に似たり。一隊五十名にして舞ふもの三十二人。餘は絃歌鉦鼓の任に充つ。中略。忽ち見る左右の帷幕倏然として褰け去るを。舞妓兩廂に立つ各十六。皆一齊の衣帶を着く。左廂の隊紅扇をとり右廂の隊白扇を揮ひ。舞容宛轉として釵光黛色百枝の銀燭に照映し。觀者をして明皇華萼夜遊の想有らしむ。中略。兩隊齊しく進み相揖して過く。右隊左廂に列し左隊右廂に列し地を易へて舞ふ。觀者睛を左右に注ぎ應接暇あらず。目眩して心醉ふ。大呼して識るところの妓を贊嘆するものあり。猛進して前に當るの人を突過するものあり。場中更に一大騷擾を起し來る。公子暗に意中の人を認め。富翁誤て算外の金を擲つての事往々此の際にある也。已にして金絃急に響き羅袖軽く颺り。鶯囀し蝶舞ひ花亂れ水流れ。盤旋一場技まさに終らんとす。中略。一雙の小鞞各金籃を載せ籃中百花を挿む。紅紫爛熳として馥郁香を吹く。左右の隊齊しく彩繩を執り鞞を挽て退く。眞に是れ羅浮夢覺め巫峽雲歛り。楚王趙郎も亦各場を出て去る。嗚呼鄭衛の音褒姒の色。先哲悪んで而して遠く其意や深し。雖然耳目の聲色に於けるや。喜んで之を娛むもの萬人皆同し。矯めて而して之を節せざる可からず

と雖も。推して之を論すれば造物者も亦幸なしとなさる也。若し夫れ都踊の技京花の曲は則ち亦昇平熙々の象を粉飾するもの。固より道學者流の得て喙を容るゝ可からざる歟。

鄭衛の聲を聞て喜ひ褒姒の色を見て狂す。嗟如何に當時京都の人士の漂逸浮花に陥りしとよ。如何に人心の腐爛せしとよ。官衙公に妓に命して都人を誘ふ。當時の腐敗それ如何そや。翁之を書す抑も喜んで之を書せしか。笑ふて之を書せしか。抑も亦嘲けりて之を書せしか。翁謂へることあり。夫れ新聞や雜誌や。一讀して其の皮相を認め。再讀して其情味をさと。三讀して言外の意を識ると。然らば則ち這般の消息豈に知り易すからすとせむや。學海翁嘗て亦花月新誌を評して曰く。規諷を諧辭に寓し議論を綺語に寄す。一場花月の談未だ必らずしも百篇の論策に勝さらすんはあらずと。蓋し翁の心を得るもの乎。夢香小史なるものあり。嘗て翁に送くるの詩に曰く。

細雨簾纖綠樹昏。子規聲裏掩柴門。飛花庭院春無迹。芳草池塘夢有痕。

讀古人書既迂腐。把新聞紙且評論。吾欽溼上仙翁筆。謔諧中間寓至言。

鐵腸子評に云く。柳翁讀此詩。應絕叫眞知己々々々と。鐵腸子の評豈に夫れ誣言ならむや。

夫れ翁か多情にして多恨。多感にして多涙なるとは。余已に之を説けり。而して多情多恨の餘發して不平の音となり。迸りて罵倒の言となりしとも。亦已に之を述へぬ。今は便ち多感多涙の發するところ。抑も如何の消息を齎らすかを尋ねん。多情は彼を驅りて多恨ならしめ。多恨は彼を促かして多感ならしめ。多感は彼をして涙に咽せしめぬ。而してその涙泉の進るところ。親を思ふの情となり。子を愛するの情となり。妻女を憐れむの情となり。更らに轉して高品の詩人た

るを誤まらざらしめぬ。乞ふ暫らく之を論せむ。
風樹の嘆詩靈已に之を言ふ。而かも真に親を思ふて常任坐臥食に對し衣を着るの間。尙且つ親を
忘れざるものに至りては世實に鮮矣。翁の事に就ては余多く知らすと雖も。その詩韻の間に現は
るゝところを以て見れば。亦以て翁か親を思ふの切なるを知るに足る。

除夕二首

自別阿爺三載年。 茫々往事夢耶烟。 憐他手植寒梅樹。 芳莖又開書幌前。」

少年歲月易駸々。 塵務紛紜書付蟬。 兒業無成阿嬢老。 每逢除夕太傷心。」

三溪曰。此父ありて此子あり。此母ありて此感あり。

先考七年忌辰有感而作

優然有見肅然間。 入夢音容將是真。 暗淚潛々七年過。 猶覺哀經在斯身。

三溪曰。追遠の至情楮墨の間に溢る。

十一月十一日。客舍祭先考。蓋忌辰也。

兄弟七人隨九泉。 獨存遺體讀遺編。 他郷今日蘋蘩奠。 遙隔滄溟拜墓阡。

他郷に流寓して忌辰に逢ふ。豈に一段の感慨なしとせんや。語々真情に出て妮々人を動かす。哀
れむべきかな。遊蕩放逸産を蕩盡して顧みざるの人。則ち小心翼翼たる此の如し。謂ふて輕跳
浮花の小才子となすもの。豈に善く彼を知る者なんや。

乞ふ又去りて養子包を祭つるの文を見よ。如何に子裔を愛する情の切なるかを知らむ。

漁史の靜岡に着するや。直に寺町の感應寺に詣り兒包の墓を掃ふ。包字は光大通稱泰五郎。

後漁史の名を譲りて甲子太郎と稱す。川上氏の子なり漁史養ふて嗣となす。戊辰の年我三位
公に従ひ此に徙りて死せり。當時漁史函嶺の雪を衝き來りて之を該寺に葬る。瘞汝芙蓉千仞
下。夜台長望故山雲の句あり。黃村向山先生の挽詞に云ふ。天道是非吾久疑。顏回短命鄧無
兒。故人三日吞聲哭。何況高堂白髮慈。漁史先生に乞ひ爲めに二詩を書して墓碣に鐫せり。
嗚呼包や孝順にして忠誠。然るに不幸にして蚤く死す。寔に哀むべき也。

泣收汝骨亂離間。 慘雨悽風十二年。 今日乃翁猶未死。 又將舊淚灑墓前。

慘なるかな慘なるかな。何そ人を愁惜せしむるの甚しきや。嗟養子に於てすら且然り。况んや實
子に於てをや。翁か子女に倦々慈育の深かりしや知るべし。而して翁か家計窮々の間放蕩遊逸に
も關らす十七子を擧げしを見れば。亦以て閨門の穩かなりしを知るべきのみ。若かも翁か他郷に
流寓するの間常に家郷を思ふの切なるを見は。益妻子家眷を思ふの情頗る濃かなるを知る。左に
數句を録す。

憶 家

阿爺萍跡又天涯。 想汝朝々慕阿爺。 上國江山無限好。 不如與汝在吾家。」

一男三女膝相圍。 隣殺燈花卜我歸。 夜々空閨人不寐。 裁縫應是阿誰衣。」

枕山曰。遠官行商富則富矣貴則貴矣。豈若一生不出門而兒女團樂之樂哉。此詩語淺意深有一唱三
嘆之妙。三溪曰。公深於肉骨之情。故其詩自然動人。松塘曰。二首並真情真詩。

憶家

攀花航月幾山河。異境雖娛歸思多。三載居家僅三月。就荒松菊奈鄉何。

又

簷外秋風殘柳斜。客愁轉與暮寒加。關情何特尊鱸味。每點窓燈便憶家。

殆んど青樓妓を呼ぶの人に非るに似たり。宜なり窮境にありて十七子を擧げしと。

余多く詩を知らず。而かも詩人としての翁は已に世人の嘖々するところ。豈に徒らに贅するを要せんや。蓋し思ふ古往今來高品の詩人は。富貴榮花の門に求めずして。之を貧窮に得。之を順境に求めずして逆境に得。銅臭戀位に求めずして放逸僮僕黃白を見ると土芥の如きの人に得。山陽管て杏坪の詩を評して仕官の後詩亦見るに足るものなしと云へり。屈平小人に讒せられ。形容枯槁顔色憔悴漂然として澤畔に吟するや。離騷の詩は千古悲慘の情を後人に傳へぬ。坡老大才を抱いて用られず。屢貶竄せられて辛酸具さに嘗め放縱自ら安んず。是に於てか赤壁賦は天下萬世をして贊嘆措かざらしめ。一自風流屬坡老。功名不復畫周郎と唱はしむるに至るもの。豈にそれ宜ならずや。即ち翁や其詩人たるの資格に於て。一も間然する所あらざりし也。翁か兒敏に示すの詩に曰く。

上略、吾昔僅弱冠。內筵列學士。才銳而氣昂。不屑雕蟲技。致君聖賢域。管樂豈敢擬。更畫挽回策。兵馬學廓李。宿志竟蹉跎。百事泰之否。國亡又家破。此身獨不死。鱸鯨江湖心。奈制於螻蟻。故舊及門徒。反覆難復恃。始知氣與才。誤人本如此。

家儲無儻石。窮慮對爾耻。下略、

豈に逆境の人と云はざるべけんや。杯盤狼藉青樓に酌むの時。千金紙の如くに飛ぶ。黃白を愛しますと云はざるべけんや。身に官位もなく財産もなし。貧と云はざるべけんや。區々煩累をさけて二洲に飲み。病幕に臥して閉口歌を唱ふ。磊落放儻と云はざるべけんや。若かも多情多恨多感多涙。才學餘りあり古今和漢の史子に通達す。高品の詩人たらざらんと欲すと雖も豈に得べけんや。宜なり詩人騷客今に至まで翁を重んずると。此に居常愛誦する所の者二三を掲げて其の一般を知らしむ。餘は翁か詩集に譲りて即ち己みなん。

五月九日遊金川臺

去帆白來帆紅。半江夕陽半江風。總山房山翠幾株。影沈烟波浩蕩中。

始來豈得不停佇。喚取鮮鱗酌清醕。店丁時指松外洲。說是彼理曾泊處。

漁父圖

孤舸爲家秋水濱。輕簑短棹自由身。五湖明月三湘雨。無限風光屬釣綸。

書懷

半生志業一難成。怒氣如兵夜有聲。黑海風濤紅海月。扁舟何日載吾行。

雪中踰函嶺

萬重雲霧萬重山。山轉雲翻瞬息間。客裏行々多慘味。滿身風雪過函關。

月夜泛舟于二洲似同遊

一、輪明月滿川舟。舟去舟來月亦流。

行到水心天若水。

三庚涼味似三秋。

八月十一日過關原慨然賦此

石豎弄兵可憐兒。

卻爲眞主開洪基。

金扇西轉威風肅。

千乘萬騎爭先馳。

此地一日賭寰宇。

流血蔽野紅淋漓。

挾纊之士皆獻誠。

倒戈有人彼輿尸。

奏凱聲裏乾坤定。

篳篥孰不迎我師。

爾來三百星霜久。

俗化何荒總熙々。

偉業今日亦幻夢。

兩間憐焉知者誰。

遺臣來茲涕淚下。

生不報恩死何爲。

夕陽滿原飛鳥盡。

風盡拂秋草碧離々。

雲山猶存當日態。

想見笑結胃纓時。

今や章を終るに臨み。尙一の記すべきとあり。何そや。曰く交道頗る廣く臺閣江湖を撰はさると

是也。芳野金陵、信夫恕軒。龜谷省軒。小永井小舟、小野湖山、大湖枕山、鱸松塘、假名垣魯文、

依田學海、森春濤、南摩羽峯、岩谷一六、大槻磐溪、菊地三溪、皆是れ當代の名流各旌を一方に

樹て、輸贏を争ふ者。中村敬宇、島田篁村、川田鑿江、三島中洲、鷺津毅堂、亦是れ當代一流の

文豪俄かに人に許さるるの人。尙且翁と交ると弟兄の如く然り。未廣鐵腸は當代の名士世人嘖々

措かす。然かも常に兄事して弟と呼ぶ。近衛公之と親み亦木戸公と好し。其他名聞えさるるものに

至りては何そ限らん。交道の廣き實に驚くに堪えたり。翁の襟度亦以て察すべき也。

翁死して後一年。同友相謀りて碑を墨堤梅兒祠畔に樹て。永へに英魂を慰む。(碑文畧)

嗟墨水潺湲今に至りて變せず。年々歳々花相似たり。而して其人今や幽冥に永安す。秋高く溼上

月明の夜。閑鷗頭を收めて射聲鏡面に響くの時。梅兒祠畔松籟哀れを送くるの處。截然偉業を留

めて翁の石碑は樹てり。嗟翁業に己に瞑すと雖も。名聲豈に墨水と共に流れ去らんや。嗟悲哉。

書し了り悄然筆を擱するの時。月影浮動破窓を侵して列むし。

めて翁の石碑は樹てり。嗟翁業に己に瞑すと雖も。名聲豈に墨水と共に流れ去らんや。嗟悲哉。書し了り悄然筆を擱するの時。月影浮動破窓を侵して列むし。(完結)

文苑

雪夜讀書

蓬生庵

近きほとりの山寺の鐘ひいきわたりて一きはあはれに、空さへかきくれてものゝ氣はひあらけく、村風さうくしき師走の夕、れいの一まにもものする折しも、雪よくとのしる聲にあはたしく窓押し明けてみ出せば、軒の松か枝雪しろく、冬木の梅時ならぬ花をつけてませの内にはほん許りなり、あなうれしや如何でふかく積らせてしかなと念じつ、吹く風の寒さもうち忘れてながむるに、何時しか吹雪も静まりて、雲の立すまゐのどかになれるみ空より、何處ともなく落ちてくめるは、積りても散りても花の心地せられて云はん方なし、今宵しも雪降りなはと契りし友の、折過さじと明放ちて待つほどに、人の氣はひもなま、されはどてかゝる景色を吾のみ見んはむどくなる可し、いざやわりなき思出に、野にや出てん山にやうかれん、などすゝろ々と、氷るばかりの夜の様に、心の駒も勇みかぬつれば、埋火かきあこしつゝ草々の文ともそれかれ見もて行くに、いみじう心もすみて夜ふかき雪を慰むるのみかは、中くむかしの人のよりてある心地せられて、日頃は何事もなくて過にしも思ひしられ、ふかき心ばへあるくたりくのおのつからと

きえらるゝもうれしく、はては窓の螢にむつび、枝の雪をならしたまひけんふる事さへ忍ばれて、
愚かなる身もいかで心ざしはたさでやは、
なれもまた昔なからの心もてわれをば照らせまとの白雪』ふくるもしるく降る雪の高うな
りて、下折れのひゞきいとすこし。

爐邊閑談

戸村義保

櫻炭かきおこしつゝ談らへはことはの花も咲くこゝちする

冬月

山風にきほふ時雨のくも見えてかげさたまらぬ冬の夜の月

竹雪

下折れの聲もあらしもうつもれて雪をすかたになひく吳竹

雪の白山

降る雪に白く見しより晴れぬ日のつもる數さへ知らぬ白山

元日鶯をきいて

あらずの年たつ今朝のうくひすはうれしき節を歌ひ初けり

野霞

福井喜彦

むらさきを衣にすらむと來しものを霞こめたり武藏野の原

野梅

春の野に若菜つまむと來て見れば風かざる也梅さくらしも

春月

秋をおきてさやけき影を見えじとや霞にやとる春の夜の月

學友某が士官候補生になりて近衛工兵大隊に

入營するをおくるとて

八十國の怯ぢかしくまむ大城をもすめら御國にたてよ丈夫

事しあらは火にも水にも入り立て仇どり挫げ益良雄わがせ

岡若菜

那古の浦人

岡の邊のうめ綻ひぬうくひすの聲きゝかてら若菜つみてん

海邊霞

海の原とわたる舟のほのくどかすみにのこる楫の音かな

雨中鶯

春雨のふりたる庭のうくひすは梅の花かさきつゝなくらん

春の歌の中

河原始二

木の芽さへ鳥の聲さへ春めきて見るも長閑けし聞くものどけし

樂翁侯の退閑雜記を讀みて

なにごとも樂しむ翁わかために樂分たてたのしますへく
某士官候補生か東上を送るとて
西の海あるゝのみかは何處にも風吹くなり君こゝろせよ
行けや君白雲遠く隔つともかよふこゝろに關はあらめや

遣悶十首

撫劍生

南の海たいわに島もけふより昔にきかぬ春に逢ふらむ
南の海波しつまりぬ太刀とりて筆とりていさいゆき渡らむ
あろしやの鷺の羽風のなかりせは東の洋に波は立たしを
生繁るしこの醜艸根ゆ刈りて國土ことく掃ひ行かまし
民艸の延ひ蔓りて南の海西の海にも生ひしけらなむ
黒金の艦をつらなめ仇波を蹴りて進まむ代はいつの代そ
事成らばひまらやの峯に日の本の日の大御旗建てんとそ思ふ
いさや起きま起きて銃どれ此春は花に寝る可き時ならなくに
事しあらは家に傳はる劍太刀とく取佩きて出でんとそ思ふ
雲に乗り天にかけらむ龍の身のたゝに潜みて年を経るかな

袖時雨

花曙散史

上

思ふもなみだわが兄は、
こぞのしはすの末つ方、
軒端に生ふるわか竹の、
雪の下折れまつまなく、
葉末の露ときえましぬ。

おもひにふぶる水莖の、
こゝろまかせに書綴る、
いと切なる胸のうち。
思ひぞいづる其むかし、
わがいとをしき兄君は、
嵐の山のはなに暮れ、
吉田が丘のつきに明し、
こゝにさすらふ三ヶ年。

あゝなにとも夢なれや
ゆめの浮世に生れきて、
夢のうき橋わたりつゝ、
甲斐なき夢の迹退ふも、
逝きにし人は歸らじな。

ひまゆく駒のつめ早み、
いつしか年も過りきて、
學びの術もうちをへつ、
歸りて家におはせしが、
或年ちゝにいひけらく。

かひなきとどしりながら、
さすがに心ひかされて、

「とよ榮えゆく大御代に、
あたら深山の埋れ本と、
名もなくはてん悔しさよ、
いまより遠く吾妻路に、
なほ學びせん身の願ひ。」

「そのけなげなる思立ち、
いかで否まむ家のため、
はた國のため勉めよ」と、
父の御許可うけまして、
けふぞ別れの首途の日。

父はいはれぬ「やよや吾子、
今日のかどでのたび衣、
八しほに染めて狹穂姫の、
おれるもみぢのあや錦、
まどひ歸りて來れかし。」

母はさすがに別れ路の、
心ほそくやおぼすらん、
聲も微に「さきくあれ」と、
一言をのみのたまひて、
萎れ給ふぞいたはしき。

はやたち出るかどの外、
「あはれちゝ上はゞ様よ、
別れと云ふも暫しにて、
又こん夏にまみえなん、
事もなくてよいぞゝらば。」

さらばと云ふを名残にて、
落つる涙をふりはらひ、
露ふみわくるたびの空、
あり明月のかけ消えて、
罩むる狹霧のゝろ深し。

さきくたませと門の戸に、
ゑみて別れし兄ぎみの、
着きし夜半より思ひきや、
重き病ひにかゝりぬと、
友の君より告げこしぬ。

親子はらからもろ共に、
ゆめに夢みる心地して、
かりの玉章いくたびか、
縁返してもゆめならぬ、
夢はさむべきようもなし。

恙をなにとしらなみの、
狹霧どたちて晴間なき、
ころもそらに父君の、
急きく／＼て來て見れば、
昨日にかはる吾子の面。

母のうれひはなほ更に、
悲しやもしもこの儘に、
永き別れと成りもせはと、
ひとりなみだに吳竹の、
かはくひまなしつゆ時雨。

今日や着きぬるあす社と、
をゆひ數へてもろ共に、
待ちわびにたる父の文、
「兄も日増しに癒えつれば、
あてよさのみな憂ひぞと。」

父のみ言葉つばらかに、
きこえまつれば有繫にも、
包みかねけん嬉しさを、
しめり勝ちなる頬の上、
はゝは湛えぬゝるくぼ。

兄の恙もはやいえて、

今日ぞめでたきほぎ筵むしら

ほて打ざめく軒の端に、

千代と囁づるも、鳥の、

聲も楽しくきこゆなり。

豊さか昇るあさ日かけ、

きのふ哀れと見し庭の、

ときはの松に興そへて、

葉渡る風の音もかろく、

空にはかよふ鶴のこゑ。

下

青葉になのるほどしぎす、

きかぬと見れはいつしかに、

淺茅が庭につゆ散りて、

秋のはつ風立ちねれば、

あのが學びの時はきぬ。

しばしが程と思へども、

別れと云へば悲しきを、

こゝろ殘してゆく水の、

すゑは何處と定めなき、

身はうきつ瀬のくさ枕。

のちの歎きもしら珠の、

あきそふ露を階別けて、

越路の空にきてみれば、

まなびの窓の雪ふかく、

いつやとくらん文の道。

高峯の紅葉いろさめて、

牡鹿なくなる夕まぐれ、

雲井の雁のこゑきけば、

悲しや又もあに君の、

恙あこりてふせりぬと。

さらでも秋はうきものを、

思ひある身はなかくしに、

目覺がちなる閨の戸を、

たたくとどかどかど驚きて、

みれば散りゆく桐一葉。

たなびく雲の定めなき、

兄のこし方ゆくすゑを、

思へばいと悲しくて、

ひとこそしらぬ秋雨に、

かはくひまなしわが袂。

思ひ信田のくすの木の、

千枝に亂るゝ苦しさに、

ふりさけ仰ぐあま津空、

とびてしばなく諸聲は、

たれを怨むかわたり鳥。

文苑

とくる由なきうき思ひ、

空にもしるやむら雨の

なみだと濺ぐ朝まだき、

兄は果敢なく失せぬとの、

見るも悲しき父のふみ。

ひとの命はあだし野の、

露より脆きものをとは、

兼てもきけど斯く迄に、

早く消えゆき給ふとは、

思はざりけり兄きみの。

幾夜か旅にかさねつゝ、

あのが故家ふるやに来て見れば、

兄のなきがら影失せて、

形見と遺るたましひに、

靡くけむりのふた三筋。

死ぬるも時よいま更に、

歎くべきにはあらねども、

天にも地にもみ一人の、

あにのいまはに一目だも、

え遇はざりしぞ恨みなる。

野山に住まふ雉子さへ、

いとし心のあるものを、

よべの葦間の夢さめて、

吾子をしわぶる親田鶴の、

心のうちやいかならん。

日毎夜毎のどこうち、

徒然のまゝ手づさみに、

かきのこしたる鳥の跡、

これも遺物のしるしかと、

見れば涙のもよほされ。

あはれ死の神いかなれば、

かくも我家に荒ぶれて、

先立たせしかわに君を、

おくれしめしか弟を、

宿世いかなる報ひかや。

片へにかゝる棚のうへ、

日ごとにふれしみ薬の、

なかは残りて淋しげに、

主待ち顔を見るにつけ、

心も消えつ目もくれつ。

學びのまどに勵みしも、

君とゆくすゑち、母の、

み側に侍り身をつくし、

喜び給ふみけしきを、

仰ぎまつらん爲めなるに。

鳥部の山のゆふけむり、

飛鳥の川のさだめなき、

世を知りそめし今日かは、

なに樂しみに勉むべき、

たれと共にか語るべき。

稻葉に露の見えそめて、

月あもしろき秋の夜半、

しばの庵にまどゐして、

いもが調べのたま琴に、

高麗笛合せし主やたれ。

野邊は千艸の深みどり、

霞もはるのあさぼらけ、

蝶の羽風にひらくと、

賤こころなく散る花を、

哀れと見しも夢なれや。

宿はこほりに閉されて、

雪降り來れば圍爐裏邊に、

迎りかねたる文のみち、

互にときつ解かれつゝ、

學びしとも今はあだ。

まつの葉越しに歌など、

沖津しら波ほの見ゆる、

茅渚の浦曲の夕すゝみ、

巖に碎くるなみのはな、

散る雪どこぞ眺めしか。

今は思はじなげくまじ、

歎くはをろか歎かじと、

思ひ返せどしかすかに、

千々に心のみだれ來て、

袖はなみだに露しげし。

あはれ亡き魂今いづこ、
あはれ兄君いまいづら、
とへと應答もあらし吹く、
峯の松々枝こけさびて、
常盤の色にほこるなり。

あはれこの下とこしへに、
岩根の床にまくらして、
眠れる君よしるあらば、
恨みに歎くをををどが、
そいぐ誠を饗けよかし。

雨にさびれしまつの蔭、
卒塔婆が前にひれふして、
現つこゝろもなき程に、
手向けの花に露ぞしく、
まつの葉か血のなみだ。

ぬるゝ袂をしぼりつゝ、
たちさりかねて佇めば、
日はや西に傾むきて、
あたり小暗くなるなべに、
空にはかゝる三日の月。



俳句

朝雨や朱門白壁あをやなぎ
 隼夜や四條五條の橋のひと
 三毛猫に黒猫戀をしたらけり
 驛路に小雨晴れゆく柳かな
 尼寺の彼岸櫻は咲きにけり
 行幸の御車かすむ嵯峨の道
 山里は檜伐り出す日永かな
 石垣やひよろく長き土筆
 焼芝や黒くこげたる鹿の角
 春雨とならで暮れけり山畑
 御陵や菜の花咲ける三坪程
 城跡の石かけたかし春の風
 野の末に餘寒の芝の烟かな

豆男

秋竹

人品論

月 岡 生

天之賦與性分也。人々無相異也。其相距遠甚。於是乎人爵在焉。所以使其人自奮也。雖然。時有遇有不遇。人爵未必稱。其實而終始不爲變者天爵也。昨抱關擊柝之人。今冠帶立朝。今參與機密者。忽爲絕海孤客。其轉倒錯置如此。是以苟有志者。高蹈勇退。視爵祿如敝屣。歸耕于田園。高尚自適。而世之趨勢求利者。營々齷齪。未嘗不犯危機。何其不自知之甚。易曰不事王侯。高尚其事。人品之高下。可以見矣。昔者屈原行吟澤畔。賦辭而見其志。曰滄浪之水。清兮可以濯我纓。滄浪之水。濁兮可以濯我足。陶淵明拋令印曰。吾豈能爲五斗米折腰。人品之高。固當如此也。古曰。用之則行。舍之則藏。何必阿諛諛。以爲干之哉。今也世叔俗漓。斜封墨敕。無敢疑。不復知品位之爲何物。膏率而溺。未嘗悟。嗟乎悲夫。

安曇巡遊記

垂 東 仙 史

十月廿八日。晴。癸巳歲應鐘念七。試問斯畢矣。乃得數日之休沐。越一日。友人清雪。會帶所用往安地。勸余以同行。余便諾。即刻理裝。乃與俱發。先將探三田村之勝。自新橋而行里許。抵梓川長橋。々長三百六十武許。河水涸竭。不見涓滴。青松白沙。渺々不知際涯。沿道左右皆覺奇。行里半。路左轉入于一小逕。遠望烟雲一抹。近睹稻禾黃穰。逍遙閑步以進。途憇一小社。已發遠望小倉山林。乃知三田邑已在近。呻詩險歌。漸達之。主於丸山鐵人君。十月廿九日。晴。寅牌脫衾。鹽漱。朝饗訖而後圍爐取暖。晤談良久。主人曰。小倉山林。以茸

狩名焉。盡一逸遊遣其鬱。余等大喜。乃擔酒糝携下物。同行四人清雪及余相與發焉。抵林口。有一偷父。張罟而捕小禽。雉鳩囀々。相翔於樹間。林樾景色殊佳矣。觀望久之。乃俱分路而索焉。久而不得一莖。須之而漸多獲焉。欣然而進。荆棘榛莽。鬱々沒路。輒排披而往。已而篋中物十之一。脫林而出於田塍之間。有流淙々然。乃掬而飲之。甘冽沁骨。至是藉草休息。各肱筮而較其多寡。而清雪得尤多。主人顧勸同行。以登於室山。自東道以上。余乃與俱跟從焉。路傍行松。翠綠葱々。白日爲暗。如往隧道中。漸進而抵山麓。乃相魚貫而跣。氣息促急。先者之鞵。接後者之頂。捫蘿倚葛。漸抵山巔。山上風色已異。稍下而得一坪地。眺矚絕佳矣。南望甲武諸嶽於遠翠一髮之際。東瞰松本之沃野於絳帶之下。而田梓二川貫流其間。如銀蛇盤旋。松本市街白聖朱碧。點々于遠杳之間。而小倉山林起乎山麓。蒼々亘里許。恍疑滄海。此山舊松本侯命駕處。當時泉石花木。環匝排置得宜。每茸時至。藩侯輒自布鞞芒鞋。以田於此。數百僮從擁前後。儀容楚楚。而時遷勢變。無復舊觀。而時天災地妖。羣崩山石。頽殺奇勝。而無一人以繕者。悲哉。雖然。天然風景亦多可見者。蓋以此觀之。或有不讓舊日矣。不足復悲也。于時主人探薪燒火。以燂酒。揚巨觥而屬余與清雪。乃連引數大白。耳熱酒酣。而取茸而炙之。臙美媚口。須臾日漸傾虞淵。倉皇拂席。踰垣而歸。晡時達於宿。余與清雪。宿憊俱發。踉蹌頗惱。殆乎欲仆矣。是夜別業記之。

十月三十日。陰。出褥調飯。辭丸山君宅。與清雪俱發池田。歷住吉邑。東行里許。達於本村。訪知友岳東丸山君。君懇淪茶備糖菓。以待余與清雪。且饗畫餐。款待至矣。談笑過刻。而辭出。適陰雲芊々。天將欲雨。乃兼程而往焉。抵穗高驛。過友人東山上條君。々延余與清雪於別室。供

茶菓以遇。談晤數時。乃告別。比着於池田。日已昏黑。不辨人面。主乎酒舖關君宅。即爲清雪之實家。其夜主人。置酒大會。引巨觥。而相屬。微醺辭入寢室。

十月卅一日。晴。卯牌離衾。後散策於郊外。詣於八幡宮。觀杉山君巢雲壽碣。文山陽賴氏之撰。而係于文政年間之建設。歸而訖餉。與清雪負瓢提殼。而探白駒橋景。俗云登或東行逕達山麓。索路而踣。栗殼累々塞途。時刺趾疼甚。登數百仞。有茅舍。老僧夫營籠居焉。既登抵一丘。亦有獵夫。植稚松數株。障烈日。卯童相俱嬉戲。清雪先到。覘詞鳥獲否。獵夫曰。今朝寒甚。故獲鮮矣。清雪倒囊悉購之。携而之焉。塗在山頂。四壁奇岩爭出。千態萬狀。有書手亦不寫到者。所謂白駒橋者是也。橋架絕壁峭直如馬背者。屈曲二條。接續而爲一。有欄防行人失足。長大約三十弓許。是日也天地清明。萬岳攢蹙。蒼黛如拭。四隣寂然無人聲。左右皆絕壁數千仞。宛疑身在雲上。一失脚萬無生理。兩岳所相迫爲峽谷。々中有小丘數四。項背相望。蒼松黃柏如織錦。點々錯落。如置奕棋。而山皆裸裎。杉檜爲之毛。而大小飛鳥翱翔相戲。乃攢朽株而燒火。炙鳥而爲殼。脆肪如水。傾巨杯而相酌。醕醢蹣跚。及日漸昃。而就歸途。下山涉溪。走行漸而着麓。拍瓢而謠。相與罄歡而歸。是夜譚友淡堂中島君來訪。快談數時。抵入定而還。

十一月一日。晴。辰牌起於寢床。時紅日三竿。頗慙於侃老。餐畢而取暖於火間。傾談過時。須斯而時表報亭午。午下沐浴。繙逍遙漫筆。抵黃昏夕飯。初鼓就寢。

十一月二日。晴。八點出衾。散步於後園。午飯而後。調馬於郊外。久之馬疲甚。喘息吐舌。潯汗浹於腹背。策而不進。不得已而止。未牌半驟雨大至。淫々不霽。黃昏餉而就寢。

十一月三日。晴。是日當天長節。聖上誕生之日也。是以味爽離褥。漱口饋面。禱 聖壽萬歲。余謂清雪曰。校暇已竭。不可久淹留。乃相俱上歸程。後下六點着松府。

望白山

冷

骨

屹立青空際、居然天下尤、雪光復一白、靈氣肅千秋、群岳渾臣僕、北溟寧好儔、偉觀有如許、遠客未須愁、

曉起步園中

殘夢和濃霧、悠然意暢哉、名心薄如紙、詩思冷于灰、蹴葉栖鴉去、穿林曙色來、踈鐘時始動、漸見古樓臺、

琵琶湖途上

一聲欸乃釣舟歸、七十二峯將夕暉、望好琵琶湖上路、蘆花千里雪紛飛、

風雪途上

逆旅晨辭復上路、疾風狂雪勢縱橫、馬遭折竹驚相避、地絕征人唯獨行、辛苦始知行旅態、忽忙忘憶故鄉情、此間也自存佳所、入夜四邊猶是明、

又

百里平郊望不開、層冰擁路積崔嵬、風衝枯木條柯折、雪擊飢禽羽翼摧、四顧濛々無畔岸、孤心擾擾暇徘徊、寒天日暮欲投宿、不識人家何在哉、

瓶中梅花

大和男子

文苑

五十九

一枝妬雪媚春陽、案上瓶中半吐黃、書室無邊頰郁々、博山今夜不須香、

春遊

東風裊々柳纒絲、白轉鸞啼旭影移、何圖客來双六局、半窓簾下鬪雌雄、

曉起尋溪梅

滿天霜曉栖鴉起、早發柴扉登菟歸、緩步溪東獨相尋、清香深處認冰姿、

寒江獨釣

風吹蘆荻水雲寒、明滅遙洲漁火殘、獨坐船頭閑把釣、半輪凍月照輕竿、

全

寒江蕭颯夕陽收、獨放輕舟釣滿流、支手頻疑小竿重、雪花積得滿蓬頭、

睡覺月色如晝霜風寥然作聲作一絕

夢醒枕上夜三更、凍月娟々如晝明、憐見破窓重簾裡、移來新竹影縱橫、

霜天曉渡

西山月落曉鴉喧、只認炊烟到小村、時覺橋頭人未渡、繁霜滿板莫鞋痕、

不如歸

香陽陳人

胡爲君獨滯邊城、寶雁既回鵲亦鳴、髮髮蓬飄吹雪亂、芙蓉淒冷映燈明、人心險似大行險、德義輕於鴻羽輕、吁噫不如歸去矣、仰望天末白雲行、

夢游富嶽

雲梯一夜度嵯峨、鶴馭天風出薜蘿、半壁微明紅日出、萬峰浮動白雲過、天開閻闔仙相下、星近祠壇手可摩、魂夢初醒猶悸魄、書窓燈火影婆娑、

望海追憶馬場辰猪君

長風散髮上高樓、大海茫茫望轉愁、忽地奔鯨搖岸去、無邊驚浪接天流、思迷萬里落機雨、恨入千年桑港舟、一曲招魂秋月夕、可能飛渡何神州、

書窓對白山

群山窓外走、靈嶽獨凌空、積雪自神代、凝祥北華嵩、中峯懸日月、一柱劃西東、相對雄心盪、拋書興不窮、

兼六園

維昔朔方鎮、登臨停客筇、連峯銜殿角、積水盪人胸、猶剩孤園勝、曾誇百萬封、低徊日之夕、何處吊雙龍、
金龍公創園與真龍夫人居焉

雜錄

蠅の話

K. O.

日清戦争の結果は我帝國に數多の利益を齎したる中に我第四高等學校には三箇の貴重なる動物標品を得たり夫は彼の地に名高き蠅にして二箇は本校肄業教員日下庄太郎氏の寄付に係り一は當郵

便電信局書記羽淵謙氏の寄贈に係る余輩居ながら此寶物を見るところを得るは實に二氏の賜にして其之を寄贈せられたるを深く謝する處なり余輩に取りては此戰利品こそ旗や Winchester 式の連發銃よりは實に貴重の獲物にして將來數多の青年に一大智識を與ふるものなれば聊か寄贈諸氏の好意を空しうせざらんため本校所藏の書籍を参考し余の實驗したる所を記し茲に其外形に就きて述るとはなしぬ

蠍は其形恰もゑびの如く全長五セ、メ(二寸弱)許頭胸二部は癒着して硬く、腹部に連絡す頭胸部は梯形にして短く凡そ六ミ、メ腹部は俵狀七環節の前腹部と圓柱狀六環節の後腹部とより成り頭胸及び前腹部は稍扁くして脊面青黒く各節に三稜線あり後腹部は竹の節の如く連環し細くして恰も尾の如き觀を呈す色淡黃褐色にして上面窪みあり其末端の一節は少しく膨大して毒鉤をなし毒鉤は細く銳利にして穿孔あり下方に屈曲す毒液を分泌する腺二箇ありて常に之を貯へ其鉤を以て他軀を螫す時は此孔より毒液を注入して以て大害を醸す

頭部に於て上顎は小にして一對硬くして鉗狀をなし觸鬚亦一對大にして螫を以て終る其狀宛もカニの手の如く四節より成り二ニミ、メ(七分許り)長し四對の脚は胸部の各關節より出で其前二對は食物を食する用を助け後二對は全く歩行の用を爲す各末端に一個の鉗を以て終る此等肢部の色は腹部の後半部と同一なるを以て色の排置稍美し

眼は此類の動物にて三乃至六對の單眼ある由なれども今此標品を見るに四對なり其一對は殊に大にして頭胸部の脊面の正中線の左右にあり他の三對は小にして頭部の前兩角に一列に三對づゝあ

り

前腹部の第三乃至第六節の腹面の左右に細き裂口あり之を Stigmata と稱す呼吸孔にして空氣は此門より肺囊に入る雌雄の生殖機は第一腹環節の腹面に開き之を覆ふに左右より閉合せる二個の小瓣膜を以てす第二腹環節の腹面の左右に一個の橢形の物八字形に附着せり之を Pectines と稱す此物は恐らくは環節付屬物の遺物にして感觸器ならんと云ふ雄は其螫の中廣きと後腹部の長きとを以て雌と區別すべく雌は胎生にして卵は卵巢中に孵化發育す

此動物は暖地に産し常に暗所を好み夜陰に至て居所より出づ其走るや後腹部を上方に屈曲し専ら蜘蛛類及び他の大なる昆虫類を其觸鬚の大なる鉗にて挟み尾端の毒刺を以て之を螫し死に至らしめて以て其血液を食とす

蠍は分類上蜘蛛類 Arachnoidea に屬し亞族蠍類 Scorpionidea に入る和名をそりにして學名は Buthus 屬の種類なれども今之を調ふるに途なし然れども歐洲南部に産する Buthus occitanus Amour と稱して長を二寸八分程のもの甚だ能く類す此類の動物は歐洲亞弗利加印度支那朝鮮等に産し三四屬あり亞弗利加の Pandinus africa nus L の如きは五寸に達すと云ふ本邦には之を産せずと雖も琉球には一種をそりもときと稱するものあり此動物はさそりとは異にして尾端に毒腺なく却て上顎にあり故に噛まるゝ時は其毒に感ず此類は同じく蜘蛛類中の觸脚類 Pedipalpi に屬し形狀稍さそりに類すれども後腹部即ち尾部甚だ細く短くして鞭の如し世人往々にして曰く蠍類は火を以て之を圍み若くは他の方法を以て甚だしく之を脅喝する時は自

ら死すと然れども諸書を參考するに夫は事實ならざるが如し何となれば自身の毒は自身に働くものにあらず又自ら自身を刺すものにあらず假令自ら刺さんとするも尾は下方に曲らずして上方に屈曲し毒刺は之に反して下方に曲れるを以て能く刺す能はざればなり

本邦には幸に此恐るべき害虫を生ぜざれども古語にさそりの語あり之れ薬用として印度支那等より舶齎したるゆへ古より知られたるなり今左に和漢三才圖繪を擧げて其用法等を詳にせん
三才圖繪卷五十二二十丁に全蠍、蜘蛛、杜白、主簿蟲、蠶尾蟲等の名を示して曰く

本網、其形如水黽(アメン)八足而長尾有節、色青、螫人有毒、雄者若螫人痛止在一處、用泥傳之、雌者痛率諸處、用瓦溝下泥傳之皆可也、蠍子多負於脊、子色白纒如稻粒、又云被蠍螫者以木梳合之神効(余思ふに是れ或は梳の糸底などにて其局部を壓し以て毒の他の部に波及するを防ぐに由るにあらざや)

蠍青洲山中石下有之、江南舊無蠍、唐開元初以來徃徃有之、產東方、色青足厥陰莖藥、小兒驚風尤不可闕、今多以鹽泥貯之、入藥有全用者謂之全蠍、有用尾者謂之蠍稍、去足焙用

△按倭無蠍、此蟲雖有治驚癇之功而常螫人之害甚大焉、然則無亦可也、本朝得中和之氣、故諸毒藥亦不猛烈也
五雜俎云、相傳、爲蠍螫者忍痛問人曰吾爲蠍螫奈何、答曰尋愈矣、便即豁然、若叫號則愈痛、一晝夜始止、蠍雙尾者殺人

又本草綱目啓蒙卷二十七卵生蟲の部四十六丁に

蠍 ゼンカツ 通名 シヤムシ 長崎 一名 伊祈 事物 伊娜 事物 雌娜 名物 蠶通 通 渴沙 全上

蠍子 訓蒙 字會

原蠍ノ一字虫ノ名ナリ尾ヲ用ルテ蠍梢ト云ク用ルテ全蠍ト云テ今誤リテ全蠍ト虫ノ名トシ或ハ蛭蠍ニ作ル方書モアルハ甚非ナリ此虫和産ナシ長崎ニハ蠻船ニ入り來ル活物アリ唐山ヨリ來ルハ皆鹽藏スル者ナリ故ニ多クハ碎ク折レテ全形ナル者ナシノ身ハ蠶蛹ノ如クシテ八足アリ此外ニ前ニ向ヒテ兩足アリ手ノ如ク長クシテ末ニハサミアリ尾ハ細長クシテ蜻蛉ノ尾ノ如ク末ニ勾レル刺アリ全キ者長サ三寸許又薩州ノ大島ニ「ヘヒリ」ト呼蟲アリ形甚ダ蠍ニ似テ身大ニシテ尾短ク手モ甚ダ短クシテフトシ(余思ふに之れ或は「さそり」もどきならん)

日下氏の寄付に係るものは遼東半島海城縣唐王山後と稱する所にて昨年九月中氏自ら獲たるもの、由又一個は旅順口にて羽淵氏が獲たる由は二月二日の北國新聞に記載しありたり今日下氏の談話に依り當時の實驗等を聞くに氏一夜就眠の後燈火を消したるに床上に怪しき微音を聞きたるより火を點して床上を見たるに一個の異様の虫匍匐し居たるも燈火に恐れて敢て進まんとせず唯手を張り尾を搖動すると甚た迅速なりしと此以前大本營より蠍のとは圖にて示し注意ありしゆへ必定此敵ならんとやがて火著にて狭み鐘詰の明がらに入れ下より火を以て焼き殺したりしと去れば色少しく赭黒色なり其後一個は蠍の害を蒙りたれば石炭酸を浸して後乾燥して保存したりしも不幸にして一個は尾部環節を破損したり氏の話に佐治少佐不幸にして此敵の害を蒙り右の手首を螫されたれば部下の士卒數名手首を木綿にて緊縊し直に病院に人を走らしたり其間毒は緊縊にも

係らず上部に進むさま著しく筋肉は瘤の如く隆起して漸次に肩の方に及ぼす故士卒は尙ほも追次に緊縮し既に脇の少し上迄及びし頃漸く醫員來りたり其間僅に甘餘分なりしが醫員の言に事少しく遅れたる故腕を切斷するも或は餘毒の爲め治療速かならざるべしとて遂に右腕を切斷したれども其後七十餘日を経て漸く全快したりとぞ此虫の害若し心臓付近の部なる時は數分時にして絶命すと云ふ西書に依れば病毒は劇烈なるも死に至るは罕なりとあり然れども勿論種類に依りて異なるとならん因に記す此害は心臓麻痺を起すにありと

此動物は蜘蛛類と一般光を恐るゝものにして石の下練瓦の間等に蟄伏し夜間に到らざれば出でず該地屯駐の士卒等一日煉瓦造の塙等を破壊して搜索したるも遂に獲ざりしと夫は然もあるべし何となれば火なくしては見出す能はず光あれば出でざればなり土民は此動物をシユズと稱し之を恐るゝと甚だしきにも拘はらず夜中火を消して眠に就くと云ふは愚も亦甚しと云べし尤も毎夜出づると云ふにもあらず其出づるや猶ほ本邦のゲヂ〜が偶ま出づる如くなるべし
 以上は左して面白き事にもあらず又多少人の知る所なるべしと雖も幸ひ此標品を手にするを得たる喜ばしさに聊か記すと爾り

漫遊漫筆 (其一)

在文科大学 太 卿 樓 主 人

こは前の編輯員なりける主人より惠まれたる私信中の一節なるを、多興有益、主人の健筆多々益々健なるを窺ひ見る可き者あれば、請得て茲に掲ぐることはなしつるなり。かつら識

一日鐵道馬車にて淺草に走り橋場の總泉寺に幕末の奇才子平賀鳩溪の跡を吊はむとす。途待乳の聖天下を横ぎり登臨す。木葉枯落し盡して樹梢朔風にされ、寒江一帶白鷗の翼淋しげに向島に立つ。砂烟は千騎萬馬轟然にかけたつるかと疑はれ、折々通ふ布帆の影も冬日斜に受けて何となうすさまじ。境内に戸田茂睡の辭世碑あり又戯作者柳下亭種員の碑あり。寺男南椽にめぐり臥して弱き日かげに暖をとり髪見稀に來るも風寒きに久しく止らず。見下せば山谷堀の泊舟今宵何の夢を乗すらむ。今戸に立つは昔の煙ながら幾そはくの消長を見けむ。哀れとは夕越えて行く人も見よとよみしそのかみはいかに荒れたる鬮なりけむ。去りて石濱の邊彷徨ひては、空しき城跡に、康正の昔を忍び、こゝは淺茅が原の跡ときくに、古き歌

人目さへかれて淋しき夕まくれ淺茅が原の露をわけつゝ。 古き歌

あたしのや焼もろこしのかははかり

を思ひ出でつ。總泉寺は千葉家の香華院、石疊巖めしき墓も多かれど、斷碣こゝに倒れて雨にされ殘積かしこに起ちて苔蒸せり。古き新しき何れ人間追れがたき唯一路の標ならざるなし。鳩溪の墓探りて得ず。却て寺門靜軒のを得たり。是も亦一代の健筆禁忌に觸れしは彼も此も轍を同うす。實にや碌々たる腐儒中に嶄然一頭角を露はし者よ。彼を得て此を得たるはまた相償ふに足らむ歎。鳩溪の諸著はもとより靜軒の富史茂睡が紫の一本皆嘗てわが愛讀措かざりしもの。特に後者の如きは嘗て舊京本能寺内北風窓を撲つ夕秋雨梢を拂ふの朝、鬱を散じ悶を遣るの好師友たりしもの、其書によりて其人を識り其墓を撫でて其跡を吊ふ、豈多少の感なからむや。况や善愁

の身をや、又况や天涯の孤客をや。惜哉天我に筆を借さで詩人空しく人間に老ゆくを。こころみの終りて學生の身のまた半日の閑を偷むとを得ぬ。いかで浮世の様をも見人の心の程をも知らんには、と再び人しげき淺草の街の塵にうき身を染め暫し幻霧に眼をかしくかへるさ、いつしか今日もくれ竹の根岸の里に御幸の松の姿さびれて道行く人の足のそぐ頃、名にしあふ日暮の里よぎりて谷中の森に來て見れば、天王寺の五重の塔の頂に西日影きらりと映りしも消え、軒に小鳥のたゞ一羽はばたきせしも去りぬれば、樹の下陰はやうく黒みそめ、茶店の老媪席をたゞみて家路に歸りしあどは萬籟寂たる瑩域の夕。梢ばかりの櫻木にほの暗き宵月の影を亂せる木枯の風は絃歌湧く風流院と共に嗽たる鬼啼に似たらむ。死の庭を照さむとてか、やさしの心や。拏たる孤影寂たる天地に對して冥想一番すれば艸の上の露も久しく蟻の世も長へなり。こゝは名家の墓石澤なる中に、ふと行手に立つ一墓見遣れば、實にや雲井は名のみにて小塚原の霜と消えにし名士龍雄が碑なり。そも彼が一世の奇傑たりしは云はずもがな。我は唯其世のすゝみに伴はざりしを悲むなり。血を流すは劍なめれど、見えぬ手をかりていくそはくの益良雄を斃すは時世の激變ぞかし。順に死せしは全榮あり、逆流に溺れし人の哀れさよ。試に彼が書感詩を讀みて、嗚呼男兒所貴唯意氣、不合則遺臭合則流芳と云に到らば誰か一滴の紅涙襟を霑さる者あらむや。蓋英傑の社會の寵兒たりしものを稱する聲は噴々として耳にあるも、未だ世は俊傑の空しく逆境に斃れしに同情を表する深からざるは何ぞや。誰かいふ人は罪惡の骸なりと、社會も亦多くの罪を人に對して負ふものぞかし。龍雄が奇しき天才は事業の上に敗れたれど文藻の上に

凝りて金石の聲ありとやいはむ。(我さきに思想之幽囚に云ひしにも似たらんか) 際耻平生氣宇窄、君不見有窮女字婦、一飛走月々爲家、我亦將遠探其窟手攀天柱折其花、亦不見巖山仙子其名晋、駕鶴漂渺斬雲陣、我亦將遠極八宏橫絕弱水我輒、聞說八州外別有五大洲、長風舟放破浪舟、烏拉之山太平洋、去矣一周全地球、とわはれ烏拉の山越えて太平の海渡りたらましかば、龍も雲井に昇りたりけむを、髪を束ね刀を帯びて露京に入りにし其上の書生、今は外つ國に使する尊きつかさとなり、兵を率ひ船をつらねて北海に據りにし人も治れる御世の大臣となりぬるに。あはれはかなき夢見しや汝。西國に下る友に送るとて

はりまがたかへる船路になく郭公君が寢覺の旅衣かきつけていつを望むらむ都の空か古里か
とよみし龍雄が中々にやさしかりつる心のはど、壺梅十首と併せ見る可し、など、よもなきを
こちつゝ歸り來れば、霧立ちこむる上野が圃に晚鴉さむぎて入相の鐘も陰に閉ぢたり。月見の橋を
過る頃、雲井を渡る鷹の聲あはれ何をかなくやらむ。

故 郷

予父母の膝下を離れて、力を學業に悉まにするもの、茲に十年、其間新年に會ふ毎に、歸りて父母を省せざるなし、鷄鳴三聲曉を報し、金線斜に屋背を射て、萬象瑞靄々たるの時、淑觴を捧げて堂に昇り、進むて双親の壽を賀す、温乎たる其容、湛乎たる其貌、我心亦搖々として酔ひ易く、緩甕たる和氣堂に溢れ、怡然たる其樂言ひ難き哉、而して予北遊以來、歳を異郷に迎ふることを二

回、新年樂しからざるに非ず、歡樂多からざるに非ず、而も胸臆一片蕭々の情あるは何ぞや、處故郷に非らざればなり、詩に曰く「獨在異鄉爲異客、每逢佳節倍思親、遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人」と、王維予を欺かずと謂ふべし。

遊子故郷を悲む豈に他郷の新年のみに限らむや、金城の春色愛すべし、櫻花爛熳として梢頭錦を織り、啼鳥嚶々として樹を繞りて囀る尾山の朝、恍惚として魂天外に飛ぶの思なからんや、金城の秋色愛すべし、玉兔松頭第一枝に懸つて、虬龍地に布き、秋氣池邊に満ちて玉露草端に輝やく兼六園の夕、神澄み氣行き、羽化登仙するの思なからむや、然りと雖も、林煙漠々として鴉邊暗く、野火點々として明滅するの時、或は短檠影は暗くして火星の如く、萬籟寂として蟋蟀聲悲むの時、獨惆悵として欄に倚り高適か所謂「旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然、故郷今夜思千里、愁鬢明朝又一年」の感なき能はず、或は半宵眠冷かに惡臥狼藉なるの時、春風獨り夢魂を吹ひて、冢山に落ちしめたること夫れ幾度ぞや。

故郷何か爲めに慕はしき、父母の居ます處なればなり、兄弟故舊の在る處なればなり、平和の神の鎮座する處なればなり、社會の人事繁雜、轉吾人を惱殺せしむ、人常に天真なるものに非らず、感な多少の粧飾を加へざるはなし、交際とは何ぞや、己の天真を粧ふて、如何にも莊嚴らしく、如何にも親切らしく、時に聾者となり、時に盲者となり、樂しからざるに笑ひ、悲しからざるに泣く演藝にあらずや、吾人は其俳優にあらずや、而も其假面を剥けば、功名、利慾、嫉妬、猜忌、憤怒、煩惱、凡そ諸の罪惡相争ふに至りては殆むと嘔吐に堪えたり、談話温粹笑靨春海の如きの

處、舌下毒を含むの針なきか、葡萄の美酒夜光の盃、銀燭煌々として四筵に輝やくの邊、其酒其肉馱毒の藏するなきか、社會は偽善者の團躰に過ぎず、レツシング曰く、人若し眞に美ならば、飾らざる時最も美なりと、予故郷に於て眞に此感なくんはあらず、父母兄弟親戚朋友、皆幼時の予を以て之を遇す、予も亦幼時の予を以て之に接す、思ふて言はざるなく、行ふて憚る所なく、躊躇なく逡巡なく、藩籬なく徑庭なく、而も期せずして春風の習々たるを覺ゆ、世若し樂園なるものあらば、予は故郷を樂園と言はん、修飾何の要する所ぞ、偽善何の用ゆる所ぞ、况んや、天然に對して相指點して舊時を追想する時ぞや、無情の天然も情緒あるか如く、滾々として吾人の心に一種謂ふべからざるの感を惹起せしむ、慧たる彼の丘之れ祖先の墳墓に非ずや、稷たる彼の木之れ小學の庭樹に非ずや、晚雲岫を出づるの山は、朋友手を携へて登臨したるの處なり、穉穉縛をなすの堤は、蹕座竿を垂れたるの處なり、彼の水彼の谷咸な吾人の幼時を追想せしめて、連想連想と相連り、舊時の予目前に髣髴として、無限の情味掬すべきものあり、此時に當て一點汚濁の念を其間に挿まんや、氣平かに心太古の如し。

嗚呼故園の梅花今や春信を傳ふるや否や、余の生るゝや、阿爺一株の稚梅を東籬に植う、樹年と共に長し、今や正に丈に餘る、余故郷にあるの日寵愛禁せず、阿爺曾て余を諭して曰く、見よ籬邊の梅花、年々嚴冬を凌ひて清香を吐く、小野篁の歌に「花の色は雪にまじりて見えすとも香をたに匂へ人の知るべく」と、之に豈に梅花に托して、人生を諷詠したるものに非ずや、梅花を頌して君子といふ恂に以あるなり、汝成人の後世の逆流に投して混々世と濁るも、尙ほ令徳自ら人

を化する、恰も梅の暗香人の袂に充つるか如くなれど、余深く肝に銘して朝夕忘れず、而も學業未た半にして前途茫茫、頑骨依然として人を薰するの徳なし、余深く之を愧づ。

阿漕浦の松籟濤聲と和するや否や、贊崎海上白帆靜かに浮ぶ處、暮爾たる參尾の山、水天髣髴の際に懸る處、每夏余朋友抵掌泗水を試みたりき、金を鑲すの炎熱何の厭ふ所ぞ、暑甚しければ藥愈極まる、抑も樂の極まる所以を遡れば、炎暑の酷烈も亦愛さるべからず、余等豊かに鷗の如く五牀を浮べて、「ヨイヨラ」を絶叫したるの時、如何に勢海の魚鼈を驚かしめしよ、余は倦みて龜の如く沙上に横はり、炎天甲を乾かしたるの時、添黒の色如何に「チグロ」を欺むきしよ、當時手を携ふるの友、一部は參商隔絶、他は已に幽冥にあり、人生糾へる繩の如し、今年東土の客明年西海の人に非らざるを知らんや、今朝低語の友、明朝黄土の鬼たるを識らんや、佛者の所謂生者必滅、會者必離の理、素より怪しむに足らずと雖ども、當年を回想して多少の感慨なき能はず。

白木の机猶在りや否や、余初めて中學に入るの日、汝を購ふ、爾來星霜五年一日も汝を離るゝ事なかりき、余車胤孫康の苦學なしと雖ども、寒夜燈を挑けて牙籤を繙き、靜かに古人に對するの時、汝能く余を輔けて、治亂成敗の跡より、算數玄妙の境に至るまで、微を搜め奧を探るに倦むなからしめたりき、余の汝に於る知己の感なくんはあらず、余北遊以來、相分るゝ茲に二年、思ふに汝庫底塵埃に塗れ、狡鼠の侮る所とならん、余豈に一滴の涙なからんや、汝若し情あらは首肯するや否や。

樂しかりしは、双見浦頭の夕なり、濱千鳥倦て飛影を鳥間に隱せは、清渚の姫小松、晚風に嘯ひて天籟聲あり、漁夫疲れて鱸聲波間に絶ゆれば、野火山巖三郎松の邊に燃えて燄々光あり、天心の圓月何を盆に似たる、見渡せば、清光波を射て千里一望、曲灣々たる長汀、月と共に湧き出づる高潮に碎けて、錦綉の瀾となり、危礁の參差たる處、濤聲澎湃たり、灰嵐の亂立するの傍、巨人の對話するか如きもの、之を双嶼とす、余二見に遊ぶ前後十數回、實日館上君を煮て相談じ、或は輕衣を微風に飄して行吟したるの日、悠然たる其眠、夢魂飛んで天上の月に落ちたりき、今の半宵眠をなし難きに比し、今昔の感なき能はず。

桑陽の西北三里、岩曉たる青巒群峰に秀で、翠滴らんとするもの、之を多度山とす、山腹一祠あり多度神社といふ、靈驗赫耀として詣ふ者砥の如し、眸を放ては、勢尾濃三州指呼の間にあり、長亭短亭を點綴して、蜿蜒長蛇の如く脚下を流るゝは、之れ木曾の緩流か、遙かに崢嶸を抜ひて、莊容兀たるは信濃の御嶽か、白鷗豊かに浮ぶは勢海の扁舟か、青螺の碁布するは志州の諸島か、勢海湖の如く、山嶽朝するか如きの處、余曾て天然の大畫圖に對して歌へり、歸る必ず山下の茶亭に憩ふ、庭中清泉あり、水最も清冽、水岸の青苔倒涵せる翠微と相合して、混沌一様の碧をなすの中、放つに鯉魚を以てす、大なるもの三尺、小なるもの尺に下らず、試に泉に投す赤手之を捕へんとすれば、潑測として跳り、翻然として遁る、亦快なり、之を羹とすれば味尤も美なり、余此に於てか陶然として樂み、悠然として還るを忘るゝを常とす、余夢寐の間も此樂を忘るゝ能はざるは何そや、鯉魚我望む所に非ず、天然を愛するの深きか爲めなり。

豈唯に之のみに限らんや、爛々たる公園の花、泛々たる崑川の舟、逶迤たる走井の山、澄徹たる岩内の水、可憐なる我姪恙なきや、嚴格なる我師健在なりや、思一たび爰に及べば、未だ必ずしも「夢とまりせはさめさらましを」の句を想起せずんばならず、諺に曰く、之を東楡に失して之を桑梓に得と、識らず故郷に代るの樂あるや否や。

嗚呼故郷忘じ難き哉、諸葛孔明は之か爲めに南陽の舊草廬を慕へり、陶淵明は之か爲めに歸去來を歌へり、人若し窮厄に遭ふて天下身を容るゝに處なくんば、速に爾の故郷に還れ、故郷は唯一の歡迎者として喜んで爾を取らん、如何なる惡魔の手か爾の故郷に伸びんや、人若し顯達に遭ふて盛名赫々たるあらば、速に爾の故郷に歸れ、故郷は無二の喝采者として双手爾を迎へん、如何なる頌讚の聲か故郷より大ならむや。

地質學的太古の人

天 外 生

今を距ること六十八年前西曆千八百二十八年「ツールナル」及び「クリストル」の二氏佛蘭西の南部に於ける炭酸石灰窖に就て探検したると同時に博士「ズメリング」氏は佛蘭西「ミウズ」河畔の灌漑地に在る骨窖を探検せしに其石床の下に人骨と人類の製造したる切骨及び燧石が穴熊其他前世界に棲息したる動物の骨と床を同しくして残りたるを見たり又千八百四十一年に於て「ゴットウフン」、「アウステン」氏は英吉利「ケント」州「ターキー」附近の或る洞穴に人骨及び燧石器の象犀等の遺骸の化石したるものと共に亂推するを報告せり殊に佛國の古物學者「エドワード、ラティート」

英國の古物學者「ヘンリー、クリステン」氏等が中央佛蘭西に在る洞穴及び岩窟を探検せし折り人骨と石器と幾多の馴鹿の遺骸を發見し往昔此處に野蠻人の生活をなし尙又多くの馴鹿同地方に棲息せしことを證し且是等洞穴中に往古の人類と云ふ動物が書きし圖畫及び彫刻物を發見したりと云ふ

以上の如き明證を以て地質學者は説を唱へて曰く人類と云ふ動物は此等前世界の胎生動物が地上に横行せし時既に生存したるものなり而して之を稱して地質學的太古の人或は石器時代の人類と云ふ

此等人類の生存せし年代の如きは漠然として今日より精密に計算すると能はずと雖も當時使用したる器具の遺物が發見されたる位置により豫め其年代の數萬年を経過したることを知るべし抑も舊石器時代(石器時代ヲ新舊ニ代ニ分ツ)の器物は尤も粗を極め少しも意匠を弄したるものなし而して此上層の新石器時代の遺物に至りては稍々意匠の見るべきあり其上層には青銅時代及び鐵器時代の遺物を發見す而して此等の遺物と共に發見されたる動物は既に種屬の絶滅したるものあり或は馴鹿の如く遠き地方に有るものあり或は「マムモス」の化石の寒地に發見されたるに由て考ふるるときは前に述べし如く此等遺物の發見されたる英佛の地は古代氣候寒冷なりし氷河時代ありて當時人類も生存したるものなるを知るべし

然り而して此等人類と云ふ動物の念頭に始て浮び出でたる思想を考ふるに必ず其身軀に對する須要物にして饑渴を防ぐ食物身軀を温める火又は彼等と共に棲息する猛禽野獸に對し身軀保護の爲

めに安全なる居所及び武器とす而して人類の未だ地上に發見せられざる以前に清水は山間より流出したるべし故に流水の近傍に居を占むれば水の欠乏を感せずと雖も彼等は清水中に魚鱉の潑刺たるを見禽獸の森林中に舞躍するを見て之を食はんとの希望は起るも彼等を捕獲殺傷するの器具なければ止むを得ず徒らに垂涎三千丈畜野生の果實を食するの外なし左れば彼等が始め要せし器具は即ち食物を求むるに便利なる器具にして此器具は必ず猛獸を倒すに適する堅牢なる者ならざるべからず是に於て周圍に散亂せる石骨等の銳利なるものを撰みたり而して此等の武器は主に燧石とす時としては黒曜石を用ひるものあり最初は少しも意匠を加えず天然の儘に粗造なるものなりしも爾來年々歳々人智の進歩するに従ひて改良を加え其形の宜しきものを得て鎗頭短劍斧棍棒簇等を製し後年に至り之を研磨し啻に食物採取の器具に供するのみならず他の動物に對する防禦の器具とし或は同種族間の争鬪に供する武器とす而して啻石器を使用したる時代を舊石器時代と稱し研磨術を識得し聊か改良を加えたる時代を新石器時代と稱す石器時代の遺物は多く古代水力の爲に穿てたる穴或は人工の穴中或は穴の附近に於て發見せらるるものなり

此の如く穴中又は穴の附近に石器及び古代人類の使用せし器物を發見するは如何なる理由あるや抑も人類は夜間睡眠を安全にし或は猛獸の襲撃を防禦する爲に住居の必要を感じ天然水力の爲に穿たれたる穴に住居し或は人造の穴を地下に穿ち或は大石を累積し或は湖水中に家屋を建築し以て住居したるものにして穴口は大石を以て閉鎖し獸類の家宅侵入を妨げたり之れ吾人が往々見る所の穴居遺跡則ち傳燈寺の穴居の如きものなり

古代人類が石器を以て他物を打ち又は獨木船製造の時に於て兩個の木片を摩擦するに當て火花を發し初めて火なるものを知り或は寒冷を覺ふる時手を摩擦し温暖を感じ摩擦すれば熱を生し火を發するを知りたるは火を使用するの端緒ならん然れども此等の火花は一瞬時にして生し一瞬時にして滅するを以て之を貯へんとするの觀念を發するは自然の理法にして鳥類其他脂肪に富みたるものに火を點して貯へたるものとす

最初人類は生肉を食したるも人智進むに従ひ美味美食を望むものにして遂に燧人氏を待たずして火食の法を知り肉を火上に煮りて食し或は一個の穴を堀り其上に獸皮を擴け水を充たし肉を入れ赤熱の石を投し水を沸騰せしめ肉を煮て食したるものなり其後粘土を以て粗造の器物を製し或は日に曝し火に由て乾したるものにして之れ制窯陶器の始めなるべし

古代人類に意思を適するの言語ありしや否や明に知ると能はず古來學者の大に研究し心思を費ひやす所なれども必ず今日の動物が互に叫聲を以て意思相通するが如く或は吾人が使用する摸擬的言語則ち「ドン」「ワン」「ヒーン」等を以て銃聲犬の吠へ聲及馬の嘶聲を示すが如く必ず彼等も亦意思相通するの器具たる言語を有しなるべし而して彼等の圖畫を畫きしものなるは彼等の遺物と共に發見する馴鹿の角片上に一群の馴鹿を彫刻したるもの并に「マムモス」ノ牙片上に彫刻物あるを以て知るべし

雜報

紀元節

二千五百五十六年の昔

皇祖

神武天皇帝位に畝傍の橿原の宮に即き給ふ、此年を以て我國紀元第一年とす、爾來列聖相繼て上に在まし兆民惟常に下に安しぬ、皇威日に加はり皇圖月に恢廓す二千五百五十六年の今、明治廿九年二月十一日午前九時、我校祝賀の典を倫理講堂に行ふ、職員生徒謹て

御眞影を拜し校長 勅語捧讀終りて式を了る

高橋教授病氣全快

吾人は特筆大書して之を賀せざるべからず、其病氣の故を以て久しく欠勤されたる高橋教授、二月初旬以來豐饒たる身軀と老益壯なる精神と

を以て再び畫陶の勞を執らるゝ事となりぬ、篤學博聞なること先生の如く、熱心誠實なること先生の如き蓋し稀れなり、而して其齡を問へば古稀を過ぐ、誰か先生か學生を導くの難に任して自ら逸するの易きに甘せられざるを感謝せざらむや、病氣全癒を祝す

寒稽古終る

一月六日曆日寒に入りてより無聲堂裡曉夢を破つて丁々々々の聲を聞くもの實に我雄心勃勃たる劍道部員諸氏か寒稽古となす、夫れ寒稽古の行はるゝ五高皆然らむ、而かも特に吾人か我校を推して最快速最盛の四字を冠せむと欲する所以亦理なしとせむや、蓋し寒稽古の事たる日昇て已に三竿漸く起き出て、庭後の折竹に昨夜の奇寒を追想する如きにあらず、鷄鳴未だ晨せざるに衾を蹴て起く其一なり、積雪を踏み吹雪を凌ぎて走る其二なり、精神爽快なるに乘し劍を學

柔道部

ひ心を修む其三なり、寒きか爲めに筋肉緊まり早きかために爽快なる精神は他事に攪れず専念以て其術を研め一心以て其膽を鍊る、身健に術進み術進みて膽大いなり、而して三者中雪を犯すの苦否快に至りては恐らく我校の右に出つるものなかるへし、膝を没する積雪、高履其用をなさず、洗足之を提げて走らざる可からざるは吾人常に經驗する所、目を盲する吹雪、外套の頭被を奪ふ寒風、朝々暮々の凄烈は北國男子か特受せる天賦の賜物なり、嗚呼是れ天賦の賜物なり、而して此の賜物を賜物として享受せる快男兒、其數四十、三十五日を通して一朝も欠席せざりし熱誠者、其人五、請ふ光榮ある其の姓名を記臆せよ

因に記す、元我劍道部員たりし堀尾揆一君第五高に轉校し、昨臘該部第二級に編入されたり、而して堀尾君は我校に於て第四級なりき、柔道部は特更に寒稽古の舉行なかりしと雖とも昨夏岩崎先生就任以後月を閱する六、日を算する百八十、一週三日の規定日は部員の健腕脾肉を慰するに足らず、日曜を除くの他、日に二十乃至三十の出席者を致せるは其熱心喜ぶ可く技又漸く熟して堂に昇り室を窺ふもの尠なからず二月二日替古初の取組は上達進歩の顯著なるを示して餘りあり、詳細は本紙附録を讀め

雪中一日行軍

金城の東北程遠からぬ小金村字別所の山陰に約三百の制服制帽の同勢、問はずして知る、是れ我第四高等學校本部醫學部學生生徒の雪中一日行軍なることを、進まず退かず潜むて發せざる

稲並 幸吉

藤田 良平

田中崎太郎

里見 元壽

宮北 友吉

もの豊に伏を設けて他を要撃せむと欲するか、怪しげの服装せる者右に走り左に廻り高きに登りて手をかざし低きに下りて頭を傾け忽ちにして集る六七、倏ちにして散して一なきもの豊に斥候を放つて敵状を偵察せしむるが、斥候是れ獵夫、積雪を踏むて沈むを知らず、峻坂を攀ちて高きを覺えず、一瞥して能く敵陣の虚實配合を悟る一文半解の識なしと雖とも猶其業に精うして裕に一日の軍師たり、自任大丈夫の輩唯々として其命を聞く願て笑はさらむと欲するも得へけむや、敵者耳聴くして善く走るもの、兔族是れなり、時は一月廿九日、測候塲頭紅球警を戒むるの日、夜來の六花繽紛として霏々たり、風威時に猛を加へて樹枝皆劈けむと欲す、第一分隊は福見教官之を率ゐる第二三分隊は日下、宮川兩教官各此に將たり、磯田中尉之を總ふ、獵夫の準備成るを待て牧を銜み魚貫して登る、

谷間を圍みて並列し一方人稀れにして旌旗靡る所是れ羅網を張る所、腕を扼し杖を揮ひて意氣正に昂、即ち一聲の相圖は萬雷の導火、卒然として鯨波地を震はせ荆棘を叩いて雪坂を下る、山高きにあらす、雪深きにあらす而かも矗立幾仍下るは下るにあらすして落るなり、登るは登るにあらすして亦落つるなり、轉顛滑倒純白の大塊、自から疑ふ我れ兔に化せずやと、衆の洪笑を招く固より宜なり、仰けは白と褐と二匹の眞狡兔、俄然時ならぬ風に温かき晝寐の夢を攪破され一躍二躍三躍して而して蟾蜍の騎すへきなく周章狼狽長耳を翫て、謂ふ所の脱兔の勢、聲なき所に突進して鈍くも勇士が待ち構えたる一撃の下に斃れぬ、然れとも其斃れたるは小褐大白を逸したる遺憾の念、再舉を促して第二の戰場に移る、降雪は益烈しく山又山の巒峰は朦朧として辨すへからず、興味愈湧きて盡きむ所

を知らず、地形山長く走せ谷廣く凹み、複雑の設計諸隊の機を失し躍り出てたる一白兔逃げ去るに任せたるは遺憾更に遺憾を重ねたりと雖とも、頂より麓に至り樹木の障碍なき所、四肢を廣げて滑り下りたる愉快は百鬼の獲も得て代ゆへからず、此に於て休戦の令出て山上雪席飢腸を肥やす、飯粒凍りて氷を噛むか如く一啖、冷齒根を害して身爲めに震ふ、事此に至り誰れか征清軍の朔風遼雪に轉戦せる勞苦を念はさらむや、武者震ひして蹶起し第三の戰場に向ふ、此戰場や、渠れ軍師輩前敗を償はむか爲めに特に選定せる所にして境域甚た廣し、遠卷きの用意全く整ひ喇叭一吹踴躍并舞して下る、ホイ／＼の急促聲は少しく經驗ある者の口より出てワァイ／＼の大緩調は初陣の若武者に發せらる、或は過て深雪に陥り殆んど全身の没入は自から出つる能はずして僅に人の扶けを受くる

ものあり、或は好て急坂に轉し外套の裳を樹枝にかけて首足位置を異にし驚いて駭くものあり大に呼び大に驅け歩疲れ聲涸れて漸くにして網に近づけは何ぞ計らむ又々「ニヒル」ならむとは、三百の勇士、八人の軍師、前後三回山を上り谷に下り又山に攀ちて辛うして獲たる所唯是れ一小狡兔、然れども吾人は決して失望させるなり、嘆息させるなり、行軍の目的必ずしも兔其物に在らざるなり、兔を獲ると獲さるとは寧ろ吾人の心を悩ますに足らず、吾人は此兩三年間雪を見、山を望む毎に未だ嘗て兎狩の二字を想起せずむはあらざりき、蓋し三冬の長き徒に爐を擁して蝸廬に閉壘せむこと、元氣勃々たる青年に在りては殆むと堪ゆへからざるの束縛なればなり、而して兎狩なるもの積雪を踏破し山野を跋涉す、柔弱に腐りたる身軀は鍛以て鍛ふへく、倦怠に眠りたる精神は覺以て覺すへし、

吾人は學校か毎年此の勇壯活潑なる運動を施行し學生諸君は又奮て從軍せむとを切望せむはあらず、既にして路大槌を過ぎり校長の響應あり自由解散せしは正に午後三時、

擊劔部懇親會

三十餘日の寒誓古と昨日の稽古初との勞を慰め并せて部員が懇親を計り肝膽相照して談笑せむ(稻垣君の語を借用す) 目的を以て發起されたる擊劔部懇親會は六花地を捲て來り寒風骨を刺す二月十日午後二時より蛤坂妙慶寺に於て開かれたり、會者秦、柿田、岩崎三先生を始め部員有志者六十餘名、目隠しの遊戯は琴々板間を踏み轟ろかし、左らぬだに飽くを知らぬ健啖者輩、空腹飢腸を忍むて御馳走遅しと待ちかけぬ燭點せられ一人起つ者、稻垣文次郎君、滿腔の熱心侃々の言となり諤々の語となり、鍛身鍊膽一に斯道の力に依るへきを説く、説終り酒出て

肴出て耳熱し腹足りて而して後吟聲湧き劔光映す、秦先生吟し且つ舞ふて種々の心得より上田午之助の話に及ぶ、岩崎先生又舞ひ單に劔道と云はず柔道と云はず、一言之を約して所謂武道が古來如何に我國家に偉大の勢力を有せしかを論じ此により「何に」と云ふ負けぬ魂即ち日本魂を涵養鍛冶し、小にしては一身の爲め大にしては一國の爲め奮發精勵せむことを切望され、次て柿田先生同じく舞ひ廿一年より今日に至る本校擊劔の盛衰を述へらる、其他部員諸氏交々起て劔舞す、若し學生中最も活氣あり元氣ある者はれ運動部員にして運動部中最も活氣あり元氣ある者劍道なるを知らは慷慨天地を空うし、熱血古今に濺く青年壯士が臂を交へ膝を進めて快談高話せる狀況の如何に勇壯なるへきやは想像し得るに難からざるへし、况んや秦、柿田兩先生の後進を誘掖するに忠實なる、胸襟を披瀝

して推すに其心を以てし知つて語らざるなく、語つて益あらざるなきに於ておや、部員意氣軒昂、熱心の度十倍す、野崎安近君一たひ口を開て毎日稽古の議を提出するや滿坐翁然議忽ち決す、以爲ふに斯道の隆運今より將さに益旺盛ならむ、兩先生去る時、十時三十分衆次て散す、

道友會

道友會とは嘗て吾人か本誌に於て其名稱を報道せし所、當時其名を聞き其實を知るも會員以外何等關係の波及するものなかりしを以て雲烟過眼視せずむはあざさりき、然るに今や其規模を擴張し毎月一回諸名師を招聘して佛教上の名論卓説を請ひ、隨意傍聽を許すことにはなりぬ、二月一日公園内覽勝亭に於て開會したるは本年第一回にして第四中學寮長岡本覺亮氏佛教歴史に就て講話ありたり

若し夫れ無明の迷夢を覺悟して真如の月影を仰

かむと欲するもの、須らく半日の閑を濼て此の清靜の淨席に侍せよ、益する所少小と云はむや

青年俱樂部

既に道友會あり、青年俱樂部なかる可けむや、俱樂部は基督教徒の團躰、我校學生を以て正員とし、校外の者を客員とす、二月廿二日午後六時より英學院に於て開會、赤羽萬次郎氏(大伴家持)三好旅團長(軍事談)の話あり傍聽隨意の廣告は始めて此部ある事を公にしたりき、夫れ宗教の必要不必要は討論問題として屢學生に歡迎せらるゝ所、常に好題目たるは偶以て宗教か精神界に有する勢力の大なるを證するに足らむ、而して道友、青年二會二大宗教を代表して我校に生る、由來する所決して偶然にあらざるべし、我校校風萎靡不振も甚たしければ、

中屋河野兩君送別會

席は是れ同じく妙典寺、客は是れ同じく士官候

補生、軀幹魁偉なるは中屋重業君、容姿瀟洒たるは河野義雄君、兩君か床間に端坐せるを見、誰れか飯森、阿部兩君を此席に此同事情に於て餞別したる當時を想起せざらむや、何ぞ中屋君の飯森君に似て而して河野君の阿部君に似たるの甚しき、昨は吾人國家の干城を得るを喜び、我校運動場裡特に斯人を失ふを悲みき、今や即亦其喜と其悲とを重ねぬ、而かも吾人は之を三たひし、四たひし、五たひし將た十たひし百度するを辭せず、辭せざるは飯森君の後に中屋君あり、阿部君の後に河野君あるを信すればなり兩君去るも兩君との交情は地の遠近、校の異同に依りて變せざるを信すればなり、嗚呼行けよ兩君、國家は雙手を廣げて兩君が就任を待てり送る者は大島校長、秋山、今井、秦、宮川、岩崎諸先生、及び同窓八十許名、日は二月十六日

北陸史談會

一月卅日午後一時より尋常師範學校講堂に於て開かる、第一席三間正弘氏（河井繼之助談）第二席浦井鍾一郎氏（史料とは如何なるものなりや）第三席河島松太郎氏（加賀若松より越中に至る沿道名刹舊家に就ての實見談）各括弧内の講題を述べられ四時散會、此日三間氏は河井氏及其墓碑の寫真版を寄贈せられ會員は何時にて一覽するを得る由、二月廿三日午前九時より同會を同しく尋師の講堂に聞く、第一席武藤元信氏は史料の調理に就き第二席三間正弘氏は河井繼之助談（續前會）を各核博詳細に講演せられ正午近く閉會、序に記す、各地斯道の名家古老續々入會あるは斯學の爲め大に賀すへき所、不日同會報告書第一號刊行あるへきは又大に賀すへき所

片々記事

講話、一月廿四日岡村教授馬來群島歴史を動

物學上より講演あり、二月廿一日浦井教授露西亞談ありたり、時節柄の政事談にあらずして旅行談

出發、累年の宿望を達したる中屋、河野兩君は二月十八日と廿四日とに各就任の途に上らる、中屋君は近衛騎兵に、河野君は第三師團砲兵に、

有恒會、文科一年生の設立する所、文學上の講話をなし雜誌を編むて廻覽せり

法二會、近來演舌を厲行し氣篋萬丈、法一會、學生の活氣由來此會に在り
 文友會、花輪教授に依頼して一週二時間英語の科外勉強をなす、勉強なる哉

時習寮進運第一步

吾人が曾て筆にし又夢みし時習寮の自治制は、遂に寮生全体的希望と校長舍務掛の意向と相迎へて、其或部分の實施を見るに至れり。吾人は

吾人の所説が唯一場の空論妄想に止まらざりしを喜ぶと共に、我辰章校、時習寮、寮生の歩武一段を進めたるを慶して賀せざるを得ざるなり、

此議實に客年末の茶話會に胚胎し、或は室長會議となり、或は起艸委員撰擧となり、遂に本月二日寮生總會に於ける新規約議定となり、學校長の認許を得、始めて實施したるは實に本月二十日なりき。其要とする所は、從來の細則規約を全廢し、學校は内則七條を以て其大綱を示すの外、寮生は總て新規約二十五條を以て其責任を明にし、特に室長會議及週番室長の權限を擴張し、寮生相互の制裁を勵行し、以て舍務掛の御世話（特に御世話といふ干渉の語に弊あればなり）以外に寮生たる品操を保持し、完全なる校風を振作せむとするにあり。吾人今は唯着々其効果を收むるを望むに止めむ。若し夫れ舍を増築して普ねく全生徒を涵集するは學校經費の

許す時を待たんも、此察の自治的傾向をして百尺竿頭一步を進ましめ、細則規約の文飾を去て赤裸々たる自治の本躰となすとを得るの日は、噫、何年何月何日の後ぞ。

小言一束

苟も議式に臨まば臨むだけの心得あれよ、謹慎整肅は敬なる所以、身を動かし聲を發し敢て或は禮を紊るなかれ

必ずしも家居にも袴を着けよと云はす、又必ずしも外出には之を着けよと云はす、されど苟も學校の門内一步を踏み込まむ時少なくとも袴を着けよ、制帽またおなじ、唯夫れ制帽にして着袴せざる甚た不可

猥りに他人の草履を「アツプ」するを止めよ、己れの困る所は他人も困る所、己れの欲せざる所は他人も欲せざる所、窺に「アツプ」す義と云ふへけむや

演説討論部大會

暗愴凄慘憂ふべく慣るべく又慨すべき雞林の大變動にさきだつたの三日二月八日を以て第二回演説討論部開會の舉あり顧みれば客歲杜鵬月 皇師の連捷は遂に頑冥驕傲の清國をして降を軍門に乞ふの己むを得ざるに至らしめ春帆樓上所謂東洋の二大豪傑が樽俎に折衝せし結果は端なく茲に三國の干渉を招き天下の民心何となく危惧安んぜざると今日に髣髴たるの際に於て始めて演説討論會の開かれしより爾來十閱月予輩は未だ嘗て一たびも同窓諸氏が卓厲風發雷霆を震盪せしめ風雲を叱咤するの論辨を聞くを得ざりき其之を聞くを得ざりし所以の者は辨ずべきの士少かりしが爲か果た論ずべきの問題なかりしが爲か抑も亦委員の斡旋足らざるの致す所なるか予輩は敢て既往に溯りて其孰れなるやを推究す

るの勞を取らざるべし只部員諸氏が層一層の熱心奮勵を希ふのみ辨論術の必要は衆口的一致する所今更吾人の喋々を待たずして明なり將來各國と外交場裡に馳騁し宇内に濶歩せんとするの櫻花國民たるもの一日も之を忘却して可ならんや蘇張を凌ぎシセロ、ピットを駕するも亦太平素の修練によるデモッセニスが今古の大雄辯家と稱せらるゝ所以を考ふれば修練豈に忽にすべけんや贅言はさておきイデア當日の概況を記さむ

會場は生徒控所二時の號鐘場内に響くと共に開會の辭は委員中大路氏によりて陳べられぬ尋で壇上に睥睨するものを法二の野村淳治君とす其演題は「外交の擴張」なり君は先づ日清戰爭の勝利より説き起し尋て曰く如何に軍備を擴張し如何に殖産工藝を進歩せしむるも國家として未だ完全なる發達をなせりといふを得ず國を鎖ぢ外

を謝し桃源の夢をむすびし時代より一變して戰勝後の今日に至りては外に交る上にも範圍をひろめたるだけ其責任も亦大なりされば軍事工藝以外に外國を壓服するの術を講ぜざるべからず是れ本論の起る所以なりと夫れよりクリミヤ、普佛、露土戰爭の結果に論及し中央亞細亞印度の覆滅を歎む權力平衡を主とする現時に於て三寸の舌頭或は百戰の功に勝るとあり故に吾人は奮つて外交場裡に馳騁せざんば永久人後に墮若たらざるを得ざるべしと論結して降壇せられたり其辯稍早きも音聲朗に且つ其態度の活氣満々たることによりて聽者の同情を博し得たり

第二席 演題は「剛毅」辯士は伴房次郎君とす予輩は君に向つて一段の修練を望まざるを得ず忌憚なく謂へば演説としては未だ門にだに及ばざるなり語或は禮を失せんも説くと半ばにして三分も囁嚅たるが如きは贅すべきの事に非ざる

べし其説の大意は人生を渺海の一粟に比して其果敢なきを長嘆し人間の精神は理論以外に廣大なる範圍を有するものにして英雄豪傑はかゝる果敢なき趨勢をも一轉し悠々之に處して餘あるなり是れ即ち剛毅の氣象によれりとして例を南洲が江戸城引渡しの際に於ける舉動並びに王守仁が虎穴に熟眠し或は軍中にありても講書依然たりし態度に取り最後に西諺を引きて曰く剛毅と瀑布とは自ら道を求めて發するなり剛毅ならば萬事孰れか成就せざらんやと、

伴氏の演説終るや白面可憐の一青年は演壇に上りぬ彼の軀幹は小なりと雖も其音吐清明にして能く滿場に透徹し言語亦明晰詳かに論旨を聞くを得たり其論ずる所は「將來の日本」なり彼は開口一番國家に永遠の目的なかるべからざるを論じ露英の二國が今日天下に翺翔する所以は其永遠の目的あるが爲にして西班牙葡萄牙和蘭等が

定めざるべからず今や亞細亞の形勢日に非に月に衰ふるは文明の風潮に乗ぜざるによる印度ペルシヤの覆徹考ふべし吾人は亞細亞を糾合して東洋の盟主たる方針を以て進まざる可らず然れ共既に平和の保護者を以て任ずる吾人は決してアッグレシブ、エキスパンションをなす可らず必ずデフエンシブ、エキスパンションの方策を取るを要すと以下進んで對歐策に及ぼし西歐列國の形勢を論じて曰く英佛獨露の各強國互に競ふて國家の力を以て商工業を奨励鼓舞し駸々乎として其底止する所を知らず平和の戦争は時々刻々行はれつゝあり吾人は之に對して如何なる方略を執るべきやとて其方畧を説き國家は宜しく其全力を擧げて貿易殖産を奨励し人民一致協力して外敵に當るの確乎たる精神を維持せざるべからず領事を増派し條約を締結するが如き其階梯なり若しよくこの方針に遵ひて勇往邁進せ

一時威を宇内に振ひながら現況の萎靡たるは永遠の目的なきによるとし尋で我國目下の狀勢に及ぼし日清戦争は落着せしも日清事件は未だ終らざるに滔々たる海内の人士既に完了せるが如く思惟せるを慨し更に論を進めて日本將來の目的は第一宇内平和の保護者たる事第二世界文明の先導者たるにありとす之を達するに就て現時の世界は平和なりや亂世なりや文明か果た野蠻かと疑問し遂に現今を以て文明を假裝せるの暗黒時代なりと喝破し氣焰を揚ぐると萬丈而してこの目的を達するの困難なるを説き例を古今に徴して曰くシーザルの英明なるも其敵ポムペイの像下に鮮血を注ぎナポレオンの才畧も絶海の孤島に淋しく凄愴たる寒月に照され英魂空しく朽ちて長へに還らず其他の大人傑士概ね皆然らざるはなしと而して又曰く吾人がこの目的を達せんとするにつきては須らく對亞策と對歐策を

ば大和民族は五大洲に雄飛するを得べしと論結して喝采の中に壇を下れり四十分餘の長演説はやゝ聽者の倦厭を招き且つ終りに臨みては聲嗶れ音溢りて聽苦しく思はるゝ點なきにしもあらざりきヂェネチエアーの未熟なるは蓋し亦已むを得ざるとならんか然れ共其熱心と勉勵とに至りては予輩彼に推服せざるを得ず彼とは誰か即ち法科三年の修三佐治君是なり
佐治君の演説半ばならんとするの頃よりして聽者陸續として參會し殆んど百名に垂んとす辯説を修練するの手段は單に自ら語り自ら談ずるのみにあらず人の舉動態度はた其論辯の如何を察して他山の石となす亦その一手段たり予輩はこの理由を以て會合毎に聽衆の多々益増加せん事を切望するものなり
栗本貫一君第四の辯士としてあらはれ謹嚴莊重の辯を以て「品性の修養」を説かれぬ其概要に曰

く人物の如何は品性の修養如何にあり品性の修養なき者は其人如何に才學に富み文藝に達すといへども決して人物を以て許すべからず其力山を抜き其氣世を蓋ふの士も未だ人物と認むるを得ず博士學士と誇稱するもの豈に又人物ならんや吾人が孔子の言行に隨喜しイエス、ルーテルを崇拜する者は彼等が義務的觀念に富み品性の修養備はれるの人物なるを以てに非ずや凡そ人物たらんと欲せば先づ精神的教養を務めざるべからず否らずば日に百卷の書を讀み月に千萬の技藝を學ぶと雖も是れ碌々たる一小人にすぎざるなり今や社會の風潮は滔々として只利に惟れ奔り勢に惟れ附きて止まる所を知らず其浸染する所骨髓に達す狂瀾を既倒に廻さんと欲する又難い哉嗚呼萬籟寂として聲なく沈々たる半夜夢さめたるの時獨り自ら省みて慚怍たらざるもの果た幾許かある思ふて茲に至れば吾人は婦女子

ならざるも流涕せざるを得ず吾人青年は百折不撓の精神を以て誓てこの弊風を矯正せざるべからざるの任務を有す然るに悲しひ哉前途有望の青衫にして美食佳衣を愛し功名を得るに汲々として毫も品性の修養を意とせざる者多し吾人はダイナゼニス、高山彦九郎にあらざるも將に白晝燈を掲げて品性の修養ある士を探求するに至らんとす豈に慨嘆の極にあらずや吾人が慨歎する所以は決して人物なきが爲にあらず人物たらんとするの士なきにあり同窓諸君旃を勉めよと題は品性修養論、人は栗本君相照し相應じて轉た予輩の心胸に感慨の念を生ぜしめたり惜ひ哉語勢の緩急未だ蔗境に達せざりしや演壇は栗本君を送りて黒紋付の眼鏡子谷野格君を迎へぬ君は「御尤千萬」なる題目によりて左の旨趣を陳述せられたり曰く天下其語の卑近なるが如くにて奧妙なる眞理を含むもの多々あり御

尤千萬の如きも亦この中に洩れず往古蒙昧の時代にありて人々各「我」を主として他の如何を省せざりしが人運次第に進歩するに隨て自他並立の必要を感じ人生の目的も詮じ來ればこの數語に出でざるに至り箇人の交りに於ても國家の交りに於ても「御尤千萬」の大切なるを覺えたり然れども利弊相伴ふは數の免れざる所、その極は強て己れの意を枉げ正といはず邪といはず萬事萬物皆御尤千萬と稱して「我」てふ觀念を消滅せしむるに至れり之を稱して八方美人主義といふ

を人に施す勿れと又大聖イエスの語に曰く己れの欲する所之を人に施せと「御尤千萬」もかくの如く己れを主とせざるべからず否らざれば吾人は奴隸の境遇に甘んぜざるを得ざるに至るべしと、猶一二現時我が國の狀態に論及して局を結ばれたり君が辯説は優に一の文章をなせしも憾むらくは辯稍急にすぎたるによりて予輩は僅かにその大意を寫して満足するの不得已に出でたり

夫れ人は社交的動物なれば自他並立といふ點に於ては些の異議を挿むべきに非ざるも我が利害は必ずしも他の利害と一致せず國家は箇人と利害を異にし一國は他國と利害を異にする事亦勘なからずとせず然るに何事にも御尤千萬と稱へんが終には國家の獨立を犠牲に供するに至らん東亞の哲人孔丘の語に曰く己れの欲せざる所之

次を秋田信太郎君とす流石は京都尋中に於てさるものありと知られたる君の事とて其態度の悠々迫らず落着拂つたる、其辯の暢達せる、誠に其評判に負かずといふべし然れども嗚呼然れども若し辯論の目的にして果して能く人心を感動せしめ他の胸臆に推すものなりとせば予輩は未だ君に許すに雄辯家を以てするを得ず辯の輕快は予輩之を視る舉動の場慣れたるは予輩又之を視

る然れども眞實率直他の心胸を衝くの分子に至りては予輩之を視んと欲するも又得べからず口辯如何に巧なるも肺肝より出でたるものにあらずば決して人を感動する能はざるなり君亦勉めずして可ならんや君は「日本の中等社會」を論ぜんとて登壇し徐ろにエツプの水を傾け靜かに説起して曰く今を去ると遠く二千年の昔し荒蕪たるナザレのしかもいぶせき茅屋に於て呱呱たる初聲に伴ひて一偉人は生れたり其名をイエスキライストと云ふと君はかく語りて衆の喝采を博し尋で曰くクライストの博愛主義平等無差別主義は舊政を厭苦せる歐米諸國の理想的制度となりて之を實際に現出せんと欲し或は佛國の革命となり或は米國の獨立となりしも彼岸に達する能はず遂に無政府を主張する社會黨虛無黨を生じて個人の權利自由は毫も侵害すべからざるを唱道するに至れり然れども多くの先覺者は個人

の權利自由その極に達するときは是れ國家の存立失するの時なりとし所謂民權又國權を論ずるもの四方に起りて辯難攻撃止まず要するに今日世界が制度に關するの理想は専らこの二者を調和するにありと更に歩武をすゝめて我國の狀況に論及し吾人も亦この風潮に洩れずと斷じて維新革命以來の趨勢を説き今日調和論の出でたるは誠に喜ぶべきの事ながら其論や惜ひかな中等社會に考へ及ばざると喝破し其位置形况の如何を論じてヒスマルクが英獨二國の貴族を評せし語を引き之を我中等社會の狀態に考へ我國の風俗習慣社交等は皆この階級の維續する所なりと二三の例をあげ、上等下等社會の模様を説明し終りて中等社會の將來に考案を運らし同一の原因と同一の事情とは必ず同一の結果を生ずる者とせば歐洲殊に獨逸社會黨の生出せし所以の狀況に鑒みて恰も之と同地位にある我が今日の

中等社會の救濟策を講ぜざんばあるべからずこれ吾人の一大急務にあらずやと論結して壇を下られたり殆んど一時間にわたるの長演説なりしかも間々滑稽を加へて痛く聽者の倦厭を招くに至らざりしは實に流石々々といふべきなり

漢川戦死に先たづこと一日補廷尉正成明極楚俊禪師に問て曰く生死交謝之時如何禪師答ふ曰く兩頭俱切斷一劍倚天寒と一語正成をして最後の大覺悟をなさしむ而して予今此大問題を掲げて聊之か説明を試みむとすと劈頭深奥なる譬喩を吐て聽衆の耳目を驚破したるものは春秋原在文君となす我演説討論部内雄辯家其人なきにあらず能辯家其人なきにあらず然れども玄妙なる哲理を解剖裁斷すること日常茶飯を喫するか如きは蓋し何人も難むする所にして而して恐らく春秋君か最も得意とする所ならむ「生死交謝之時如何」是れ豈に容易に説明し容易に説服し得

へき問題ならむや而かも君は半紙一葉に充たざる草稿を振ひ滔々として論辯し去りたり高尙にして幽玄、深遠にして奥妙、君曰く生とは死と死との間に介する一瞬時の現象なりと遂に深草の元政坊を捕へ來りて生を喜び死を惡むは人間の一般の情念なることを證し更に例を麗姬にかりて是れ果して迷惑にあらざるかを疑ひ進むて五蘊は皆空にして一切は因果理法上の幻形なりと斷し引き寄せて結へは草の庵にて解くればもとの野原なるべきを説き泉涸魚相與居濕の譬は生死の並空なるを確め電光影裏斬春風、電光も空、春風も空、空を以て空を斬る是れ亦空と終りに君は得意の莊子を引きて其論を結へり請ふ本文を抜して筆を次席に移さむ

莊子妻死、惠子吊之、莊子則方箕踞鼓盆而歌
惠子曰、與人居長子老身、死不哭亦足矣、又鼓盆而歌不亦甚乎、莊子曰不然、是其始死也

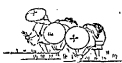
我獨何能無概然、察其始而本無生、非徒無生也、而本無形、非徒無形也、而本無氣、雜乎芘芴之間、變而有氣、氣變有形、形變而有生、今又變而之死、是相與爲春秋冬夏四時行也、人且偃然寢於巨室、而我噉々然隨而哭之、自以爲不通乎命、故止也。

演壇は前後七名の辯士を送迎して時間漸く迫れり餘す所は部内桂冠の飛將軍飛石久太郎君比馬拉山の高きに比したる我日本帝國の國威もとの絶叫は意義と共に其語勢を低減して細く悲しき響を傳へ一轉して強國たらむ四元素を擧げて曰

く Material resource 曰く Moral reputation 曰く Organization 曰く Federal position 而して

君は此四者を取て一々之を我國狀に對照し第一第二第三は歐米諸邦に劣らざるのみならず却て大に誇るべきものあるも獨り第四に至りては之を思ふ志士をして涙潸然たらしむと君は實に此

第四者に向つて其全力を傾注せり而して此か説明を外交手段に求めて曰く外交の秘術は敵の弱點を捕ふると斷乎たる決心を示すとに在りと三國干渉は彼に依て詳しく解剖されたり抑揚頓挫に巧に或は寧ろ抑揚頓挫に過ぐる辯舌姿態は纒々として竭きざるも暮色は彼をして結論を急ぐの已むを得ざるに至らしめぬ君曰く日本をして世界の比馬拉山よりも高からしめむと欲せば同盟の地位を得ざる可からず而して之を得むには外交術の研究を要すと演題は「日本帝國」



一文一武偶相逢

附錄
武藝大會記事

說盡英雄各不同

附 武藝大會記事

傳へ得たり安心の法とは枕上に音づるゝ萬壑の

松風を聽くにありと、あゝ其松風を聽きて自心を安らめ腹を鼓して大平を祝し國光を謠ふべき時なりせば我輩の快はそれ奈何ぞや。落花三月酔益々發し、春雨春風たゞ其吟嘯を擅にせしめむも、然かも安心の境に至らずして既に安心の法を求むべかりせば其終るところ果して如何。

史を繕て恨を今古亡國の跡に灑ぎ、怒を暴國殘虐の後に發するものありとせば、天下は腹を鼓して謠ふべきの時なりとするか

遼東の白鶴去つて影なく、此時癡鷺北枝に息ひ、翼を伸ばして遙かに東海を望む者、これ僕が秘藏せる一幅の畫圖也、而して僕や生平この幅に對して滿腔の熱血を灑ぎ數行の紅涙を浮ぶる所以のものは、自から其の所以を云ふを欲せざる

也、それ痛を恐るゝ者は須らく痛を知るの人なる可く毒を怖るゝ者は嘗て毒を知るの人なるべし。

今や同胞四千萬の衆は徒らに安心の法を尋ねて耳を松風に洗ふの時なるべしや、僕は不幸なる人爲的支離者にして其口も其筆も時に閉ぢられ時に奪はるゝと雖、唯この一事は云ふて而して不可なきを信ずるなり、即ち我輩學生が他日天下に立つて、行かざる可らざる路は決して平々坦々たる者に非ざる也。險巖激流高く聳を低く走る、これを攀ぢこれを涉らむとする者は決して容易の業に非ざるべし、今の學生たる者深く

慮るところなくして可ならむや。况んや其志を堅くし其の神を強ふせしめむとする一大刺撃物の、腦底に刻んで終生忘るべからざるあるに於ては、益發憤して爲す所なくして可ならむや、それ刺撃が人生に於ける良藥たるとは古今等し

く相傳ふるところ、彼の夫差が人をして呼はしめたる一言の爲めに遂に一度は越國を臣妾となし、勾踐が會誓に膽を嘗めたるは以て吳國を殄滅せし所以なりとせば、僕は一大刺撃が四千萬衆に與ふる他日の恩惠を、刮目して見むと欲する者也。神州の男子は氣骨あり、焉んぞ一度蒙むりたる終天の恨を、忘れて花に醉ふ者ならむや

而も險巖激流これを攀ぢこれを涉らむとするには、薄志弱行の徒が畢竟企て及ぶ所に非ざるべく、よし其志をしてしかく盛ならしむると雖、これを成効せしむるの軀軀なくして可ならむや。故に僕は彼の徒らにマ、ハ、を崇拜し、其健康を割て、以て犠牲に供するに忍ぶが如き者は、笑ふて其陋志を憐まざるを得ざる也。これと同時に入ては教室に其學を修め、出ては道場に其武を練るが如き者に至ては、満腹の同情を以て

其人を愛せざるを得ず

由來無聲堂よく好漢を出す、活氣焔々たる神州の男兒を出す、あゝ此活氣こそ個人として其偉業を奏せしむべく國家として隆運を計らしむべき也。これを譬へて假りに磐梯山とせむか、一朝爆裂すれば彼の奇觀を呈する者、轟然としては天柱を碎き爆然として數里の外を動かす。丈夫漢たる者須らく磐梯山を以て其志となすべきのみ、一度動ては破天荒の偉業を奏すこれ何等の快ぞや、若夫一片の心膽冷て寒灰の如くんば、動靜果してまた何の事をかなさむ。

嗚呼我無聲堂今や大に張る、學餘來りて武を講ずる者日に月に益多きを加ゆ、思ふに精神と軀軀と合せて練磨し、刺撃を刺撃として以て大に發憤する所あり、他日邦家の爲めに忠臣となり義士とならむと欲する者なるべし、これ僕が風夜悦んで快呼する所以にして、而かも辭せずし

て筆を武藝大會の記事に取る所以也

會日の模様

柔道は二月二日剣術は九日に行はる、來會する者三百餘さすがの無聲堂も所謂立錐の地なきに至れり、來賓の重なるものは三好第六旅團長三間石川縣知事酒井第七聯隊長其他文武諸官 龍關虎搏の光景は僕の拙筆に寫されて次にあり乞ふ就て見られよ

◎柔道稽古始

北辰子好んで柔道を學び日々無聲堂に出入して倦怠の色なしとするも歲月尙未だ淺くして其技亦頗る拙なるを免れず此日誓古始に於て天晴大達者よと唄はれむと思ひし滿腔勃々の野心も消えて影なく去つて跡なし憐れ疊か原に討死の骸を曝せし此身の何とてをこがましくも批評を勝負比技の上に試みむや一篇評語に關するところ多くはこれを同部の先進近藤

紅林の兩氏に聞きし者也唯夫この記事の文批評の字に對して服するを肯んぜざる人あらむ歟北辰子願くは其矢先に立ち責任の受くべき所は之を受け受くべからざるものはこれを受けずまた以て編輯員が外交手段は御尤千萬の四字にあらざるを明にせん歟

○二本勝負

第一組	3m7.	大外刈	田邊 靜雄 赤澤 欽次郎
第二組	30.	横掛	(醫)本多 勝久 高橋 亨
第三組	3m.	抑込 抑込	足掃 浦川 彦郎 名川 彦作
第四組	30.	浮腰	大外刈 (兵)中桐 恂 某 高梨 恂一
第五組	3m	大外刈	廣瀬 武英 田宮 春策
第六組	5m.	抑込 大外刈	永松 文一 田中正太郎

第七組 2m40. 大外刈 足掃 中谷 正造

第八組 6m. 膝車 藤田 貞平 多島與三 次

第九組 1m40. 大外刈 橫掛 長谷川茂一郎 中村 孝

第十組 5m. 引分 中村 光吉 笹川四郎 吉

第十一組 20. 橫掛 足掃 平澤象次郎 今井 三郎

第十二組 1m30. 橫掛 足掃 (市)石川 龍三 橫掛 中屋 重業

○岩崎先生柔道大意說明

○躰操剛之形 (深澤新一郎、中屋重業。

秋山信次、石田莊二、大森篤次、笹川四郎吉。

栗本貫一、長谷川茂一郎)

○躰操柔之形 (吉田弟彦、紅林豐治。高

梨恂一、山口重作。江間圭一、森山守次)

○一本勝負三人拔

○足掃 高橋 彦 高橋 亨

○橫掛 浦 高橋 五郎 亨

○背負投 浦 大森 篤次郎

○大外刈 石田 莊二 大森 篤次

○山嵐 長谷川茂一郎 大森 篤次

○大外刈 秋山 信次 笹川四郎 吉

○巴投 今井 三郎 笹川四郎 吉

○抑込 栗本 貫一 笹川四郎 吉

○大外刈反 栗本 貫一 平澤象次郎

○大外刈 中村 孝 平澤象次郎

2m30

2m

2m.10

3m.

1m20.

1m

1m

1m10.

40.

2m30.

3m40.

10.

○幼年組亂捕

○古流亂捕

佐藤龜久次 近藤他家雄

大島 亮治 雄治

○講道館流投之形

紅林 豐治 吉田 弟彦

○二本勝負(續)

十文字投 柳田 友麿 大外刈 巴投 大森 篤次

浮腰 石田 莊二 大外刈 秋山 信次

腰車 近藤 常吉 足掃 深澤新一郎

足掃 中屋 重業 分橫掛 五足掃 五條 隆圓

2m40.

6m.

1m40.

5m.

20.

1m30.

40.

2m30.

40.

1m10.

1m20.

2m

2m.

2m15.

2m40.

4m.

引分

第十七組 大外刈 大外刈 德岡 精彦
1m30. 高梨 恂一

第十八組 4m20. 躰落 山嵐 横掛 吉田 弟彦
江間 圭一

第十九組 巴投 浮腰 中屋 重業
近藤他家雄

第二十組 巴投 十文字投 横掛 紅林 豊治
佐藤龜久次

○初段立合之形

佐藤龜久次
岩崎 先生

○起倒流之形

近藤他家雄
岩崎 先生

以下は各番組に就ての記事及短評也

▲二本勝負

赤澤田邊兩氏の取組は失敬乍ら替古の日數淺きが故に、先づは腕力の搏闘と見て可ならむ歟。足掃數番は兩氏並に行ふて而も其効を見ず、蓋しこれ炭々乎として自然躰をくづさざるによる

と云はむ歟、今其技を以てこれに責むるは少しく酷なるを思ひ。唯今後の勉強を祈ると切也。高橋氏に對する醫學部の本多氏、其躰軀を以て比せば或は等しからむ、而も其技量を以てすれば好敵手と云ふを得ざる也。高橋氏の勝は寧ろ當然と云ふべきのみ。浦氏は瘦軀也名川氏は長身なり、唯其技に至ては浦氏は敏に名川氏は遲に、一目して多少の逕庭あるを思ふべしと雖、抑込(本袈裟)に至ては浦氏また如何ともするべからざる歟。蓋しこゝ名川氏の大得意たる所。來觀者中戎服の好漢、姓は中桐名は僕知らず。嘗て講道館にあつて乙組に席を列ねし者、今盛況を見て意氣禁すべからざるものゝ如く跳て其技を闘はさんとを求む、挑まれて進みしは同部の驍將、昨の紅白勝負にチャムピオンフラッグを手にしたる高梨恂一氏、緒身雪膚相映しては

仁王地藏の相撲を観るが如しと云はむ歟。仁王

其掌に握らしめたり

跳れり地藏静か也。而も恐るゝを止めよ高氏は我校屈指の勇者、中氏の巴投は空しく其効を奏するなく僅かに三十秒にして二度、疊を蹴つて僵る。あゝこれ此日第一の偉觀たりし也

浦井氏と中谷氏と比しては躰軀幾分の違ありしと雖其業に至ては浦氏一步を踰たるが如し、これ即ち差引一本の勝利を止め得たる所以とも見む。

廣瀬氏とは校外の一書生にして昨の夏暫らく來つて柔道は無聲堂に學びたる人也、而も長くこれを廢す、敗勢の歸する蓋し其どころなるべしと雖、田宮氏と合せて注意せんと欲するは、その腕力にある也。腕力先づ發して技盛んで出でず、願くは少しく慎むどころあれ

多島氏の業は敏捷とは申されざるも古參の腕前は確かに其短身を補ふに餘りありけむ。遂に一本勝負に止まりしは惜むべかりしも、膝車は見ん事敵手を倒したり、尙ほ藤田氏に向ふて希ふ者は、其腕力を慎まれんとにある也

田中氏は天晴れの長大漢にして永松氏また劣らざる長大漢なり。潑測々地、立ては大外刈伏ては本袈裟、四十疊の隅より隅に走り角より角に轉ぶ。一場の好景は兩氏の動作に止まらむ歟。而も勝敗の運今果して如何。田氏は新參なりと雖熱心なる其勉強は、畢竟全局の勝利を擧げて

中村氏に長谷川氏は同部に入りてより既に八九の月を経たれば、其こなしの如き頗る整へりと雖、強て缺點を求めむとせば、それ中村氏の腰の重きにある哉。笹川氏に至ては同部の熱心家、若し能ふ可くもは金鶏勳章功何級を呈せむと噂さるゝ丈け、其業に至ても頗る敏捷なる者ありし。一度背負投

に入らむとして過つて抑込に入られ、中村光氏満身の力をこめしにも關らず、巧に跳め返へし脱れしが如き、修行の日尙未だ淺き人とは思はれざる位なりし。而も双方遂に一本の勝負を見ざりしは、僕之を中村氏の腕力に歸せむとす。古參中村氏の如くにして寧ろ腕力に馳せ、人も僵さず己れも僵れずとの決心を爲せしは、竊かに氏の爲めに惜しみ且つ怪む所也

今井氏平澤氏は共に同部の舊顔なるが故に、躰整技熟更に批すべきものなしとするも、獨り平澤氏が其業を掛くるに躊躇せしを疑ふ

市内の劔術師範家たる石川氏今此場に立つ、多年の練磨は他流の柔術に通じ、幾月の修行は講道館流の柔道を解す。されば中屋氏に取りては侮る可からざる敵手たりしならむも、中氏亦是我校同部の驍將、満身の勇を呵してこれに對し、二本の横掛は物の見事に成功しき。勝敗の

事既に定まつて後なほ數分亂捕を試む、恰も是龍虎憤然として相闘ふが如く雲捲き風生して無聲堂裡寂々としてまた一語を發する者なし

二本勝負こゝに一局の終を告げて岩崎先生は靜かに立てり、蓋し來賓に向ふて柔道の何者たるかを説明せんとするなり。其要に云はく

柔術の名稱たる或は躰術といひ、拳法と呼び、更に和術と唱ふ其名稱はしかく異なると雖要するに大同小異にして、かのイ・ア・ヒ又は柔と稱し、ものゝみ。今ま世の柔術家の説を聞くに此の術はもと支那より傳來せし者にして陳元贊なる者我國に流寓してこれを授けしものゝ如く云へり。而かも余を以てこれを考ふるに、これ畢竟世俗の誤傳するところにして、また以て信ずるに足らざるを思ふ。蓋し柔の字は古書浮世要覽等に於て既に早く散見するところにして、而かも彼國にては柔術に關す

る書冊未だ嘗て存せしとを聞かず、或は彼國に行はれたる拳法拍打の稍我國の柔術に近きを以て、即ち遽かに其傳來するものとせしには非ざる歟。或はたゞに當時の風潮に従ふて支那風を吹かせ、以て一世の信用を得んと欲したる者歟。よし假りに陳がこれを傳へたるものとすも（一説に自から達して而して親しくこれを邦人に教へしといひ他の一説には唯談話に止まるとあり）彼の死は寛文十一年（歲八十五）にありとすれば其渡來せしは蓋し今より二百年を出ざるべし。而して竹内流の如きはすでに既に天文年間にあつて其一流を出せしを見れば、世説の決して信ずるに足らざるを知らむ。故に余は斷して日本固有の一法としてこれを見る者也。

こゝに諸生の修行し練磨するものは講道館流又は柔道と稱して、古來傳はるところの諸流

を基礎とし、これに學理を應用して敷衍考究したるもの也

とこれより先生柔道の效能を述べ並びに世俗が柔術に對する幾多の批難を辨明し、頗る來賓の謹聽を促したり

▲躰操剛之形

▲躰操柔之形

見事に行はれ、一方は柔道の如何なる場所にても修む可く一方は婦人小子と雖なほこれをなすに堪ゆるを示せり、終ては

▲一本勝負三人扱

となる

顯はれ出でしは名川高橋の兩氏なり、さわれ名川氏未だ高橋氏の敵手たる能はず足掃の一本に敗を取りしはまた止を得ざる也。次で顯はれし浦氏は小兵乍らも其業中々に老ひたれば横掛を以つて高橋氏を投げたるもいかでか日の出の勢

ある大森氏に敵すべき背負投に見事疊に抛たれ
き、此時腕をさすりて余れ當らむと跳り出でし
石田氏も遂に大森氏には敵せずやありけむ大外
刈にて哀れにも敗れ長谷川氏もこの勇者には辟
易したりけむ山嵐にて脆くも敗績。されは大森
氏は既に三人をは抜き終り天晴れ功名を戦場に
とめて引退きたり

次に引代りて新手的秋山笹川の兩氏は取組みた
り、秋山氏の膝車は自からも誇りてパテントと
稱せしかどこの敏捷なる笹川氏には何の効をも
奏せずして大外刈にて討死しき、笹川氏は秋山
氏を僵し勇氣勃々として今井氏を迎へ、敏捷く

も巴投を以てこれを僵し此度は栗本氏に取てか
ゝりしも、二度の組合にて少しく疲れを生じけ
む遂に栗本氏の爲めに抑込められたり。されど
も栗本氏は平澤氏の爲めに大外刈反しにて喰止
られ、平澤氏はなほ中村氏を大外刈にて追除け

しも、敏捷なる柳田氏の横掛にて討死し終んぬ
柳田氏は其業に至ては敏捷なり、よく敵の躰勢
を崩しよく敵の虚につけ入るも、其爲め自家の
躰勢を整ふに暇なく、こゝに近藤氏特意の拂腰
にて拂はれき。

近藤氏と深澤氏とは其業殆んど伯仲すと雖深澤
氏は勝負に於ては生平の誓古よりも寧ろ強き傾
ありしと且つは其腰の強かりし爲め近藤氏の拂
腰また遂に其効なく却て浮腰の爲めに敗を取り
ぬ

嘗て三高に馳名を專にし今は來つて我部の一員
に列なつたる五條氏は、獨得の長技として足掃
將軍の名を得たるが、果然深澤氏もこの巧なる
足掃にて掃はれにけり

次に顯はれし森山氏は一禮終ると共に直ちに仰
向に臥し、抑込を以て勝負を角せむと試みき、
これ或は五條氏の足掃を避けむ爲めなるか、而

も五條氏また抑込に其名を博せし者、いかでか
躊躇すべき直ちに本袈裟に掛け變じて堅四方に
入らむとす、危機一髪森氏は脱して立勝負を争
はむとせしに足掃しきりに來り、受損しなばあ
はれ笑止と思はれたる其刹那、森氏の左足は飛
んで左の大外刈に入りぬ。

即ち襲ふて森山氏を僵さむとせしは、さきに石
川氏を抛ちたる中屋氏なり、或は立ち或は伏し
森山氏則ち機を得て胴絞に入りしがとも、大方
の中屋氏物の數ともせず直ちに絞に入らむとせ
しを、二度三度は避けしかども、力屈し躰倦み
て片手絞に最期を止めたり

大兵の中屋氏は今小兵の徳岡氏を迎へ撃たむと
す、中氏勝つ可きか徳氏負けざらむ歟、機得た
りと得意の力を振ふて又候片手絞に入りしは中
氏、あはれ徳氏は運を森氏と同ふすべしや。顔
の色迄變りたる徳氏は今如何なる隙をや見出し

けむ其手を拂つて立上れり、二秒三秒未だ四秒
に至らずして巨松横に倒したらむ如くに中氏倒
る、蓋し足掃にて掃はれつる也
戦を挑む者は吉田氏也。これ昔し勇勢を同部に
轟かし、身ながらも、病氣の爲めに其業を廢せ
し如きもの期年、而かも當年の餘勇未だ鼓すべ
きものなしとせむや、遂に大外刈を以て徳氏を
刈り倒せり

この吉田氏に敵として顯はれし山口氏は、昨の
紅白勝負に驍名を得たる敵の紅將五人迄、引き
抜き引抜きたりし剛の者、吉田氏の横掛に入ら
むとせしに機來れりと直ちに跳つて上四方に入
る。想起す昨の勝負に於て山氏は遂に吉氏の横
四方に討死せるを、今や上横の差ありと雖、同
しく四方を以て其敵を抑込まむとす。循環の理
亦妙なる哉。吉氏しきりにあせつて山氏動かず、
十秒の聲今既に掛けらる、五、六七秒飛んで梭

の如し、あはれ今一本と呼ばれむとして、先生の口、開かむとして未だ開かれざる危一髪に、吉田氏勃くと跳ね起きたり、されども遂に足掃にて掃はれ終んぬ山口氏と高梨氏は其身軀も殆相似たり、唯夫れ高梨氏は業に勝り山口氏分合に勝る。今や兩將相對して起つ、高氏浮腰に入らむとすれば山氏横分に入らむと企て、山氏大外に出でむとすれば高氏直ちに其反に出でむとす。四分を出で、遂に引分となる亦た宜なる哉

新たに代る者は江間氏紅林氏、共にこれ四級の勇將也、唯紅林氏に至ては軀軀瘦短なりと雖其技を以てすれば遙かに江間氏に踰ゆる者あり、則ち遂に足掃を以て同氏の勝に歸せしはまた必然の勢ならむか、而も江間氏の敗を招きし一因とせしは、近頃學業多忙の故を以てしばらく其技を廢せし者、幾分かあづからざるに非る可し

佐藤氏は軀勢を以て秀で、紅林氏は老練を以て優る、されは紅氏の掛けむと試むる業も、佐氏の軀勢を以て阻めらるべく、佐氏の投げむと務むる技も、紅氏の老練によつて避けらるべし、然れども遂に佐氏の巴投は紅氏の不意に出で、流石の紅氏も遙か後ろに抛たれき

最後に控へたるは近藤他家雄氏なりしも、近佐の兩氏別に古流亂捕を行ふべき筈なるが故に一勝負はこゝに其終を告げ、即ちうつりて古流亂捕となる

▲古流亂捕

古流亂捕とは他流の亂捕也。技を以て闘ふに非ずして力を出して相搏つ也、更に貶してこれを云へば魚屋のつかみ合ともいふべき歟、これ等滑聲的亂捕を番組に加へたる所以のものは蓋し講道館流と他流との優劣を、口を以て説かずして其判断を自から看者の胸裡に訴ふが爲のみ。

其形態ば更に記せず唯他流の柔術を一见せし人はこれを眼底に畫くを得べし。

▲幼年組亂捕

冠して幼年組といへば毛脛の大男の亂捕に非ざるを知るべくいとも優しき童軀の髣髴として浮び出づるものなからずやは、大島校長の愛息亮治氏(十四歳)雄治氏(十一歳)が小さき替古衣を被ふて進み出でしには。來賓席も學生席も動搖めき渡りて拍手せり、拍手に迎られて兩息はいともあどけなく、さては巧に亂捕せられき捲込捨身業背投負腰業などなか／＼精しく達せられしかは看る人賞歎して驚かざるものなかりしき

▲投之形

紅林氏は受なり吉田氏は取也。兩氏共に多年の素養ありしと且つは並に形を得意とせし程あり

て、少しの滞りもなく見事に奇麗に行はれぬ

▲二本勝負(續)

笹川氏と共に大熱心家たる大森氏の、替古の熟達は誠に恐るべき程なり、今甲組の柳田氏と相敵して些の退色なき而已ならず、稍むすれば却てこれを僞さむとする氣合さへ顯はれたれば、柳田氏とてまた油斷するどころなかりしも、不幸氏は久しく其技を廢せし爲め遂に巴投と大外刈にて敗運を見るに至れり。さはれ第一本目に取りたる氏の十文字投、一喝軀を沈めて敵手を背より投げ付たるは流石に甲組の腕前見事とや申さむ

秋山石田の兩氏は其技も其軀も殆んど相似たるも唯勝負に至ては秋氏一步を踰するが如き觀ありけり、これ即ち大外刈にて勝ちたる所以ならむ歟。さはれ兩氏とも此勝負には頗る固まりしが如く、腕力の跡多少印すべきものなしとせず、

また少しく慎んで可ならむ歟

た是非もなき次第而已

五條氏は足掃に巧にして大外刈に脆きが如く、中屋氏は大外刈に巧にして足刈には脆きが如し。而も兩氏未だ嘗て一回の取組を試みしとなく、唯其巧技を聞きしに止まりし者、今相ひ敵としてこの場に起つ、足掃先づ掃はる可き歟、大外刈先づ刈らるべき歟、衆皆眼を張つて其動作の如何を見其結局の如何を窺ふ。實にこの一勝負こそ同部負が豫て渴望したりし所なりしが五條氏の技は一步を中屋氏に踰たりけむ。足掃一度効を奏し、二度三度横掛足掃とを合して一本となり遂に勝敗の運を決せり

吉田氏、江間氏は好敵手也。共に是驍將而も戰場に功を經し者なれば其立ち廻りの華手にどことなく上手らしく見えしは當然の數なるべし。第一一本は吉田氏特意の横掛二本三本は江間氏長技の山嵐躰落し。流石也當年の英風凜として顯はれ、久敷これを廢したる人々とも見えず

徳岡氏を以て高梨氏に取組ませむとするは少しく當を失せざらむ歟。徳岡氏の技はしかく巧なりと雖もまた高梨氏と距たるものあるを覺ゆ。然かれども徳岡氏は極めて敏捷に極めて見事に振舞れき、唯其勝印の高梨氏に握られたるはま

事既に始より定まつて而も辭せずして戦はむとする中屋氏豈に快男兒に非ずや。勝敗の事豈に云ふに足らむや

つ見ても見事なるは其技哉。宙を飛んで紅氏の

秋山信次。深澤新一郎。江間圭一。高梨恂一。近藤他家雄。佐藤龜久次(以上二本勝負)の諸

紅氏の飛びたるは即是巴投による也
二本勝負漸く終りを告げこゝに即ち岩崎先生と佐藤氏の初段立合之形及び先生と近藤氏の起倒流之形を行はる前者の壯快なる後者の莊嚴なる北辰子豈にこれを記するの筆を有せむや

二等賞 田邊輝雄。名川彦作。田宮春策。田中正太郎。浦井鏘次。後島與三次。中村孝。(以上二本勝負)。笹川四郎吉。平澤象次郎(以上一本勝負)。五條隆圓。(二本勝負)。大島亮治。大島雄治(以上幼年組亂捕)の諸氏

當日四級の諸氏は證書を授けられ、中屋五條西氏は乙組より甲組に、栗本長谷川中村(孝)石田笹川大森高橋白井の諸氏は丙組より乙組に編入せられたり

◎劍術稽古始
北辰子が好んで劍を彈じ竹刀を揮ひしは既に八九年の昔、しはらく中絶せしより早や三四の歳月を經たり。今やこの盛況に對して往年の志氣勃如として禁す可からず、即ち自から進んで筆をこの記事に執らむと思ふ。然かれども醜て其身を顧れば衷心頗ぶるまどふものなきにあらざ、自から其道に明ならずしてこゝに批評を挾まむ歟、焉んぞ得て同部員の

又當日の試合の結果として賞状を授與せられたるは左の諸氏なりとす
壹等賞 高橋亨。高梨恂一。今井三郎。中屋重業。(以上二本勝負) 大森篤次(一本勝負三人拔)

首肯を得むやど、即ち稻垣氏等に就て聞き、
こゝにこの記を全ふするを得たる也よつて附
記して一言諸氏に謝す

○一本勝負（時間を略す）

○面 加藤・太郎
渡 李貞

○突 渡 李貞
荒本榮三郎

二等賞

○面 北 豊吉
荒本榮三郎

○洞 荒本榮三郎
池永 四郎

○面 池永 四郎
大津 四郎

二等賞

○○小手 澤崎 寛制
大津 胖

○面 大津 順吉
安村 胖

二等賞

○○洞 藤岡 勝二
安村 順吉

○面 安村 順吉
中大路 正雄

二等賞

○○洞 水上 佐太郎
中大路 正雄

○面 中大路 正雄
市川友二郎

○面 市川友二郎
渡邊 九壽松

○○小手 久保 捨藏
渡邊 九壽松

○○面 浦井 鏘次
渡邊 九壽松

○小手 里見 元壽
長谷川 勝造

○洞 長谷川 勝造
中山 清三

○洞 中山 清三
田邊 輝雄

○面 田邊 輝雄
田中崎 太郎

○小手 田中崎 太郎
大島辰之助

○洞 大島辰之助
田宮 春策

○面 田宮 春策
田中正 太郎

○面 田中正 太郎
栗本 貫一

○面 栗本 貫一
河合 一

二等賞

○面 吉川 貞次郎
河合 一

○小手 河合 一
深澤新 一郎

壹等賞

○洞 山口 重作
深澤新 一郎

○三本勝負

第拾組

13m

面 剝面 中屋 重業
(刺)

第九組

4m

面 面 鈴木 寛之助
伴 房次郎

第八組

7m

面 小手 面 中村 春生
白井 精一

第七組

3m

面 面 宮北 友雅
松 下 雅雄

第六組

2m

面 小手 寺本 匠松
永松 文一

第五組

5m

面 洞 奥山 萬次郎
稻並 幸吉

第四組

2m

洞 突 面 高橋 太文
老田 亨

第三組

3m

洞 面 洞 中野 才幸
大石 雄輔

第二組

5m

引分 剝面 小手 山口 重作
島田 志良

第壹組

5m

小手 面 洞 秋田 信太郎
曾我部 俊雄

第拾一組	12m	附 録	草野 正義	第廿一組	2m3.	面	面(師)	松崎 友吉
第拾二組	11m	面	小手(中) 渡邊 辰雄	第廿二組	5m	面	面(中)	飯森 忠三郎
第拾三組	7m.	面	小手(中) 竹中 正造	水野一傳流之形				
第拾四組	3m.	面	小手(師) 白井 丈夫	打太刀(井原 勝吉氏)				
第拾五組	4m.	小手	面(中) 北村 敬二郎	任太刀(廣瀨 頼一氏)				
第拾六組	5m	面	小手(師) 早木 一二	第廿三組	2m	面	面(師)	北川友三郎
第拾七組	2m	面	面(中) 永井 直之	第廿四組	4m10.	突	小手	吉村 盛男
第拾八組	1m40.	面	面(師) 西村 尙俊	第廿五組	1m30	面	面(中)	田村 昌新
第拾九組	5m10.	小手	面(中) 藤田 廉一	第廿六組	4m	面	面(中)	三橋 篤敬
第二十組	5m	小手	小手(中) 篠原 護吉	第廿七組	6m	小手	突(中)	笠間 哲雄
				第廿八組	3m	突	面(中)	押原 三吉
				第廿九組	2m30.	面	面(警)	池田 博成
								杉野佐吉郎
								(薙刀)

▲一本勝負

いでや筆を執りて一本勝負より其概況を綴り始めむ歟

いづも乍ら嫌味を並べ立つる如けれども、一本勝負の諸氏は未だ修業の日も浅く、術の進まざるはまた止むを得ざるべしと雖、素人の眼を樂ましめ臍を捻らしむるものあるは、なほ花角力の滑稽めきしことあるが故歟、僕必ずしも然かりとは云はざれども幾分かこれに類する者あるを疑ふ。思ふに所を定めずしての盲打、術を出さずしての力競、蓋し其一因に歸せずやは。而も人としてはしめより、お師匠様たる者はあらし、多年の精勵は漸く其境に至らしむるもの。請ふ僕をして次の勝負には、天晴武者振見ん事と譽め立つるを許せ、十三日見ずむば刮目してこれを見る可しと云ふ歟。よし僕益大の眼を開て以て向後を見む

第三十組	2m30.	小手	面(警)	下田 豊作
第卅一組	5m	小手	面	野村 淳治
第卅二組	3m3.	面	面(警)	小原外吉郎
第卅三組	5m	面	突(警)	池田 博成
第卅四組	8m	突	面(警)	中屋 重業
第卅五組	8m	面	面(警)	千秋 義章
第卅六組	40	面	面	佐藤甚太郎
第卅七組	4m	面	面(警)	米村幸太郎

水野一傳流之形

柿田 先生
廣瀨 頼一氏

其外市内諸劍客との通常警古幾番

加藤氏破れて渡氏勇み、恰かも羅生門に鬼の腕を取りたらしむと思はるゝ其悦びも、忽ち消えては荒木氏勢羅刹の如く、直ちに北氏を襲ひ去つて池永氏に向ふ。向ふて即ち僵る池永氏意氣豪也。こゝに大津氏相繼いで出づ、妙は大津氏の上段にある也、上段か笑談か僕之を詳にせざるも、兎に角面一本を仕止めたるは更に妙也。而も澤崎氏の精銳も小手をしたゝかに打たれて退き、今大津氏は安村氏を迎へて立ちしも、二度の苦戦に疲れ果てこゝ一本と云ふ所を取はづしぬ。安村氏は二の大敵大津氏を打ち留めしかば、其勢に乗じて藤岡氏を胴切りとなし、更に勢を添えて君にも一本進上せむといひ打込まむどかまゆれば。どつこいそうは參らぬと近眼の中大路氏馳け向ひ馳け戻ると鬪雞の如し（一堂の衆袖を牽きて鬪雞の蹴合といふ當否不關焉唯其評を借つて便にする而已）遂に面にて勝誇たるこの

勇者を斃し尙ほ進んでは水上氏を胴にて撃退しやがて市川氏の面にて討死しき。されど市川氏もまた渡邊氏の面にて敗れ、渡邊氏は續て小手を以て久保氏に面を以て浦井氏に勝ち、こゝに始めて三人殺の大勇士を見る

代りて出でし長谷川氏は里見氏を小手にて取りて中山氏の胴に敗れ、中山氏は田邊氏にまた胴を以て敗られにけり

田邊氏の太刀は割合に巧にしかも整ひたるも時に受太刀に傾くの故を以てか、宛然薪割り流の田中崎氏の面を受け損しぬ

田中氏は其術よりも寧ろ其氣を以て優るかの如し。故に氏にしてなほ一層の修練を積まは其上達も果して尋常人と異なる所あらむ歟。而かも今は達せず遂に大島氏の小手にて敗北しき

大島氏は其術に於ては稍田宮氏にも踰たるべけれど、田宮氏は氣合の法を解せる者歟。氣を以

て敵を挫き、隙に乗して其胴に入る

當然としてこれを見るのみ

流石の田宮氏も遙か上より打下す田中氏の竹刀

▲二本勝負

は受け難かりけむ、遂に面にて其終をといひ、田中氏はまた栗本氏の阿修羅王の如くに暴れ廻るに敵し兼ねむ且つは其術の點より見ても栗本氏優かに其上に出でたれば、急に打込む面を受け損じて退き、栗本氏はまた河合氏の面にて討

秋田氏は其姿の何となく上手らしき割には太刀筋の正しからざるが爲めか。遂に曾我部氏の打込む太刀に胴と面とを拂はれて僅かに小手一本を仕留めたる

たれたり。河合氏の術はなか／＼に巧なりと雖唯一事の氏に向ふて注意を促すものは、氏の小手には常に多少の隙を有するとこれ也。栗本氏にして何爲れそ其の隙に乗ずるとを務めざりしや。落花枝に還らず今更云ふの要なしとするも尙栗本氏に向ふて惜む所也

島田氏の太刀は確かにして山口氏の術は敏かなり。されども島田氏の方或は山口氏よりも一段も上なりけむ、小手の一本奇麗に打込み今は山口氏は躍起となり太刀打は面倒なり。いざや組みむと飛込みしが、流石柔道部四級の勇士、大外刈にて頭顛倒と投倒し上にまたがり敵の面を

深澤氏は新參也とは見受けられざる也、優に一歩を個人の外に踰ゆ。躰勢も整へり太刀も確か也、僕は氏が河合氏の小手に入り、更に山口氏の胴に笠間氏の小手に入りしを疑はず。否寧ろ

は剣き取たり第三本今ぞ勝負の決する所と兩氏の奮闘なか／＼に目醒ましかりしが、互に近寄る其刹那又々大外刈の手は掛り兩氏は學生席へ轉げ込たり山口氏は上に島田氏は下に、えいや／＼と組み合ひしうち判定者泰先生はこれに引

分を命したり

大石氏は中野氏に比しては其姿勢如何と思はるゝ、節も見ゆれど、さては敏捷しこく立廻りて面胴の二本を取り最後の一本は左胴にて譲りたりき、大石氏の剣を學びしは日未だ深からずと雖非常の熱心は今回の勝利を見る。大石氏たるものそれ益々勉めざるべしむや

平日の誓古にては高橋氏は寧ろ老田氏に比して上手とか聞き込しも、この勝負には如何してけむ高橋氏の術左迄に出です。却て面胴に敗れ僅かに突一本を取止めたるが如き、焉んぞ怪訝に堪えざらむや

稻並氏は敏にして奥山氏は正。奥氏の特意の小手は絶えず稻氏に向ふて打込みしも遂に其効を見るに至らず、却て二本の左胴に成効しき。而も早太刀の稻氏が既に二本の敗を見て、せめては最後の一本をと雨霰の如く打込みし太刀は幸

に一本を奥氏面上に加へたり

寺本氏の打太刀こそ却て永松氏に比ては巧の如く見受けられしも勝負の一點はまた別者なる哉小手と面との二本を永松氏に取られ終んぬ

松下氏は暫らく剣術を廢せし爲め、立派なる腕前ながら何となく打つ竹刀の鈍かりしが如く、宮北氏は三十餘日の寒誓古に鍛にし腕前とてなか／＼に上發しければ遂に二本の面を取れり

白井氏を迎へ撃つ中村氏は、寒誓古の功も積み其太刀さへも去歳とは頗る異なるを覺ゆされども白井氏は醫學部の驍將、而も長髓彦たる氏の長身には、打ち下す太刀さへなか／＼に効目多かりしけむ、遂に中村氏の敗に歸せしは惜むべかりし

伴氏は面々を以て鈴木氏を止めたるも、氏に向ふては勝利にも關らず一語の以て寄せむと欲する者あり、腕力なる者を顧よこれ氏に於て更

に益なく寧ろ其術を阻むる障害物たるを思へ

刺又を手としたる杉野氏、一剑を掲げたる中屋氏。呼吸をはかりて輕々其手を下さず時に擲めむとすればこれを拂ひ、時に打たむとすればこれを支へ。勝負決せずして中屋氏即ち太刀投捨て直ちに迫つて杉野氏を大外刈にて倒し。倒せし刹那既に面をは剥き取りたり。第二本は面を以て又中屋氏の勝。而も奮戦の際刺又上部より折れ即ち杉野氏は代ゆるに薙刀を以てし、足薙と面との相打するところ五六回、即ち爲めに其試合を止む

いでやこれより各校生並に警察連との勝負に遷らむ歟。勝敗の運如何果して如何。雲冉冉たり水漫々たり。大勢の歸するところはすでに已に定まる、豈に憂るを要せむ。由來我校の健兒氣を以て勝さる。何んぞ妄りに人後に立つ者とせむや

公平を守りて秦先生は判定席を劍術師範者野村

政行氏に譲れり

敵乍らも清水氏は敢て草野氏の相手には非ざるべし二本の小手や一本の面やいと見事に取られたり。あゝ草野氏にして去歳より更に倦怠するとなく、修行を積みてこの勝負に臨みたらむには、まさかにかゝる敗北もとるまじきに

出たりな出たり瀧山氏、修行一年に滿たずして上達實に著しく而も整勢嚴として亂れず、打太刀法にかなひて正しく。小兵ながらも尋中勇士の譽高き渡邊氏をは面二本にて打止めたるどころ、さても天晴候初陣の御手柄

中谷氏の癖として頼りにあせる如きは、なか／＼に見苦しければ反省を請はんと欲す。中谷氏と(中)竹中氏と其術に至てはさしたる差なかりしも、如何なる機會なりけむ胴小手を取られたるは残念也

田鶴濱氏と師校の白井氏との勝負は殆んど同前の結果を示したりき、二本、胴小手を敵手に取られ僅かに一本の面をは取留めたる如き、たゞ田氏に至ては中氏の如くにあせらざるも却て躊躇せし傾なかりしにや敢て問ふ

池田氏は尋中の北村氏に比して數等の差あるが如し、而も徒らに虚刀を弄せず隙に乗じて直ちに面と小手に入る、先づ見事なる勝とは申さむ歟

河野早木(師)兩氏其技伯仲たらしむ歟。あゝ碧潭の金龍今や雲を呼んで騰る。試合の前日河野氏吉報を得、多年の素志一朝達しては即ち士官候補生となる、それ胸に悦あり豈に意氣の以て添ゆる者なからむやは。一喝再喝。跳つて下す太刀は鳴つて聲あり

武田氏面胴を以て勝ち永井氏(中)悄然として敗す。若し忌憚する所なくして云は、氏の敗は

一に竹刀を使ふの癖あるに歸せむ歟、永井氏たる者希くは勉めよ

武内君は暫らくの間に、見違ゆる程となれり。一たび竹刀を下すまた敵をして争ふことなからしめたり、勉強の効は僕竹内君に見る、即ち諸氏に示すに此標準を以てし、大に部員の精勵を促さむと欲する者也。あゝ武内氏にして既にこの本領より師校の西村氏の敗るゝまた當然として見む歟

滑磬なりと云はむか無茶也と云はむか抑亦無禮なりと云はむか尋中の藤田氏、毫も劍術の禮を以て始まり禮を以て終るを知らず。終始駄言を弄したる彼れは口に於てはしかく達者なるも、其術に至てはさても御鹿末や。遂に野崎氏の爲めに果敢なくも打倒されき

敵乍らも篠原氏の術は或は永岡氏に比して遙か

に其右に出でしならむ歟。遂に小手三本を以て

長大なる永岡氏を打拂ひ終んぬ

一度面を取られて二度面を取りしは川越氏也。

氏は夙に尋中にあつて其聲名を博したるが今は來つて我校の部員となる。勉よや氏、希くは愈奮發して以て我部に聲名を擅にせよ、僅かに一

松崎氏に勝て以て足れりと爲す勿れ

尋中の飯森氏に敵たりし三好氏は、老功の腕前丈ありて流石に見事なりき。而も老功の人は往々にして其技藝を中絶し、却て新參の士の壓倒

するところとなる者あり、氏にして益々勉むるあれは、これ實に我部の幸甚也と云はむ歟

此勝負に次て行はれたるは水野一傳流之形也

飛龍劍

打太刀 井原勝吉氏
仕太刀 廣瀬頼一氏

右足

仕打 廣井

左足

仕打 廣井

無心劍

仕打 廣井

中合刀

仕打 廣井

相合刀

仕打 廣井

井原廣瀬の兩氏は共に市内の劍術師範也、我校の學生にして其門人たる者亦少なからざる也、今や兩虎木太刀を以て相對す、眼光閃々として毛骨爲めに懔然たり其光景の如き僕豈にこれを寫すの筆を持たむや

流石は師校のチャムピオンなり鋤鐵にて鍛に上げし躰の中々にすばらしく、其上の安部貞任もかくやと思はれし北川氏も、術に至ては争はれぬものにや、吉村氏の爲めに小手面を取られ、これに代ゆるに唯胴の一本を以てせしのみ

田中氏と山原氏との勝負は極めて無味なりき無味なるは上手なるを示すかは僕未だ詳にせざるも、無味の筆を以て無味の試合を寫さむか、讀

者に與ふるに無味の骨頂を以てするの恐れあればこゝにこれを止めむ。唯夫勝は突と小手を以て山原氏に歸せり

佐々木氏は近來めつきり上達したりとは衆評の歸するところなり、果然氏は面、面を以て尋中の剛敵田村氏に打勝たり、思ふに向後同部が氏に任ずる所決して少なきに非ざるべし

劍術狂の名ある中村氏が三本共尋中の三橋氏に取られたるは皆も遺憾なり。しかれども三橋氏の術遙かに氏の上に出たりとすれば、また止むを得ざるもの歟。さはれ來ん年の試合には君の熱心を以てすれば、極めて大々氣焔を吐かるべきを信じて疑はざる也

手強き大敵笠間氏を物の見事に打負かしたる佐藤氏は、流石に運動のチャンとして恐れざるを得ざる也。ベースボールもローンテニスも、將た柔道も氏が人に譲るを肯んぜざる所、あに氏

また多藝の士なる哉

押原氏は並大抵の敵に非ず而もこれと試合ひたるは誰ぞ戸川氏に非ずや。戸川氏が嘗て名聲を同部員に知られたるとありとするも、試合を除て爾來一度も、顔を無聲堂に出さざるに、今や此大敵と其勝敗を決せむとするに至ては、僕が頗る怪て且つ疑ひし所、勝敗の運の如き、寧ろ當然として見るのみ

尋中師範との試合はこゝに終を告げこれより直ちに警察先生の勝負に遷らむ歟

眼睛を失却すれば天下黒し、焉んぞ得て五彩を辨するを得むや。薙刀をかひ込たる杉野氏は幾度か足薙に入れり、判定者の小首は屢々傾きしも而も其勝を呼はむとはせざりき。唯夫池田は劍なり面にまれ胴にまれ、一見して直ちに其當りを見るべし、池田氏は幸なり杉野氏は不幸なり、餘事は僕不知焉

藤田氏に至ては同部屈指の勇士、誓古に敏捷なりと評せらるゝ下田氏をへこませしは、誠に見事なる御手際なりき。あゝ其腕前に添ゆるに彼の熱心を以てす。月に歳に軫々乎として上達せむこと、誰れかまたこれを疑ふ者あらむや

敵は名にし負ふ廣松氏なれば野村氏の苦心はさこそと思はれたるが漸く小手一本を取止めたるは幸なりき。勝たりとも負けたりとも何かあらんや。僕は氏の舉動の如何にも奇麗に毫も卑陋の振舞なかりしを愛す、

十有年來未だ嘗て竹刀をはなさざりし同部の老将、姓は稻垣氏名は文次郎君。其相手として警察の豪の者小原氏なれば其試合の如何に盛なりしかは想見するに餘あるべき也、さはれ相手は御職分柄とてさても見事と存せしもあはれ見事に取けて退きたり

短身なる信濃氏は、さきに杉野氏に勝たる池田

氏に向へり、流石に數年前に目録を授かりたる氏の腕前はさて確かなるものなりき。打込む太刀の鋭き早き宛然亂れ打つ霞の如く、其身を動かすまた更に敏に、之を瞻れば前にあり忽焉として後、第一本の突の見事なる第三本の面の華手なる難なく長大の髯男を打伏せ終んぬ

又候顯はれしは、河野君と其運命を同ふし、今日よりは士官候補生の肩書ある中屋氏なりけり、相手としは千秋氏。打ちつ受けつ其太刀は、恰もこれ撃石火閃電光、猛虎深山に靠つて嘯けは、獐龍碧潭に依つて吟ずるが如く、何れか勝ち何れか敗れむと満堂三百の衆は手に汗握つて見入りたるが不幸にも中屋は一面を得るのみにて面突を千秋に譲り終んぬ

廣松巡查は又顯れたり、これに對して柔道部の師範たる岩崎氏。あはれ一本だも打込まれなば其時こそは先生得意の組打ならむ歟。廣松氏は

其敵を見てすは大變也近寄べからずと思ひしにや。其太刀筋も割合に臆みたるかの如しこゝに於て先生愈得意也、組打をほのめかして遂に小手二本を取りしは至極妙なりし

これも警察のユラモノなる米村氏にあたりしはさきの佐藤氏なりしが、遂に二本の面を以て敗られたるは是非もなき次第なりけり

平田松尾兩氏に至ては既に／＼老人株也僕の黄嘴を翻して呶々するは寧ろ言はざるの勝れるに如かむや、請ふ其勝敗はこれを前表に照らせよこれを以て當日試合の終りを告げこゝに廣瀬氏柿田先生との一傳流の形あり

右 劍

打太刀 柿田 先生
仕太刀 廣瀬頼一氏

左 劍

打 柿
仕 廣

以上の形終ては市内諸師範家の地替古數組を行ひ、即ち劍術誓古始の式を終ふ

當日去歲二月十日の日附を以て四級の證書を

授與せられしは中屋信濃稻垣の三氏五級は野崎

三好石田林(安)岩倉野村近藤(雋)藤田(良)佐藤

(龜)戸川中村(光)田中の諸氏にして、平日の誓

古を以て當日進級せるは四級へは野村近藤佐々

木(政)佐藤藤田戸川中村の諸氏。五級へは武田

白井永岡鈴木(寛)宮北伴瀧山河野草野稻並奥山

中村(重)中村(春)の諸氏なりき

勝敗の結果によりて賞状を授けられしは

壹等賞 渡邊九壽松、深澤新一郎、(中)清水

多計雄、(中)篠原讓吉、(中)三橋篤敬、(中)

押原三吉、の諸氏

貳等賞 荒本榮三郎、大津胖、安村順吉、中

大路正雄、河合鷹、曹我部俊雄、大石雄輔、

老田太文、奥山萬次郎、永松文一、宮北友

吉、白井精一、伴房次郎、中屋重業、瀧山

與、(中)竹中劍三、(師)白井大夫、池田耕、

河野義雄、武田正壽、武内梅吉、野崎安近、

川越留吉、三好久明、吉村盛男、(中)山原

外吉、佐々木政直、佐藤龜久次、(警)池田博

成、藤田良平(警)廣松甚太郎、稻垣文次郎、

信濃榮三郎(警)千秋義章、岩崎法賢(警)

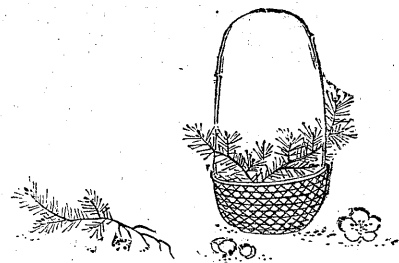
米村幸太郎(警)松尾金吾の諸氏也 (完)

先に僕が筆を大運動會記事に採り、第七號の附録として一度本誌に顯はるゝや、誰何する者頗多く爲めに幾分の煩雜を感じ、且つ多少の攻撃を他の編輯子に及ぼせしをお御氣の毒と思ひたれば此度は本大會記事に其名を暴露し、敢て責任の途を開く

編輯員の末席を汚す

吐虹 森山守次記





投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さるべし

明治二十九年三月十八日印刷
全 年三月二十日發行

編輯兼發行者

中 川 忠 順

印刷者

中 村 孝

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

株式會社 英 舍

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

